

下箱田向山遺跡



一般国道17号(真壁交差点改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

下宿田向山遺跡 正誤表

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行等	誤	正
例 首	26	真北	座標北
7	5	くまび形石器	楔形石器
29	図30		
45	36号土坑	L189.60m	L=169.60m
71	28号土坑出土遺物	(欠落)	縮尺 1/3
73	3	5・12・13・28・48土坑	5・12・13・28・48号土坑
"	8	7点	17点
86	13	榧	榧
95	26	器形状	器形上
"	35	相俣って	相俣って
97	14	判明された。	判明した。

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-351
	調査事業団保管	91
No. 98-4915	平成10年5月13日	(8)

下箱田向山遺跡

一般国道17号(真壁交差点改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

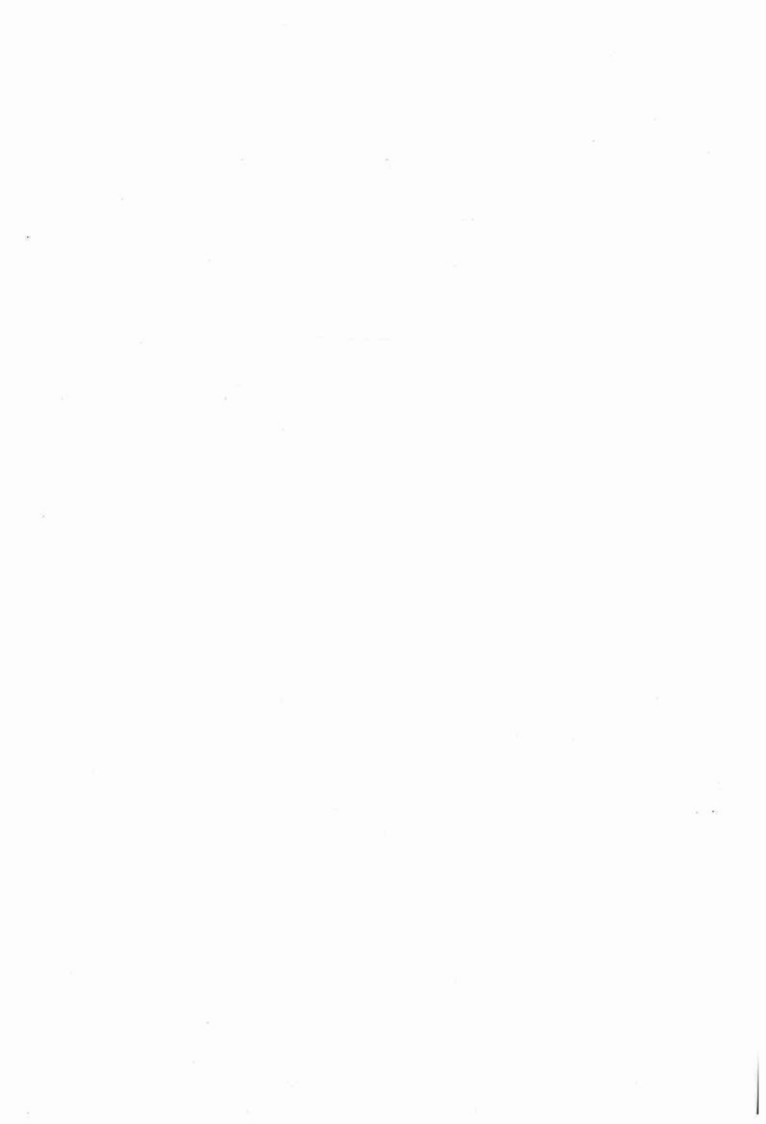
建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 遺構全景(縄文時代・北西より)



2 箱田城(城山・左方)と速構堤(1号溝・右方)





1 5号住居跡出土土器(縄文時代・前期)



2 8号住居跡出土土器(縄文時代・前期)

序

波川市半田と勢多郡北橋村真壁をつなぐ一般国道17号線の坂東橋は、坂東太郎こと利根川にかかる橋で県民生活にとって欠かせない橋です。利根川左岸には、坂東橋に接して真壁交差点があります。この坂東橋及び真壁交差点は、近年の交通量増大と共に交通渋滞が激しくなっています。

建設省では交通渋滞解消のため真壁交差点の改良工事を行うことにしましたが、工事区域内に埋蔵文化財包蔵地（下箱田向山遺跡）があるということで、記録保存のための発掘調査が当事業団に委ねられました。

当事業団では、平成元年1月から3月にかけて発掘調査を行い、縄文時代の住居跡8軒、土坑、中世の箱田城跡に関係する遺構等を調査し、地域の歴史を解明する上での貴重な資料を得ることができました。これら資料は、本年度報告書作成のための整理事業を行い、本報告書を刊行することができました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、北橋村教育委員会、地元関係者等多くの方々のご指導、ご協力、ご援助を賜りました。ここに関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が県民各位、研究者、教育機関等に広く活用され、本県の歴史を解明するための資料として役立てられることを願ひ序とします。

平成2年2月19日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は一般国道17号（真壁交差点改良）工事に伴う下箱田向山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県勢多郡北橋村大字下箱田字向山473～477番地に所在する。
3. 本遺跡の名称は、遺跡所在地の大字と小字を併記して、「下箱田向山遺跡」と呼称する。
4. 本調査の事業主体は建設省関東地方建設局であり、発掘調査および整理事業については(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
5. 調査・整理体制および期間は下記のとおりである。

発掘調査 調査研究第2課長 板場一寿

調査担当 飯島義雄・神谷佳明・石北直樹

調査期間 1989年1月4日～同年3月31日

整理事業 調査研究第2課長 板場一寿

整理担当 飯島義雄

遺物・図面整理、図版作成等

阿部たみ子、井野さゆり、井野千春、小林清美、佐藤滋美、佐藤文江、

高橋朝子、田中八千代、保坂照子、水野さかき、平井初江、真下桂子、

村岡洋子、矢嶋克世

遺物写真撮影 佐藤元彦

遺物の保存処理 関 邦一、北爪健二、小村浩一

事務担当 白石保三郎、邊見長雄、松本浩一、田口記雄、神保佑史、住谷 進、

笠原秀樹、小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏

整理期間 1989年4月1日～1990年3月31日

6. 山崎 一氏、宮崎重雄氏、鈴木正男氏、戸村健児氏、金山喜昭氏には専門的立場から、それぞれ玉稿を賜った。
7. 石器石材の同定は、飯島静男氏に依頼した。
8. 展開写真は小川忠博氏に依頼した。
9. 挿図の方位は真北である。
10. 遺物出土状況図中の表示は次のことを意味する。

土器 ● 石器 △ 礫 ○

11. 本文の執筆は下記のとおりである。

石北直樹 第5章1～4・第7章2 神谷佳明 第5章5

関根慎二 第4章4-(1)・縄文土器観察表 原 雅信 表9

板井美枝 第6章1 飯島義雄 上記及び第6章を除いた部分

12. 本書を作成するにあたっては、群馬県立文書館、北橋村教育委員会、富澤敏弘氏、近藤尚嗣氏に御援助を戴くとともに、原 雅信氏、女屋和志雄氏、関根慎二氏、大西雅広氏、樋口伸男氏に格段の協力を得た。明記して心から感謝申し上げる。

目 次

巻頭写真

序

例言

第1章 調査の経過と方法	1
第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
第3章 基本土層	4
第4章 縄文時代の遺構と遺物	5
1. 竪穴住居跡	6
2. 土坑	43
3. 溝	54
4. 遺構外出土の遺物	56
(1) 土器	56
(2) 石器	58
(3) 粘土塊等	59
第5章 中世以降の遺構と遺物	64
1. 溝	64
2. 29号土坑(墓墳)	68
3. 土坑	72
4. 柵列	72
5. 陶磁器	73
第6章 特論	75
1. 8号住居跡出土の石器の接合資料	75
2. 黒曜石の分析	81
3. 箱田城	86
4. 29号土坑(墓墳)出土の人骨	88
第7章 まとめ	93
1. 縄文時代の遺構と遺物	93
2. 中世以降の遺構と遺物	97

図 版 目 次

図版 1	1	地籍図	図版19	3	5号溝全景(南西より)
	2	調査区と航空写真		4	7号溝・8号溝全景(北より)
図版 2	1	調査区透景(遠方・城山より)	図版20	1~7	1・2・3・4・5・6・7号土坑全景
	2	調査区透景(西方・利根川対岸より)		8	8号土坑・20号土坑全景
図版 3	1	調査区全景(縄文時代・上空より)	図版21	1~8	9・10・11・12・13・14・15・16号土坑全景
	2	調査区全景(中世以降・上空より)	図版22	1~8	17・18・19・21・22・23・24・25・26・27・28号土坑
図版 4	1	5号住居跡全景(西より)	図版23	1・2	28号土坑
	2	5号住居跡埋土断面(西より)		3~7	29号土坑
	3	5号住居跡埋土断面(南より)	図版24	1~3	30・31・32号土坑
	4	5号住居跡遺物出土状況(西より)		4	1号櫛判と2号櫛判
	5	5号住居跡掘り方全景(西より)		5	2号櫛判
図版 5	1	8号住居跡全景(西より)		6	ひすい(?)製玉出土状況
	2	8号住居跡埋土断面(南より)		7	旧石器試験掘坑断面
	3	8号住居跡遺物出土状況(西より)		8	調査風景
	4	8号住居跡が(南より)	図版25	5	5号住居跡出土遺物
	5	8号住居跡掘り方全景(西より)	図版26	8	8号住居跡出土石器(1)
図版 6	1	1号住居跡全景(東より)	図版27	8	8号住居跡出土石器(2)
	2	1号住居跡遺物出土状況(東より)	図版28	1~7	8号住居跡出土石器
	3	1号住居跡掘り方全景(東より)		8	8号住居跡出土炭化物
図版 7	1	3号住居跡全景(東より)	図版29	1	1号住居跡出土石器
	2	3号住居跡遺物出土状況(西より)		2~4	1号住居跡出土石器
	3	3号住居跡遺物出土状況(部分・北より)		5	3号住居跡出土石器
	4	3号住居跡が(西より)	図版30	1~4	3号住居跡出土石器
	5	3号住居跡掘り方全景(西より)		5・6	2号住居跡出土石器
図版 8	1	2号住居跡全景(東より)	図版31	1	2号住居跡出土石器
	2	2号住居跡埋土断面(東より)		2~4	2号住居跡出土石器
	3	2号住居跡遺物出土状況(東より)		5・6	6号住居跡出土石器
	4	2号住居跡が(東より)		7・8	6号住居跡出土石器
	5	2号住居跡掘り方全景(西より)	図版32	1・2	4号住居跡出土石器
図版 9	1	6号住居跡全景(北より)		3・4	4号住居跡出土石器
	2	6号住居跡埋土断面(南より)		5・6	7号住居跡出土石器
	3	6号住居跡埋土断面(東より)		7・8	7号住居跡出土石器
	4	6号住居跡遺物出土状況(東より)	図版33		遺構外出土の石器
	5	6号住居跡掘り方全景(南より)	図版34		遺構外出土の石器
図版10	1	4号住居跡全景(西より)	図版35		遺構外出土の遺物
	2	4号住居跡遺物出土状況(西より)			28・35・36号土坑出土石器・石器・礫
	3	4号住居跡掘り方全景(西より)	図版36	1・2	37号土坑出土石器・礫・炭化物
図版11	1	7号住居跡全景(東より)		3~5	38号土坑出土石器・炭化物
	2	7号住居跡遺物出土状況(西より)		6・7	39号土坑出土石器・石器・礫
	3	7号住居跡遺物出土状況(北より)		8	40号土坑出土石器
	4	7号住居跡が(東より)	図版37	1~5	41号土坑出土石器・石器・炭化物・礫
	5	7号住居跡掘り方全景(北西より)		6~8	43号土坑出土石器・石器・炭化物
図版12	1	2号溝全景(南より)	図版38		44号土坑出土遺物
	2	2号溝全景(北より)	図版39		45号土坑出土石器・石器・炭化物
	3	2号溝遺物出土状況(北より)			48号土坑出土石器・石器・炭化物
	4	2号溝埋土・覆土断面(南陸部・北より)	図版40		51号土坑出土石器・石器
図版13	1~8	33・34・35・36・37・38号土坑			54号土坑出土石器・石器・礫・炭化物
図版14	1~8	38・39・40・41・42・43号土坑	図版41		55号土坑出土石器・石器
図版15	1~8	44・45・46・47・48号土坑			56号土坑出土石器・石器
図版16	1~8	48・49・50・51・52・53・54号土坑			2号溝出土石器・石器
図版17	1~4	55・56号土坑	図版42		8号住居跡出土の接合資料
	5	1号溝全景(上空より)	図版43		29号土坑 1号人骨
図版18	1	1号溝全景(南より)	図版44		29号土坑 2号人骨
	2	1号溝全景(北より)	図版45		29号土坑 2号人骨と古銭密着状況
	3	1号溝埋土断面(南より)	図版46	1	29号土坑出土古銭
	4	1号溝遺物出土状況(北より)		2	陶磁器
図版19	1	3号溝全景(北より)			
	2	4号溝・6号溝全景(南西より)			

挿 図 目 次

図1 下瀬田向山遺跡の位置	1	図41 4号住居跡出土遺物	39
図2 調査地の範囲と発掘区の設定方法	2	図42 7号住居跡 (1)	40
図3 遺跡周辺の地形と遺跡の分布	3	図43 7号住居跡 (2)	41
図4 旧石器文化層の試掘坑	4	図44 7号住居跡出土土器	41
図5 基本土層柱状図	4	図45 7号住居跡出土土器	42
図6 5号住居跡	6	図46 土坑 (1) (33~40号土坑)	45
図7 5号住居跡遺物出土状況	7	図47 土坑 (2) (41~49号土坑)	46
図8 5号住居跡出土土器 (1)	8	図48 土坑 (3) (50~56号土坑)	47
図9 5号住居跡出土土器 (2)	9	図49 土坑出土遺物 (1) (35~39号土坑)	48
図10 5号住居跡出土土器	10	図50 土坑出土遺物 (2) (40・41号土坑)	49
図11 8号住居跡 伊	11	図51 土坑出土遺物 (3) (43・44号土坑)	50
図12 8号住居跡	12	図52 土坑出土遺物 (4) (44・45号土坑)	51
図13 8号住居跡遺物出土状況	13・14	図53 土坑出土遺物 (5) (45・48・51号土坑)	52
図14 8号住居跡出土土器 (1)	15	図54 土坑出土遺物 (6) (54~56号土坑)	53
図15 8号住居跡出土土器 (2)	16	図55 2号溝	54
図16 8号住居跡出土土器 (3)	17	図56 2号溝出土遺物	55
図17 8号住居跡出土土器 (4)	18	図57 遺構外出土土器	57
図18 8号住居跡出土土器 (1)	19	図58 遺構外出土土器 (1)	60
図19 8号住居跡出土土器 (2)	20	図59 遺構外出土土器 (2)	61
図20 1号住居跡	21	図60 遺構外出土土器 (3)	62
図21 1号住居跡遺物出土状況	22	図61 遺跡外出土土器 (4)	63
図22 1号住居跡出土土器	22	図62 1号溝	65
図23 1号住居跡出土土器	23	図63 3・4・6号溝	66
図24 3号住居跡 (1)	24	図64 5・7・8号溝	67
図25 3号住居跡 (2)	25	図65 29号土坑 (基壇)	68
図26 3号住居跡遺物出土状況	26	図66 29号土坑 (基壇) 出土古銭	68
図27 3号住居跡出土土器接合状況	26	図67 土坑 (1) (1~3・6~8・10・20号土坑)	69
図28 3号住居跡出土土器	27	図68 土坑 (2) (9・12~19号土坑)	70
図29 3号住居跡出土土器	28	図69 土坑 (3) (21~25・27・28・30号土坑)	71
図30 2号住居跡 (1)	29	図70 1・2号溝列	72
図31 2号住居跡 (2)	30	図71 陶磁器	74
図32 2号住居跡遺物出土状況	31	図72 接合資料 (1)	77
図33 2号住居跡 伊石 (石皿の転用)	31	図73 接合資料 (2)	78
図34 2号住居跡出土土器 (1)	32	図74 接合資料 (3)	79
図35 2号住居跡出土土器 (2)	33	図75 接合資料 (4)	80
図36 2号住居跡出土土器	34	図76 黒曜石分析対象試料	85
図37 6号住居跡	35	図77 稲田城	87
図38 6号住居跡出土土器	36	図78 1号人骨	88
図39 6号住居跡出土土器	37	図79 2号人骨	89
図40 4号住居跡	38	図80 主な縄文土器	94

表 目 次

表1 縄文時代の住居跡一覧	5
表2 縄文時代の土坑一覧	5
表3 29号土坑 (基壇) 出土古銭一覧	69
表4 中世以降の土坑一覧	70
表5 陶磁器観察表	73
表6 黒曜石分析試料一覧	83
表7 1号人骨の歯牙に関する記録	91
表8 2号人骨の歯牙に関する記録	92
表9 縄文原骨種別集計表	93
表10 縄文土器観察表	98
表11 縄文時代の石皿観察表	104

付 図

- 付図1 縄文時代の遺構配置図
付図2 中世以降の遺構配置図

第1章 調査の経過と方法

一般国道17号は前橋方面から渋川に向かって北上し、北橋村真壁で南東流する利根川を渡る。その橋詰めが交通渋滞をきたすため、東側の急傾斜地を削平し、拡幅することとなり、崖上の埋蔵文化財包蔵地の記録保存を構想することとなった(図1)。

発掘調査は1989(昭和64)年1月から3月まで実施した。調査対象面積は2800㎡である。調査地が急斜面に接しているため、傾斜地際から内側に2mの安全帯を設け、調査対象地から除外して調査を実施した(図2)。

調査は、まず表土掘削のため掘削重機(バックホー 0.7m)を使用し、主に中・近世の遺構の検出を行ない、溝・土坑を中心とした調査を実施した。その後、さらに重機で掘り下げ、縄文時代の遺構を確認し、縄文時代前期を中心とした竪穴住居跡8軒と土坑等の調査を実施した。縄文時代の遺構の調査にあたっては、特に土坑の性格を追求する一助として、埋土の水洗選別を行ない、微少遺物の抽出に努めた。

縄文時代の遺構調査終了後、旧石器文化層の有無を確認するため、3×2mの試掘坑を7ヶ所設定し、いわゆる「暗色帯」を除去するまでを目途として、人力で約2m掘り下げたが、遺物の出土は認められなかった(図4)。

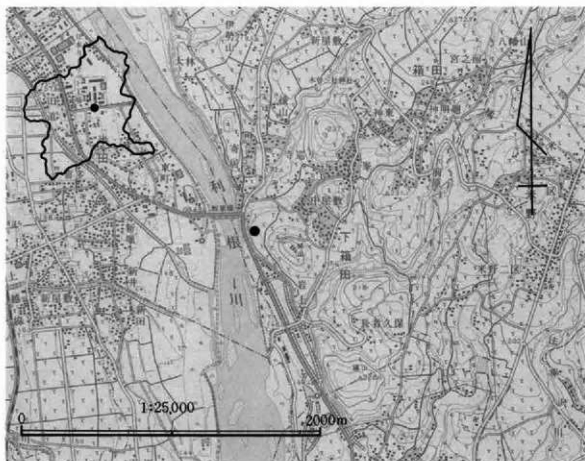


図1 下箱田向山遺跡の位置(国土地理院 1:25,000 前橋)

第1章 調査の経過と方法

調査区の設定にあたっては、日本平面直角座標系の第IX系（原点 経度 $139^{\circ}50'0''.000$ 緯度 $36^{\circ}0'0''.000$ ）の $X=51.2\text{km}$ 、 $Y=-70.9\text{km}$ を測量上の原点とし、調査地上に 100m ごとのメッシュをかけ、 $X=51.2\sim 51.3\text{km}$ 、 $Y=-70.9\sim -71.0\text{km}$ の範囲をA区、 $X=51.3\sim 51.4\text{km}$ 、 $Y=-70.9\sim -71.0\text{km}$ をB区、 $X=51.3\sim 51.4\text{km}$ 、 $Y=-71.0\sim -71.1\text{km}$ をC区とし、さらに、各区を 4m ごとのグリッドに区切り、各区の南東隅を基点とし、X軸を南から北へAからYまでのアルファベットで、Y軸を0から24までの数字であて、それぞれのグリッドの呼称は南東隅にあてられたアルファベットと数字の組み合わせとし、各区名称を冠して各グリッドを特定することとした（図2）。

なお、調査区は上述のように急傾斜地に接するとともに強風地帯に位置するため、急傾斜地側には鋼板による仮囲いをたて、北側から北東部にかけては防塵ネットを張り、作業上の安全と作業効率の向上をはかった（図版24-8）。

また調査地の東側隣接地では、1987（昭和62）年度に県営富士見・北橋地区は場整備事業に伴い、道路予定地の発掘調査が実施されている（図2）。

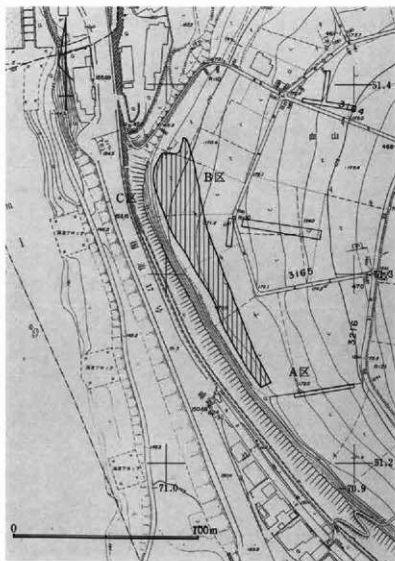


図2 調査地の範囲と発掘区の設定方法（東側トレンチは北橋村教委調査）

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

下箱田向山遺跡は、群馬県域の中央部からやや北東方向に聳える赤城山（標高1828m）の南西麓末端部にあり、南東流する利根川により浸食された崖上に位置する（図3 ①）。発掘区中央部の標高は約171mで、利根川の現河床面との比高は約26mを測る。発掘区の東方には比高差約42mの城山（標高213m）がある。この城山は、沢を挟んで東南方向に位置する横山（標高228m）などとともに、赤城山の火山活動上、斜面状の山麓が形成される以前の、かなり初期に発生した大規模な火山泥流がつくった孤立丘群の一つとされる（沢口 1976）。この城山の中心部はドーム状を呈するが、北西麓と南麓方向には緩やかな傾斜地が連なる。その北西麓に位置するのが本調査区であり、南麓に位置するのが縄文時代早期の住居址群が検出された「城山遺跡」(②)である。なお、報告書「城山遺跡」（北橋村教育委員会 1989）では、本調査区も含めて「城山遺跡」としているが、地点が異なり、遺跡の営まれた時期も峻別されることから、遺跡名をあえて別にした。

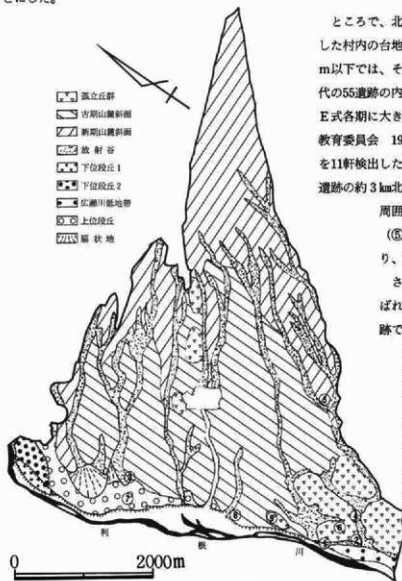


図3 遺跡周辺の地形と遺跡の分布（原図は沢口 1976）

ところで、北橋村教育委員会が1985年度に実施した村内の台地部分の分布調査によれば、標高450m以下では、その約8割が遺跡地とされ、縄文時代の55遺跡の内、黒浜式、諸磯式および加曾利E式各期に大きな盛期が認められている（北橋村教育委員会 1986）。また、縄文時代前期の住居跡を11軒検出した関越道分郷八崎遺跡(③)は、本遺跡の約3km北西の地にあり、かつ、本調査区の周囲には東麓遺跡(④)や八幡山遺跡(⑤)などの該期の遺跡が存在しており、当遺跡との関連が問題となる。

さらに、城山は「箱田城(⑥)」と呼ばれ、戦国期に築造されたとする城館跡であり、本遺跡より北西方向の利根川沿いの孤立丘上などには、八崎城(⑦)、厚原城(⑧)、真壁城(⑨)などのやはり戦国期の城館跡がある。箱田城は単郭堡とされてきたが、本調査により関連施設の有無を確かめられる可能性が存在していたのである。

第3章 基本土層

本遺跡内は東方から西方にかけて緩やかに傾斜しているが、ほぼ均一の土層堆積状況を示していた。土層の上部については遺存状況の良い、遺跡中央西部の2号溝南端部における堆積状況を基準とし、下部については旧石器文化層の試験坑(図4)における土層を基にして、本遺跡の基本土層を把握した(図5)。

I層 暗褐色の耕作土。約30cm。 II層 黒褐色土で、椋名-二ツ岳軽石(FP)の小礫を含む。約10cm。
III層 FP小礫をやや多く含む暗褐色土。10~20cm。 IV層 FPの小礫を多く含むぶい黄褐色土。約8cm。
V層 パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した分析により、6世紀初頭の椋名-二ツ岳火山灰層(F A)と確認された。本層は、「桃灰色の細粒火山灰からなる下部と径の大きい軽石をまじえる褐色火山灰層からなる上部に区分することができる。上部の軽石の最大径は、82mmにも及ぶ」とし、「椋名-沢川テフラ層(Hr-S)」「早田 1989)の細分によれば、「下部の火山灰層は水蒸気マグマ爆発に由来するS-1に、上部の粗粒軽石は小規模な軽石噴火に由来するS-8に、そして上部の細粒火山灰は火砕流(S-10)の流動中に舞い上がった降下火山灰(S-11)」に対比された。約6cm。 VI層 黒色土。パリノ・サーヴェイ社の分析により、粗粒軽石の濃集部が認められ、4世紀中頃の浅間C軽石(As-C)に対比された。約20cmで2号溝を

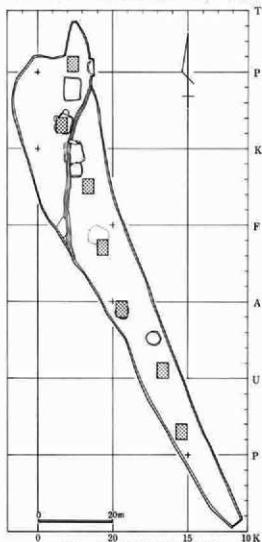


図4 旧石器文化層の試験坑

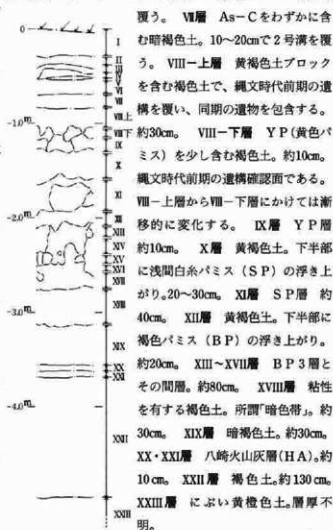


図5 基本土層柱状図

第4章 縄文時代の遺構と遺物

発掘区は東北から西方への緩斜面上にあり、南東から北西にかけての急斜面に添った長さ約150mで、南端部で幅4m、北部で幅22mと南部から北部にかけてやや広がる細長い形状である。縄文時代の遺構は、1基の土坑を除いて、発掘区の中央部から北部にかけて、等高線にほぼ沿うような状態で検出された。

検出された主な遺構は、住居跡が8軒(表1)、土坑24基(表2)、溝1条である。これらのうち、溝は、中世以降の遺構検出のために表土を除去した時点で検出され、他は中世以降の遺構の発掘終了後、再度、重機で掘削した後に検出されたものである。

住居跡の時期は、不確定要素は残しながらも、関山Ⅱ式期3軒、黒浜・有尾式期2軒、前期後半2軒、中期後半1軒であり、縄文時代前期前半から中葉にかけてが中心であり、切り合い関係は1号住居跡と2号住居跡の間で認められた。4号住居のおそらく過半部は発掘区域の東側に延びるものと想定され、発掘できたのはその一部である。2号溝と呼称した溝は、発掘区の北部から中央部にかけて、ほぼ等高線に沿うように検出されたが、所属時期に不確かさは残すものの、4世紀中頃とされる浅間C経石(As-C)層に覆われており、出土遺物からみても縄文時代の可能性のあるものと考えられており、本章で取り扱うこととする。

表1 縄文時代の住居跡一覧

名称	位置	平面形状	長軸方位	規模(m)		主柱穴	炉	壁溝	床面積(m ²)	備考
				長軸×短軸	最大深度(cm)					
1号住居跡	B I 22	隅丸長方形	N-0°-E	3.9×3.3	60	6?	なし	南端	8.9	2住に切られる
2号住居跡	B J 22	隅丸台形	N-80°-W	5.8×5.5	40		地床炉・1石	北端	(21.6)	1住を切る
3号住居跡	B N 22	不正長方形	N-0°-E	6.1×4.6	30		地床炉・1石	北端	23.8	東部は調査区外
4号住居跡	B P 21	円形?	—	—	36					
5号住居跡	A W 17	楕円形	N-85°-W	4.0×3.6	58		地床炉・1石		8.8	
6号住居跡	A Y 19	隅丸方形	N-65°-W	3.5×3.5	38	4	なし		8.9	
7号住居跡	B E 21	不明	—	—	30		ロ字状石囲炉			
8号住居跡	B L 23	不整隅丸長方形	N-25°-E	4.9×4.0	74		コ字状石囲炉?		16.5	

表2 縄文時代の土坑一覧

名称	位置	平面形状	長軸方位	規模(m)		名称	位置	平面形状	長軸方位	規模(m)	
				長軸×短軸×深さ						長軸×短軸×深さ	
33号土坑	B Q 22	不整形	N-50°-E	150×126×30		45号土坑	B H 24	楕円形	N-42°-W	136×114×48	
34号土坑	B P 22	不整楕円形	N-23°-W	150×68×37		46号土坑	B I 23	楕円形	N-59°-W	66×78×21	
35号土坑	A V 17	楕円形	N-15°-E	148×136×62		47号土坑	B G 23	楕円形	—	104×98×49	
36号土坑	B M 22	楕円形	N-36°-E	100×88×27		48号土坑	B M 22	不整楕円形	N-66°-W	148×124×25	
37号土坑	B H 23	円形	—	190×182×46		49号土坑	B H 23	不整楕円形	N-48°-W	92×72×34	
38号土坑	B C 21	楕円形	N-47°-W	100×72×125		50号土坑	A N 14	楕円形?	—	—×—×41	
39号土坑	A V 18	楕円形	N-56°-E	140×90×76		51号土坑	B M 23	楕円形	N-56°-W	148×134×47	
40号土坑	B H 21	円形	—	92×84×15		52号土坑	B L 23	円形?	—	148×—×34	
41号土坑	B H 23	楕円形	N-35°-W	136×114×77		53号土坑	B O 23	円形	—	106×104×34	
42号土坑	B I 23	円形	—	112×102×35		54号土坑	B J 23	楕円形	N-35°-W	124×108×44	
43号土坑	B H 24	不整形	N-14°-E	116×100×76		55号土坑	B D 21	不整形	N-55°-W	128×104×74	
44号土坑	B I 24	円形	—	96×92×63		56号土坑	B K 23	不整楕円形	N-15°-E	86×76×30	

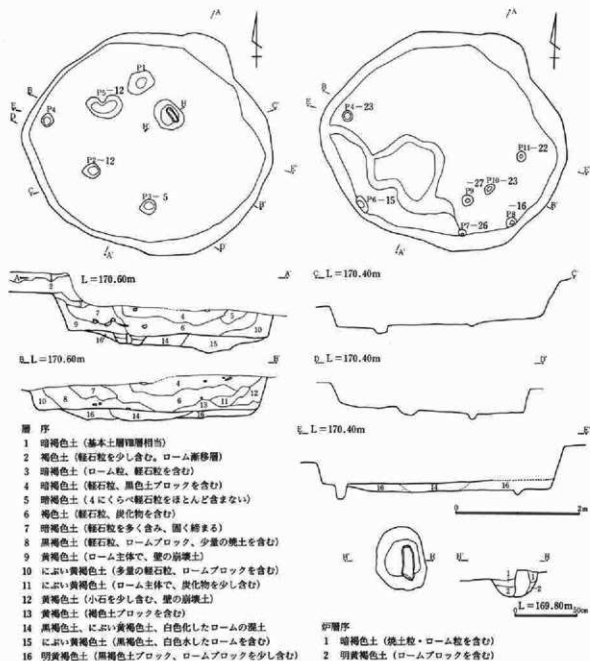


図6 5号住居跡

1. 竪穴住居跡

5号住居跡(図6~10、図版4・25) 発掘区中央部からやや南よりのAW17で検出された。平面形は楕円形で、長軸4.0m、短軸3.6mを測る。長軸の方位はN-85°-Wで、床面の面積は約8.8m²である。壁面は70~75度の勾配で立ち上がる。床面には特に顕著な硬化部分は確認できなかった。床面はほぼ平坦であったが、北から南にかけてやや傾斜し、比高差は約14cmである。炉は住居中央部のやや北よりに位置し、長軸51cm、短軸40cmの不整楕円形である。深さ20cmの掘り方に、長軸に平行で北東壁によせて、粗粒安山岩の歪角礫が1石配されていた。同礫の内側の上部には被熱痕が認められた。床面検出時にP₁からP₄までの4つのピットを確認し、掘り方の調査でP₄からP₁₁までのピットを確認したが、位置関係、規模等から明らかな柱穴の組

み合わせを確認することはできなかった。埋土は自然埋没の状態を示しているものと想定される。

遺物は埋土中央部下部から上部にかけて出土し、明確に床面に接して出土した遺物はなく、住居廃絶後、それほど時間を置かずに継続して投棄されたものと考えられる。

出土土器は破片数で239点に上り、石器は182点である。土器は関山Ⅱ式が中心である。石器には打製石斧2点、掻器（石篋）1点、くさび形石器2点、削器7点、凹石4点、磨石6点、石核7点が含まれる。

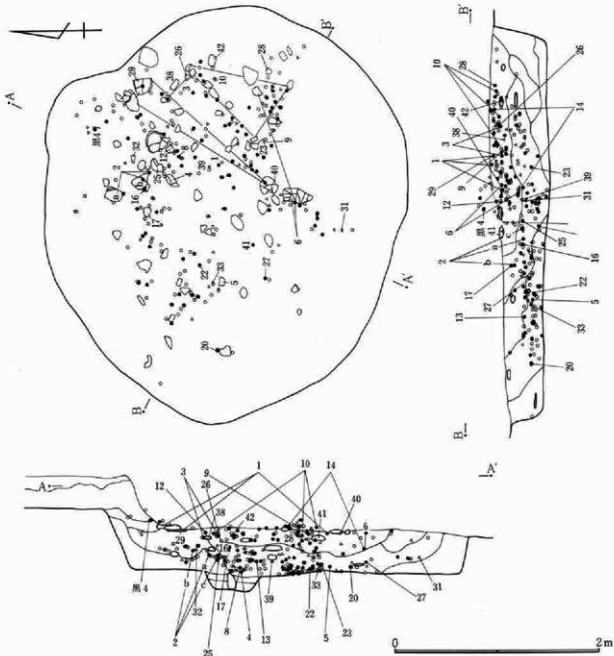


図7 5号住居跡遺物出土状況

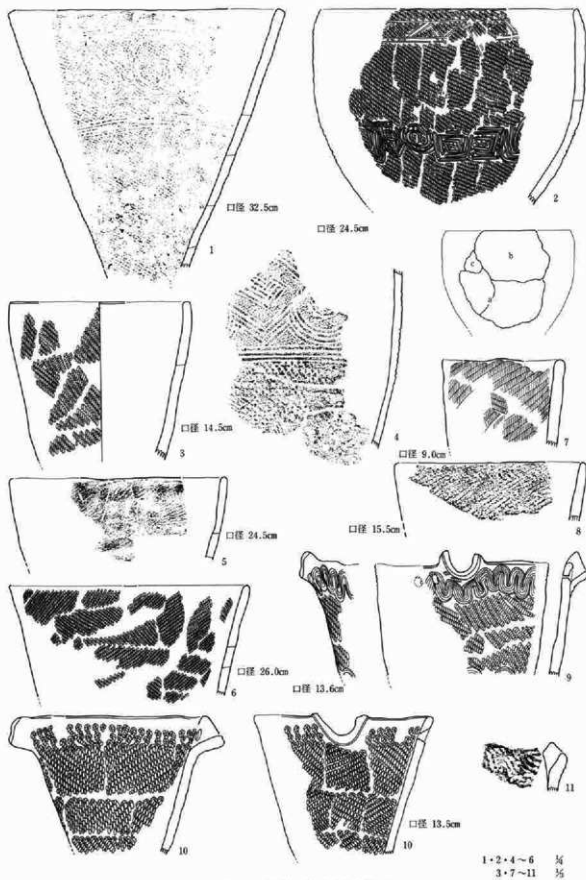


図8 5号住居跡出土土器(1)

1・2・4～6 ¼
3・7～11 ⅝

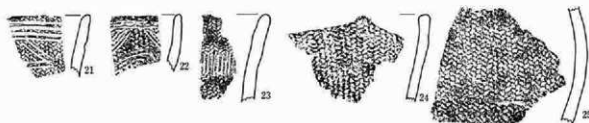
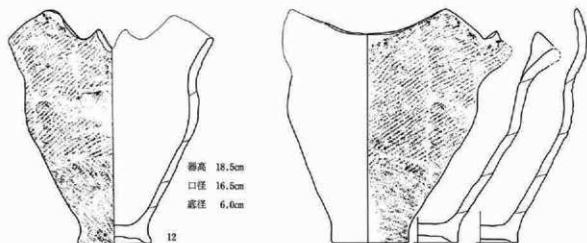
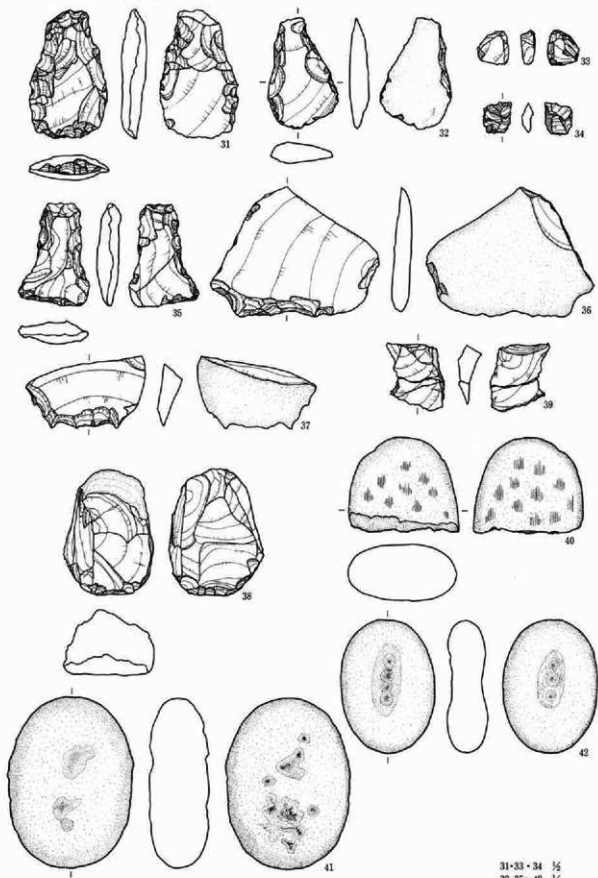


图9 5号住居跡出土土器(2) 1/3



31・33・34 $\frac{1}{2}$
32・35~42 $\frac{1}{4}$

図10 5号住居跡出土石器

8号住居跡(図11~19、図版5、26~28) 発掘区の北部B.L23で検出された。北辺の西部は51号土坑に切られ、西辺のほぼ中央で52号土坑と切り合っていたが、52号土坑との先後関係は確認できなかった。

平面形は不整隅丸長方形で、長辺4.9m、短辺4.0mを測る。長軸の方位はN-25°-Eを示し、床面の面積は16.5㎡である。壁面は約70°の勾配で立ち上がり、東辺での最大深度は約74cmを認めた。床面には特に顕著な硬化部分を認めることはできなかったが、ほぼ平坦であった。

炉はほぼ長軸上でやや北よりに位置する。長軸60cm、短軸50cmの不整楕円の平面形で、深さ10cmの掘り方に西辺と北辺に棒状の注貫変質岩と楕円状の石英閃緑岩の2つの礫がL字形に配され、北辺の礫には扁平な円礫が添えられていた。炉の東西の断面図において、礫の抜き取り痕と思われる落ち込みが確認されたが、南北の断面ではそうした状況は検出されなかった。炉の使用時には、少なくともコの字形に礫が配されていたものと推定される。上記の2つの礫の内側は、火熱による赤色化と劣化が顕著に認められ、炉の埋土上位には炭化物が少し含まれていた。

床面でのピットはP₁からP₁₃まで検出されたが、平面形・深さ等に差異があるものの、P₁~P₃、P₅~P₁₁の10本がほぼ壁に沿う状態で配列しており、検出できなかったピットがあるかもしれないが、柱穴になるものと推定したい。

埋土は自然堆積の状態を示しているものと考えられ、遺物は埋土の低位を中心として、密集した状態で出土した。土器は全形を窺える資料があるものの、完形土器はなく、約550片出土し、石器は182点、また大小の礫が多く出土した。

土器・石器の接合状況を見ると、平面的には南東部と中央部、北西部と中央部間での接合関係がやや頻度が高いよう捉えられ、南東部と北西部での接合関係も存在する。出土レベルの面では、埋土低位の間での接合が主体のようであるが、埋土低位と上位、埋土中位と下位の例も無視できない頻度で存在する。総体的には、住居廃絶後、それほど間を置かず遺物の投棄が始まり、埋土の堆積と並行しながら投棄が継続したものであると思われる。出土した土器はコンパス文や組紐が卓越し、関山II式が主体であり、関山I式は少数で特に埋土低位に集中するという点も見出せない。断定するには到らないが、関山II式の住居跡と考えたい。また、土器の中で注目されるのは、胎土・色調から搬入品と考えられる東の縄文の施文された土器片で、神ノ木式に属すると考えられる例である。

出土した石器は、石鏃5点、石錐2点、石匙11点、くさび形石器3点、敲石1点、凹石5点、磨石6点、削器25点、石核16点、二次加工のある剥片38点、使用痕のある剥片56点、剥片330点、砕片等19点である。なお、本住居から出土した黒曜石の剥片はいずれも和田産であった。

ところで、本住居埋土の南西部を中心として黒色頁岩製の剥片と石核の接合資料が検出されたが、この件については後述する。

層 序

- 1 褐色土(明褐色ロームブロックを多く含む)
- 2 黄褐色土(明褐色ロームブロック、ローム粒を多く含む)
- 3 にぶい黄褐色土(明褐色ローム粒を少し含む)
- 4 黒褐色土(明褐色ロームブロック、ローム粒を少し含む)
- 5 明褐色土(明褐色ロームブロック主体)
- 6 オリーブ褐色土(褐色土ブロックを少し含む)
- 7 黄褐色土(ロームブロック主体)
- 8 黄褐色土(白色バミスを少し含む、掘り方埋土)
- 9 褐色土(白色バミスを少し含む、掘り方埋土)
- 10 淡黄褐色土(白色バミスを少し含む、掘り方埋土)

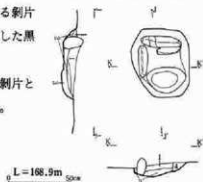


図11 8号住居跡 炉

炉 層 序

- 1 褐色土(炭化物、明黄褐色バミスを少し含む)
- 2 黄褐色土(褐色土ブロックを含む)
- 3 黄褐色土(2より黄味が強い)
- 4 黄褐色土(明褐色土ブロックを含む、炉石の抜き取り痕か)

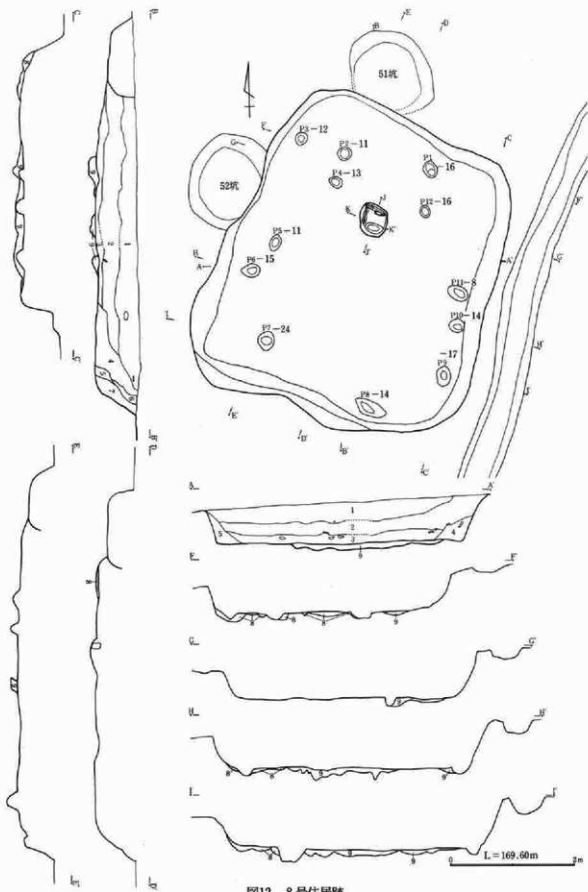


図12 8号住居跡

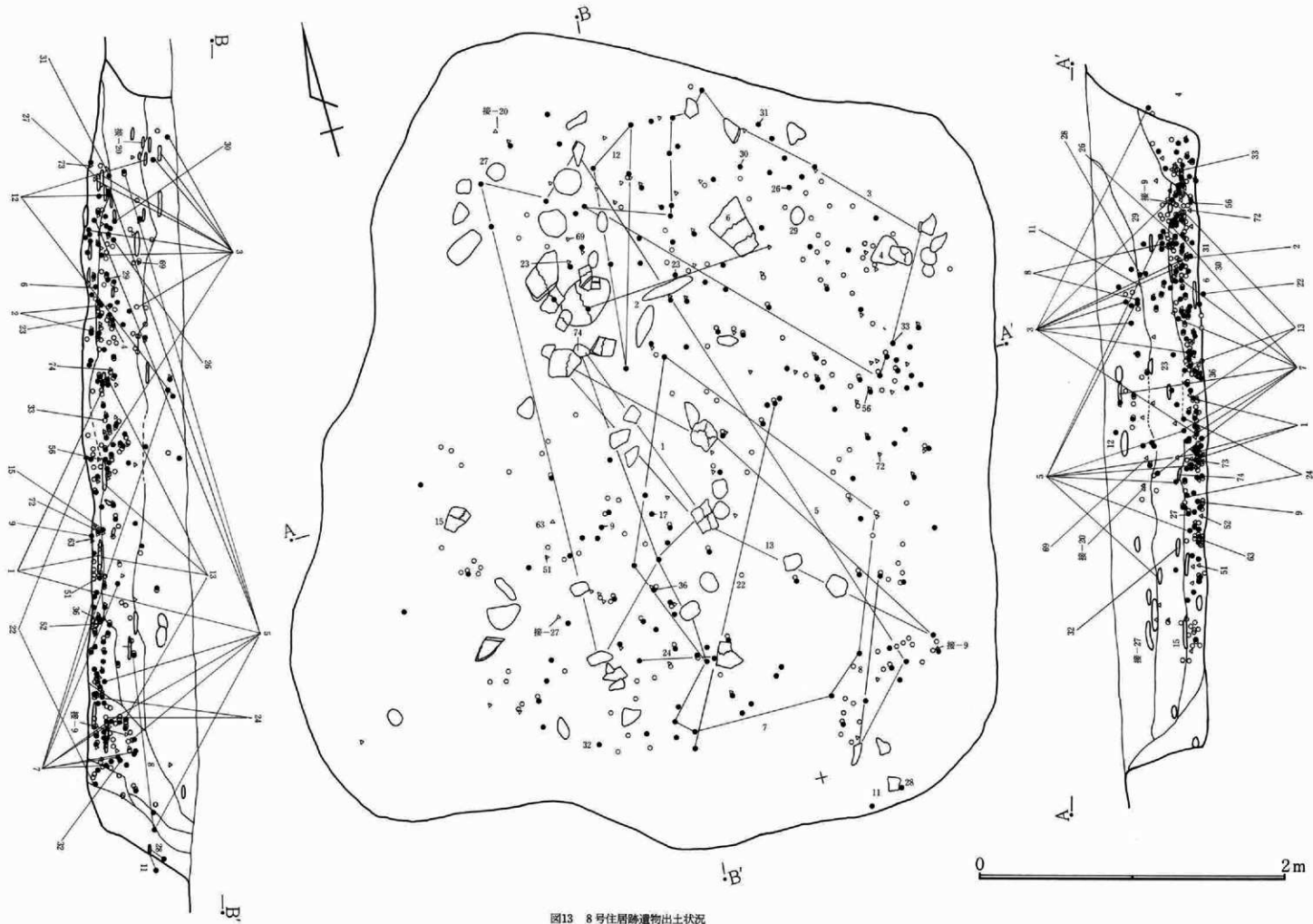


图13 8号住居跡遺物出土状況

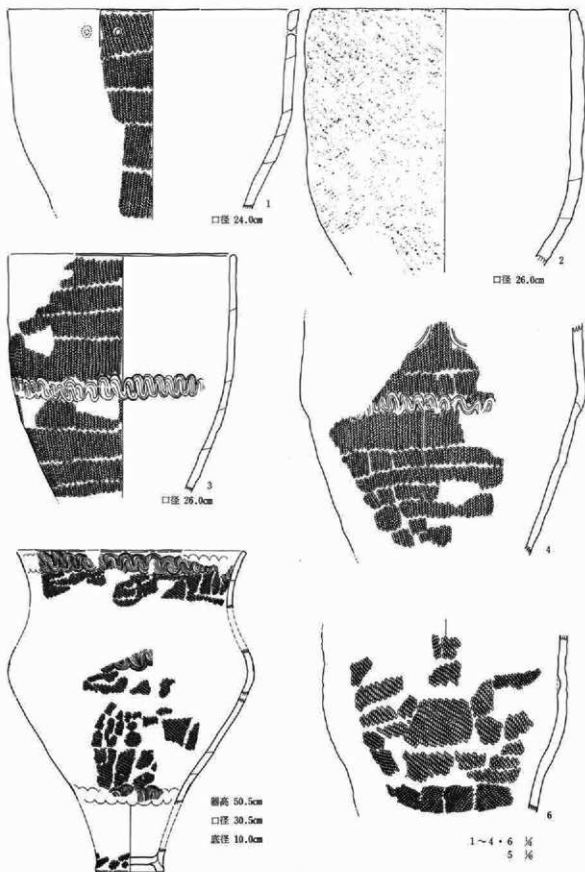


图14 8号住居跡出土土器(1)

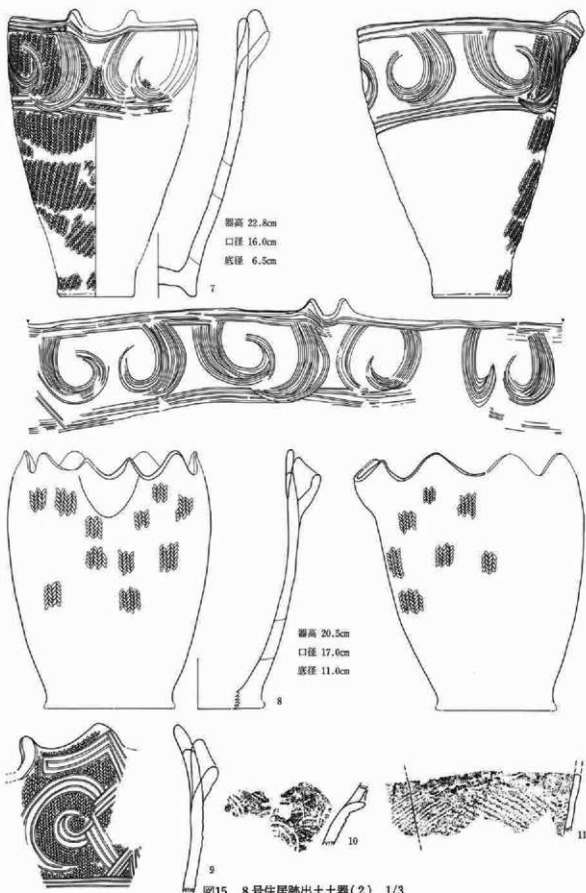


图15 8号住居跡出土土器(2) 1/3

1. 竖穴住居跡

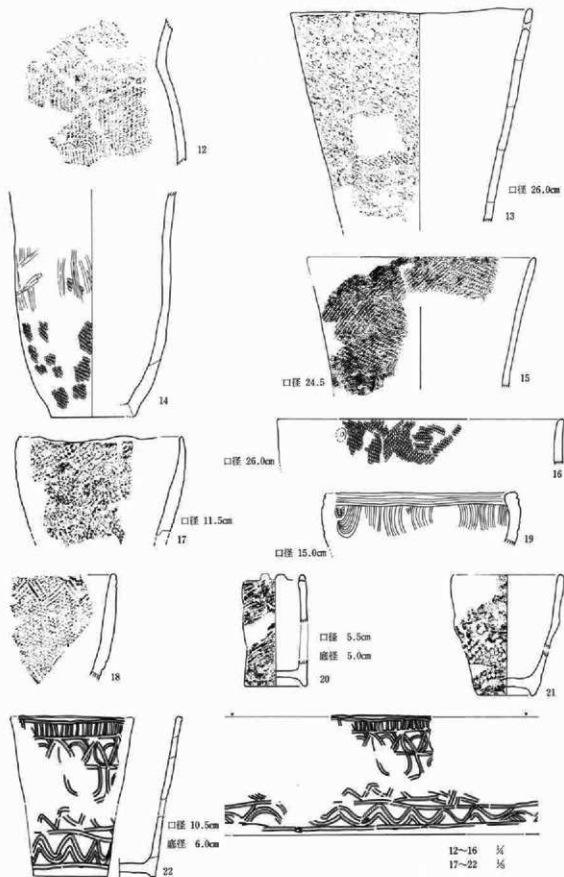


图16 8号住居跡出土土器(3)

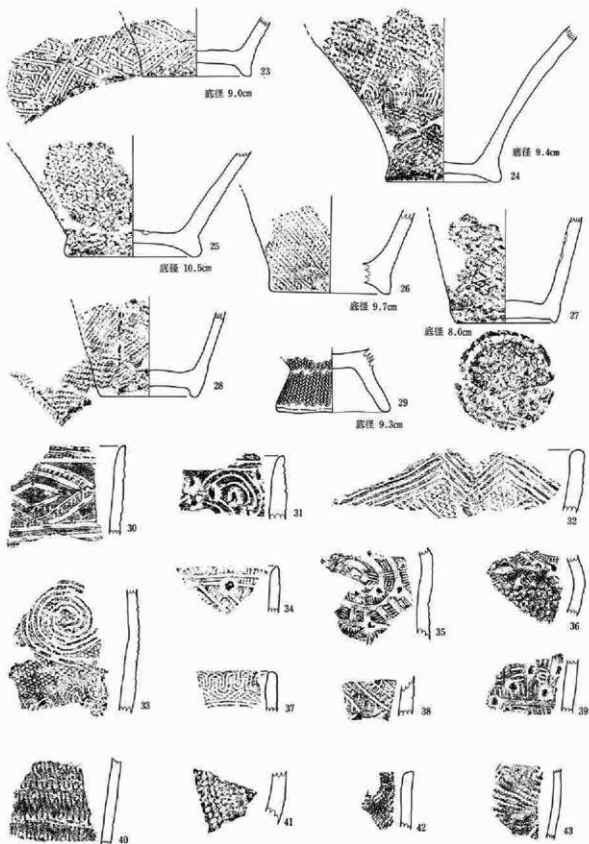


図17 8号住居跡出土土器(4) 1/3

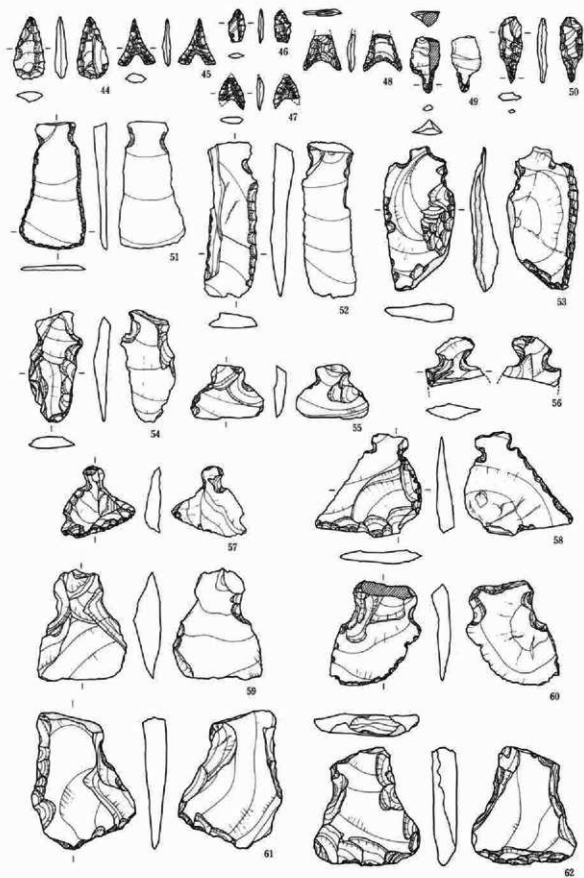


图18 8号住居跡出土石器(1) 1/2

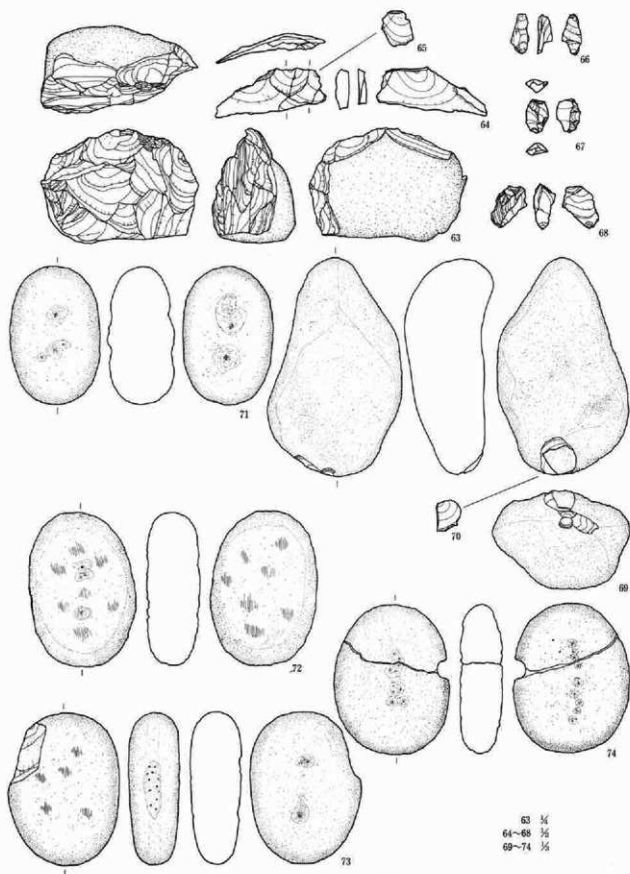


図19 8号住居跡出土石器(2)

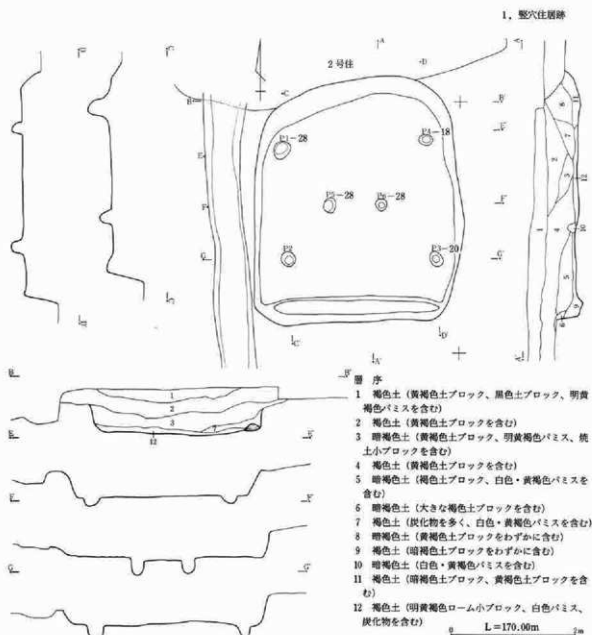


図20 1号住居跡

1号住居跡(図20～23、図版6・29) 発掘区の北部B I 22で検出された。北端を2号住居跡により切られ、西辺には2号溝が走り、溝の底面では本住居跡を切らないものの、図面上、上部では切っている。

長軸3.9m、短軸3.3mで、南北にやや長い隅丸長方形を呈し、長軸の方位はほぼ北を示す。最大の残存深度は約60cmを測り、壁は約85度の勾配で立ち上がる。南端部には上幅40cm、下幅20cm、深さ10cmの壁溝が存在した。床面の面積は約8.9㎡である。床は全体的に少し硬化していることが確かめられた。

住居の中央部南よりや、西部中央部等には炭化材やその破片が床面に密着して遺存していた。しかし、掘り方は確認されず、床面にも明確な被熱痕は認められないため、炉とは考えられない。埋土の下位にも少しの炭化物が確認されたが、壁には火熱を受けた様子は存在しなかった。このように、明確に火災住居と断定するには根拠が乏しいが、その可能性は残るものと考えておきたい。

柱穴と思われるピットは床面の4隅と中央部に2本の計6本が確認できた。

埋土の最上部には基本土層のⅤ層上面と考えられる層が覆っていた。その下位は自然埋没の様子を示して

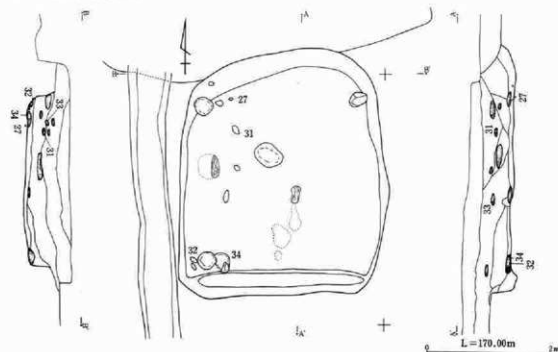


図21 1号住居跡遺物出土状況

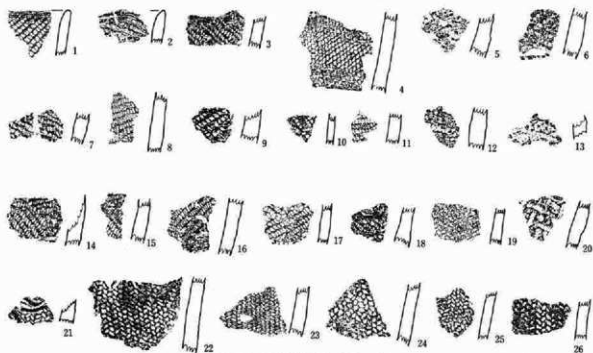


図22 1号住居跡出土土器 1/3

いる。出土した遺物は土器片が56点で、石器が31点である。土器片はいずれも埋土からの出土であり、時期の判定が困難であるが、組紐の施文された土器片が多いことと、黒浜・有尾式期に属すると想定される2号住居跡に切られていることを考慮し、関山II式期に属すると考えておきたい。石器には、削器1点(30)、表裏に2孔のある凹石(31)、表裏と側面に磨面の認められる磨石(32)、炭化物や赤色顔料の付着した磨石(33)、粗粒安山岩製の磨石、石核(29)、わずかに磨面の認められる大形磨石(34)があり、その他は使用痕のある剥片、剥片、そして碎片である。なお、床面から埋土下位にかけて大小の円礫が存在した。

1. 整穴住居跡

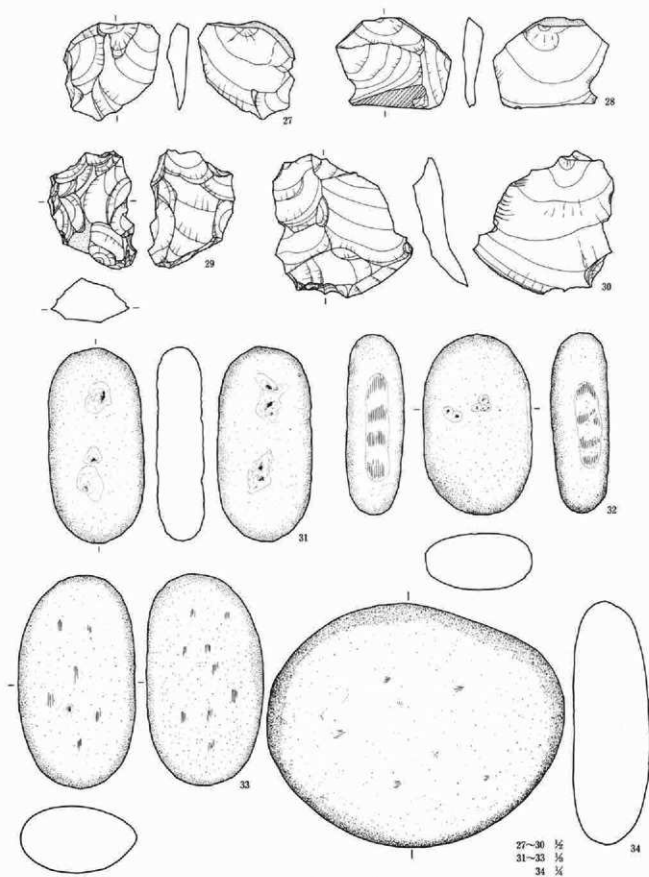
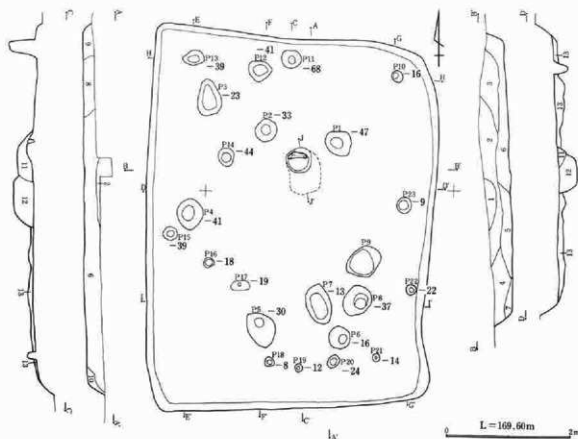
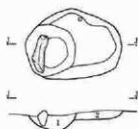


图23 1号住居跡出土石器



層 序

- 1 暗褐色土 (暗褐色土ブロックを少し含む)
- 2 暗褐色土 (黒褐色土ブロックをやや多めに含む)
- 3 暗褐色土 (黄褐色土ブロックを斑文状に含む)
- 4 褐色土 (黒褐色土ブロックを少し含む)
- 5 褐色土 (黒褐色土ブロック、白色バミスを多く含む)
- 6 暗褐色土 (黄褐色土ブロックを斑文状に焼土粒、炭化物を含む)
- 7 黄褐色土 (明黄褐色ローム粒を少し含む)
- 8 黄褐色土 (炭化物を少し含む)
- 9 黄褐色土 (白色バミス、明黄褐色ローム粒を多く含む)
- 10 黄褐色土 (9に似るが炭化物を少し含む)
- 11 黄褐色土 (褐色土ブロック、明黄褐色ローム粒を含む)
- 12 褐色土 (明黄褐色ローム粒を含み、炭化物を少し含む)
- 13 褐色土 (暗褐色土ブロックを少し、明黄褐色ローム粒を多く含む)



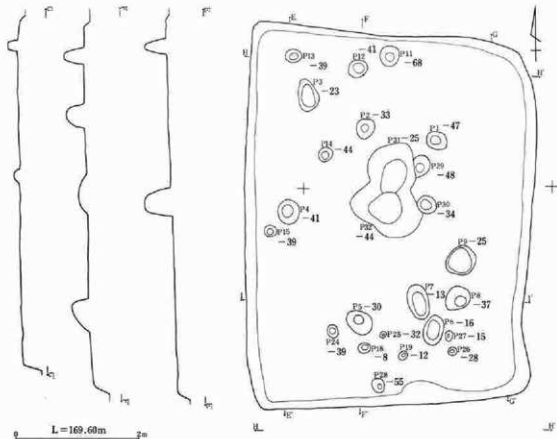
伊 層 序

- 1 暗オリーブ褐色土 (黄褐色土ブロック、炭化物を含む)
- 2 に近い褐色土 (焼土粒を少し含む)

図24 3号住居跡(1)

3号住居跡(図24～29、図版7・29・30) 発掘区の北端部のB N22で検出された。平面形状は不整長方形を呈し、長軸方位はほぼ北を示している。長辺は6.1m、短辺は4.6mで、床面積は23.8㎡を測る。床面は全体的に東部から西部にかけて緩やかに傾斜しており、北端部での東西の比高差は約12cmである。床面には顕著な硬化部分は認められなかった。住居の壁は30度から40度の勾配で立ち上がり、最大残存深度は18cmであった。住居内には、床面精査時および掘り方調査時をあわせて、炉の掘り方と推定される2本のピットを除く30本のピットが検出された。しかし、その規模、位置関係等に明確な規則性を見出すことができず、柱穴としての組み合わせを同定するには到らなかった。

炉は住居中央部からやや北よりに位置する。平面形は直径40cmのほぼ円形で、深さ14cmの断面形が皿状の



ピットの北端に、粗粒安山岩の亜角礫を配した地床炉である。その礫の内面上端部は赤褐色に変色し、明瞭な被熱痕を示していた。埋土内には少量の炭化物が検出された。また、炉の南部には炉に切られて、平面形が長軸75cm、短軸55cmの楕円形

で、深さ5cmの断面形が浅い皿状を呈し、埋土に少量の焼土粒を含む落ち込みが認められた。その上面には明確な硬化面は認められず、炉の最終使用時における、炉の一部であった可能性も残される。

また、住居の掘り方調査時には、炉の下部には深さ25cmのピット（P₂₁）が、その南部にはP₂₁が切る深さ44cmのピット（P₂₂）が検出された。P₂₂の埋土には少量の炭化物が含まれていた。P₂₁は最終使用時の炉の掘り方で、P₂₂はそれ以前の炉の掘り方であろうか。

住居の埋土は、基本的に自然堆積の状況を示しているものと思われ、遺物は、床面よりやや浮いた状態で埋土の下部から中位にかけて出土している。

出土した土器は、ほぼ全体の形状が知られるのは3点で、他は小破片の46点である。そのうち、胎土中に纖維を含まないのは一部に限られる。1は胴部の約半分と底部の大半を欠失する4単位の波状口縁の壺形土器である。口縁上端には0段多条の無筋Rの縄文が施文され、胴部には0段多条の無筋R、単筋LR・RRL、前々段反転LRRの各縄文が羽状ないし菱形を呈しながら、多段に施文されている。そして、口縁部と胴部上端には連続爪形文により菱形文が施文され、口縁の波頂部の下部の菱形文の中には渦巻き文が充填されている。2は口縁部が欠失している壺形土器であるが、連続爪形文による菱形文が施文されていたものと思われる、胴部には前々段反転LRRとRLLの縄文で羽状に構成され、一部菱形を呈している。3はほぼ壺形で、

図25 3号住居跡(2)

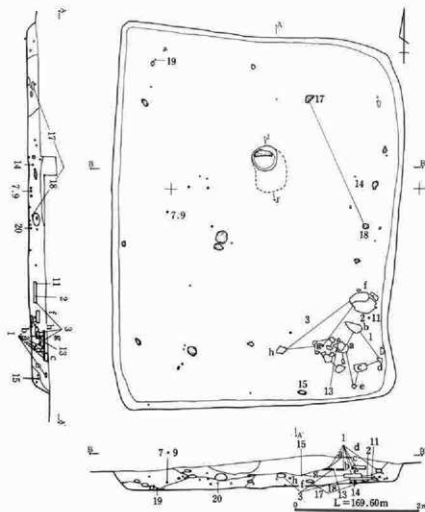


図26 3号住居跡遺物出土状況



(図28-1)



図27 3号住居跡出土土器接合状況

(図28-3)

いては確定できない。しかし、南東隅で出土した比較的保存状況のよい土器の出土状況と接合状況(図26・27)を見ると、住居廃絶後それほど時間を置かずには廃棄されているものと思われ、黒浜・有尾式期の住居と想定したい。

0段多条単節R.LとL.Rの縄文が施された深鉢形土器である。11は2とともにその一部を取り上げているが胎土中の繊維は少なく、外面は全面磨かれていて、上記3者とは異質である。

また、小破片の土器中には単節R.Lの斜行縄文(4・5)や前々段合盤の施文された例(6)、爪形文の施文された例(7・8)があり、組紐を地文にしてコンパス文の施文された例(9・10)や有孔浅鉢(12)もある。

一方、出土した石器は70点で、その内訳は、石匙1点(14)、乳棒状磨製石斧1点(15)、打製石斧1点(16)、削器9点(13・17・18)、石核2点(19)、磨石1点(20)、敲石1点、二次加工のある剥片3点、使用痕のある剥片13点、剥片・砕片38点である。上記の削器・剥片類・石核のうち、剥片類に4点の黒曜石製が含まれる他は、すべて黑色頁岩製である。また、磨石・敲石は粗粒安山岩製である。なお、17と18は約2.2m離れて出土し、接合した。

床面に密着した土器が確認できず、住居の時期につ

1. 壁穴住居跡

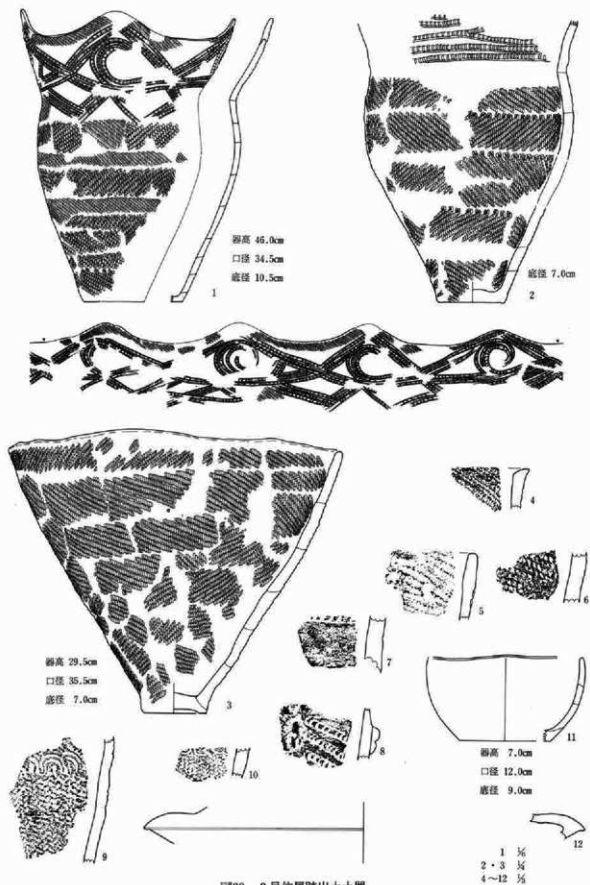


图28 3号住居跡出土土器

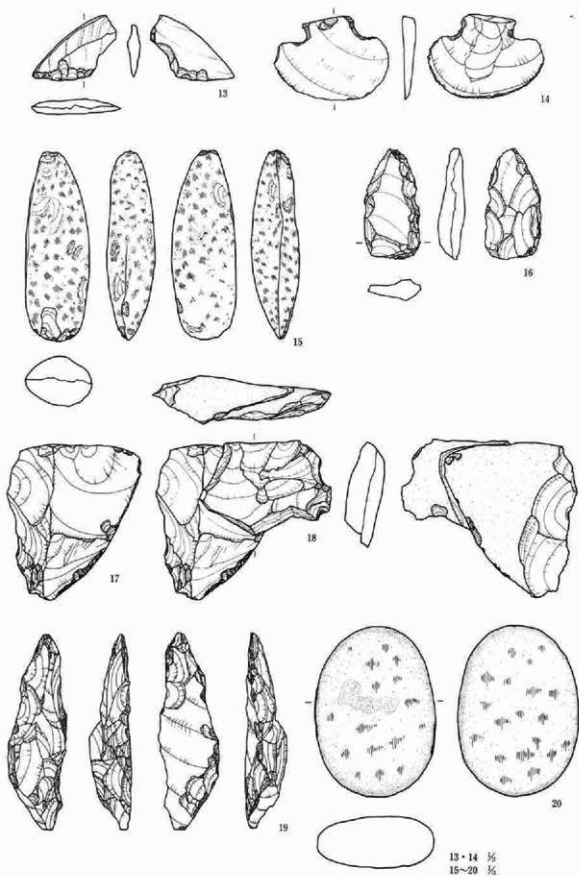


図29 3号住居跡出土石器

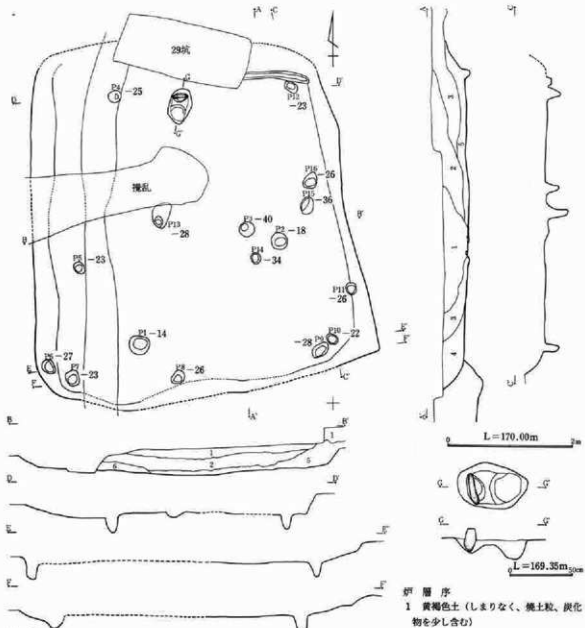


図30 2号住居跡(1)

2号住居跡 (図30～36、図版8・30・31) 発掘区の北部のB J 22で、1号住居跡の北部を切った状態で検出された。29号土坑で北辺の一部を切られ、西部には2号溝が貫き、かつ西辺から中央部にかけて掘削重機による攪乱を受け、全容を把握し難い。一部推定を含めて復元すると、平面形は隅丸台形を呈し、長軸方位はN-80°-Wで、長軸長5.8m、短辺4.6m、長辺5.5m、床面積は21.6㎡である。床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。住居の壁は全体的に遺存状況が悪く、遺存状況の良いところで30度から40度の勾配で立ち上がり、最大残存深度は約40cmであった。北端部で、上幅14cm、下幅6cm、深さ10cmの壁溝の一部が検出されている。床面精査時と住居掘り方調査時に合計18本のピットが認められた。そのうち、規模位置関係

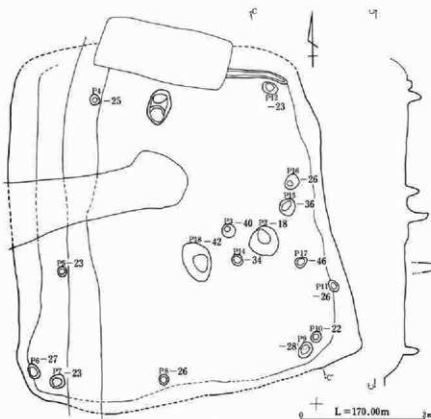


図31 2号住居跡(2)

から、 $P_4 \sim P_{12}$ 、 $P_{15} \sim P_{17}$ は壁柱穴の一部となり $P_1 \sim P_3$ 、 P_{13} ・ P_{14} は主柱穴の一部となる可能性があるものと思われるが、全体の構成が把握しきれず、確実な同定はできなかった。

炉は、ほぼ長軸上の北端部に位置し、平面形は長軸55cm、短軸35cmの楕円形で、北端に粗粒安山岩製の石皿の半欠品(図33)が、割れ口を上に向けて配されていた。炉の南半部は16cmの深さで断面形はU字状に掘りくぼめられており、埋土には少量の焼土粒と炭化物が認められた。

住居の埋土は、自然堆積

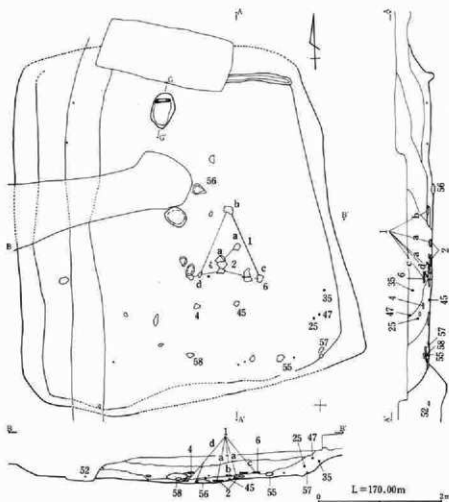
の状態を示しているものと思われる。

本住居から出土した土器は、底部を欠失しているがほぼ全形を窺える変形土器(1)の他は破片の約60点で、いずれも胎土に繊維を含んでいる。1は4単位の波状口縁を有する変形土器で、口縁の波底部には小突起が付けられている。また口縁部には、波状の口縁によって連続爪形文による菱形文もしくは三角形文が施文され、胴部には0段多条の単節R Lと無節Lの縄文により菱形状に施文されている。2は欠失部が多いものの、波状口縁を有する大型変形土器であり、口縁部には連続爪形文による菱形文、そして胴部には0段多条単節R LとL Rの縄文により菱形状に施文されている。その他の土器片には、梯子状沈線に粘土層の貼付された例(8)や、地文が組紐で平行沈線により山形文や弧状文の施文された例(5・6)、地文が組紐でコンパス文の施文された例(38)など、関山I・II式の特徴を示すものと、各種縄文による羽状縄文や菱形構成、そして連続爪形文などが認められる。

また、出土した石器は111点で、その内訳は、石匙1点(48)、石鏃の先端部1点(49)、打製石斧1点(51)、楔形石器1点(50)、削器5点(52)、石核6点(以上、黒色頁岩製)、石皿の半欠品1点(56)、磨石2点(57)、凹石の半欠品1点(58)(以上、粗粒安山岩製)、二次加工のある剥片4点、使用痕のある剥片7点(以上、黒色安山岩製)、そして剥片・砕片81点(54・55、珪質頁岩製2点、粗粒安山岩・チャート・変質玄武岩製各1点を除いて黒色頁岩製)である。なお、剥片のうちの1点(54)は、遺構外から出土した石核(53)に接合した。これらの石器の中で床面からの出土として認められるのは56の石皿のみで、他はいずれも埋土の中からである。

ところで、本住居の時期を考える上で、土器の出土状況のみをみよう(図32)。1の有尾式系の土器は住居の中央部で埋土の最下位から中位にかけての出土及び接合状況を示し、住居廃絶後、中央部が埋まりきらな

1. 竪穴住居跡



い段階で廃棄されたものであろう。そして、2の土器は埋土の最下位から出土した土器片と、遺構外から出土した土器片から成っている。また、関山II式の特徴を示している例の中で、出土位置の確認できる6は、埋土の中位からの出土である。出土位置を確認して取り上げた資料が少なく、基本的に床面から出土した土器が認められないため、多分に不確定要素を残すが、1や2の土器の出土状況を重視して、本住居跡の所属時期は、黒浜・有尾式期と想定しておきたい。

図32 2号住居跡遺物出土状況

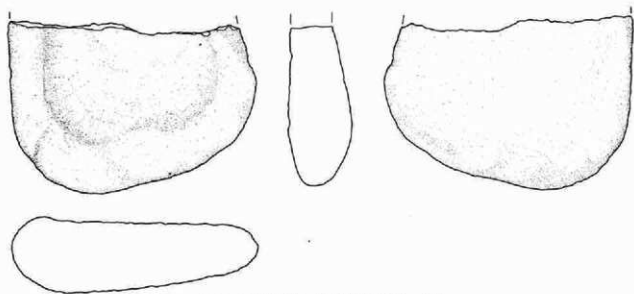


図33 2号住居跡 炉石(石皿の転用) 1/4

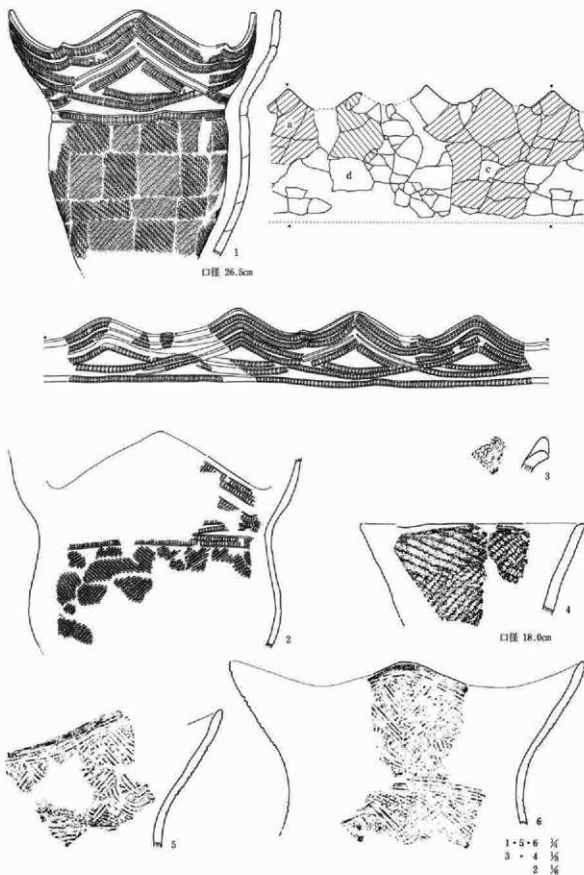


図34 2号住居跡出土土器(1)

1. 整穴住居跡

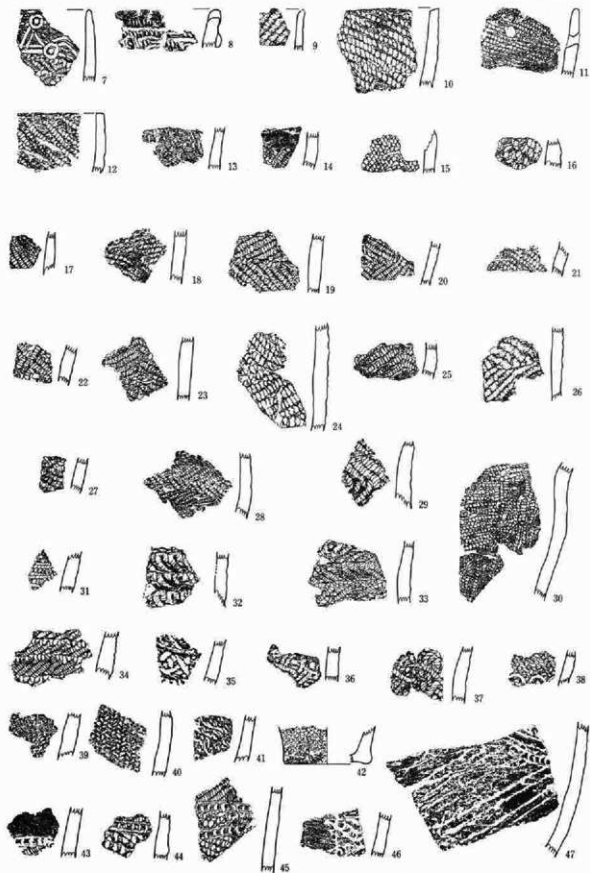


图35 2号住居跡出土土器(2) 1/3

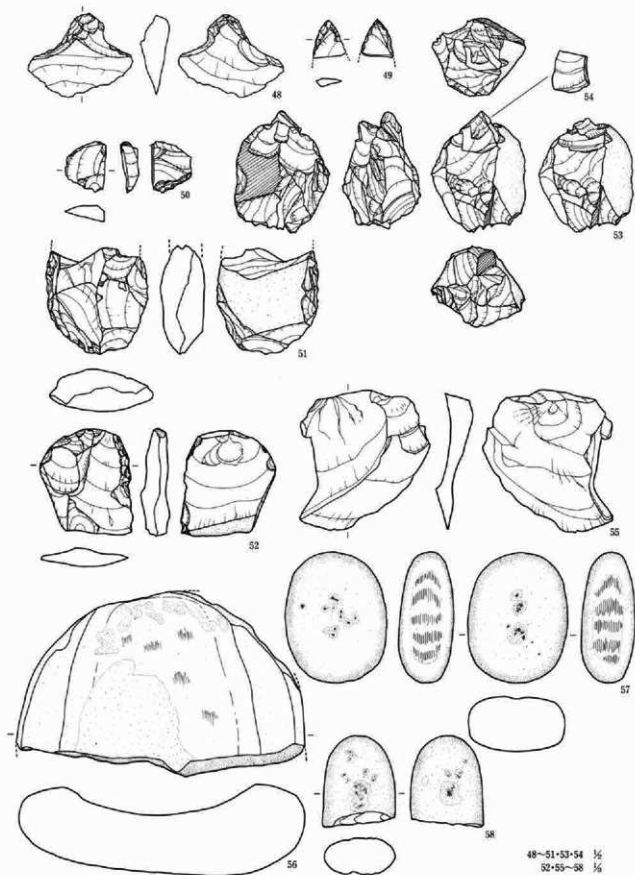
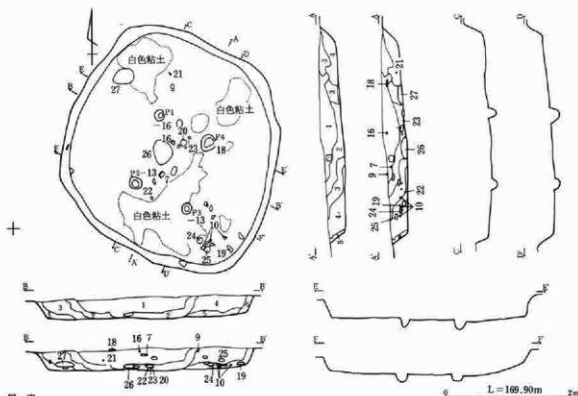


図36 2号住居跡出土石器

48~51・53・54 $\frac{1}{6}$
52・55~58 $\frac{1}{6}$



順序

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土（軽石粒、炭化物を含む、中央部に向い黒色味強まる） | 4 におい黄褐色土（ロームブロックを含み、やや粘性がある） |
| 2 褐色土（ローム粒を多く、砂粒を少し含む） | 5 黄褐色土（粘性がある、壁の前積土） |
| 3 褐色土（2よりローム粒を多く含む） | 6 黄褐色土（ロームブロックを含む壁の前積土） |

図37 6号住居跡

6号住居跡（図37～39、図版9・31）発掘区のほぼ中央部やや西よりのAY19で検出された。平面形はやや不整なもの、一辺が3.5mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-65°-Wである。床面はほぼ平坦であり、部分的に白色粘土が床面上に貼られている痕跡が検出された。しかし、床面上に特に硬化した部分は認められなかった。住居の壁は少し崩落していることが埋土の断面で確認されるが、遺存している状態では70度から75度の勾配で立ち上がり、最大の残存深度は38cmを測る。床の面積は8.9m²であった。

床面の中央部には4本のピットが検出され、各ピットの規模（長軸径×短軸径×深さ）は、P₁-17×17×16cm、P₂-20×18×13cm、P₃-18×16×13cm、P₄-30×24×18cmである。また、各ピットの心々間の距離は、P₁-P₂間とP₂-P₃間が1.1m、P₂-P₃間とP₄-P₁間が0.9mと規則的であった。各ピットの規模にやや変異があるが、心々間の規則性も確認され、この4本のピットが柱穴と考えると良いであろう。

炉および周溝は検出されず、床面下にも明らかな掘り方は認められなかった。

住居の埋土は、断面で見ると、一部不自然なところも見受けられるが、総体的には自然埋没の状態を示しているものと考えられる。

本住居跡からの遺物の出土は、基本的には床面より浮いた状態で、埋土の下位から上位にかけて認められた。全体的な遺物の出土状況は比較的散漫な様相を示していたが、埋土の下位から出土した遺物では、住居中央部および南東隅の部分でやや集中して出土している。

出土した土器はいずれも小破片で、20数点に限られる。そのうちの細片を除いた18点は図38に示したとおりである。総体的には、胎土中に繊維を含むものとそうでないものがほぼ同数である。

そのうち、前者では単節LRおよびRLの斜行縄文あるいは羽状縄文が施文されている例が主体的である

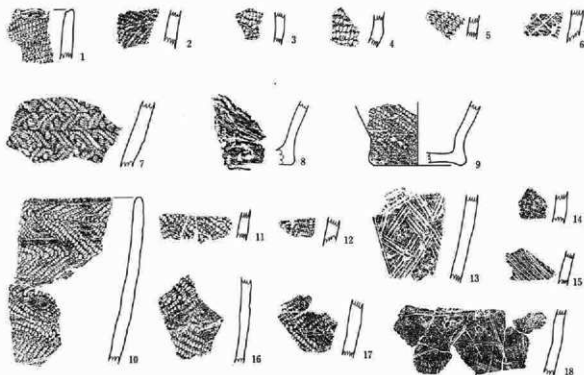


図38 6号住居跡出土土器

が、前々段反摺りの施文された例(5)や、格子目状の沈線の例(6)、そしてLとRをそれぞれ2本ずつで結節を作り、一段ずつ交互に横位施文された例(7)などが含まれる。

また、後者には、単節RとLの羽状縄文(11)や結束羽状縄文(10・16・17)とともに、集合沈線による格子目文(13)や、平行沈線による条線(15)、櫛状工具による格子目状文(18)が施文されている例がある。

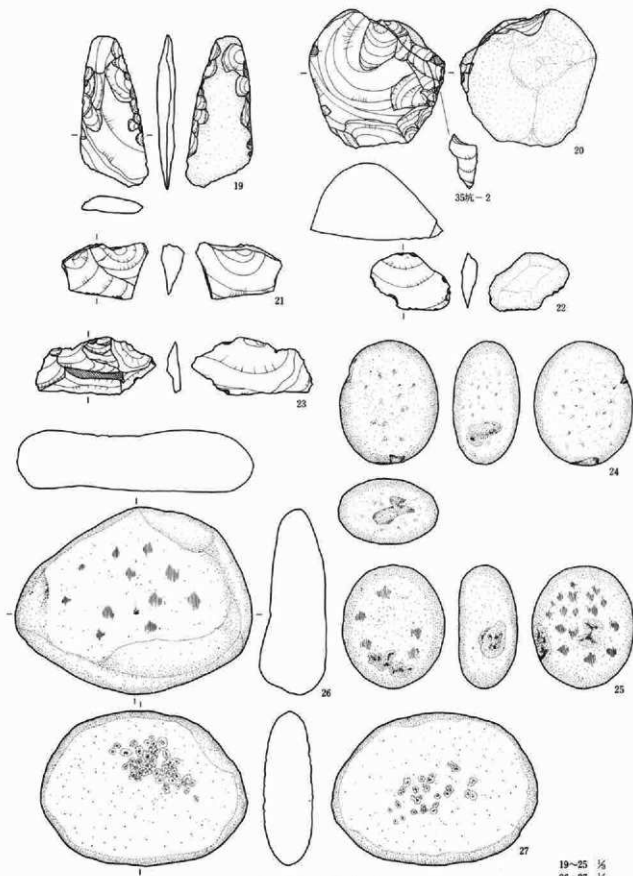
胎土中に繊維を含む土器の中で出土位置の確認できるのは7と9のみであるが、そのいずれもが埋土の上位からの出土である。また、胎土中に繊維を含まない土器のうち出土位置は、16と18が埋土の上位からの出土であるが、10は埋土の比較的下位で、壁際から出土している。

このように、出土した土器自体が限られている上に、出土位置の判明している例が少なく、床面に密着した土器も検出されておらず、本住居の時期を確定するのは困難であるが、10の土器を重視して、縄文時代前期後半に属する可能性を想定しておきたい。

一方、本住居跡から出土した石器は22点である。その内訳は、黒色頁岩製の打製石斧1点(19)、黒色頁岩製の石核1点(20)、粗粒安山岩製の敲石1点(24)、粗粒安山岩の磨石3点(25)、黒色頁岩製の二次加工のある剥片2点、黒色頁岩製の使用痕のある剥片4点(20・21)、黒色頁岩製の剥片8点(23)、わずかに磨面が認められる重さ15kg以上の粗粒安山岩製の大形磨石(20)、両面に敲打痕の認められる粗粒安山岩製の台石(27)である。

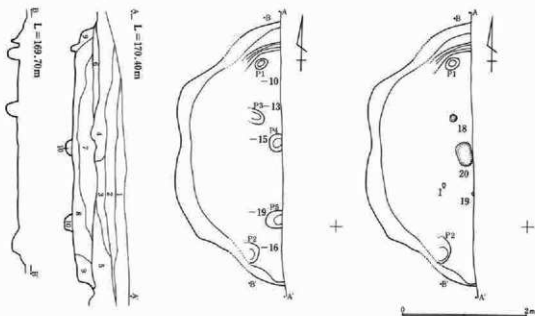
このうち、19は打製石斧としたが、全体的に風化が進んでおり、先端部の状況に判然としにくいところが残る。また、20の石核とした例には、35号土坑からの出土として取り上げた剥片が接合したが、剥離時にその剥片と同時に割れの剥片が20と同一番号で取り上げられており、出土状況を実体として理解してよいか疑問が残る。

なお、図示した石器のうち、埋土の比較的下位から出土した例は、19・20・22・23・26・27である。



19~25 1/4
26·27 1/6

图39 6号住居跡出土石器



層序

- | | |
|------------------------------------|--------------------------|
| 1~5 暗褐色土 (明黄褐色土ブロック、褐色土ブロックを含む、客土) | 8 暗褐色土 (褐色土ブロックを含む) |
| 6 褐色土 (暗褐色土ブロックをわずかに含む) | 9 黄褐色土 (褐色土ブロックを含む) |
| 7 暗褐色土 (褐色土ブロック、黒褐色土ブロックを含む) | 10 褐色土 (暗褐色土ブロックをわずかに含む) |

図40 4号住居跡

4号住居跡 (図40・41、図版10・32) 発掘区北端部の東壁際のB P21で検出された。当初設定した発掘区の壁際に皿状の落ち込みを確認し、その性格を確かめるために壁に沿ってトレンチを入れたところ、平坦な面と壁の立ち上がりを確認、住居跡と判断し、境界の限界まで発掘することとした。その結果、本住居の過半数は発掘区域外に存在すると考えられ、その全容を把握することはできなかった。

床面はほぼ平坦であったが、特に硬化した部分を確認することはできなかった。南北方向で3.4mを測る。壁は南北端において、70~80度の勾配で立ち上がる。また、北端部では上幅12cmで、深さ14cmの断面形がU字状の壁溝が壁にそって弧状に検出された。しかし、西部および北部では認められなかった。また、ピットは5本検出したが、床面の検出が一部であることもあり、その組み合わせは不明である。P₁・P₆が支柱穴で、P₁・P₂は壁柱穴なのであろうか。

埋土の上半部は、一度重機により削平された後に、地山のロームと表土の土が互層の状態に堆積していたが、下半部は自然な埋没状態を示しているものと思われる。

床面から出土した遺物は、1の土器片と粗粒安山岩製で表裏面と長軸の一端部に敲打痕のある凹石(18)と、砂岩製で長軸の短部に敲打痕のある敲石(19)、そして約20kg近い重さの大形磨石(20)である。ただし、19の敲打痕と20の磨痕は判定にやや不安が残る。

1の土器は胴部の中位で屈曲し、下半部にRL縄文が施文され、上半部はみぎの施される諸磯b式の鉢形土器と思われ、埋土中から出土した2・5・6・7も同一個体から同類の土器片と想定される。

また、埋土中からは、黒色頁岩や細粒安山岩、黒曜石の割片10点、黒色頁岩製の二次加工のある割片1点、黒色頁岩製の敲石1点(17)が出土している。そのうちの15の黒色頁岩製の割片は、3辺が折られており、今後、割片の折る目的が追及されなければならないであろう。また、17は長軸の両端部に敲打痕があり、敲石としたが、両極打撃による剥離面があり、本来的に槌のように使うのか、転用なのか問題を含む。

埋土中からは繊維を含む土器が出土しているが、1の床面出土土器より、本住居は前期後半と考えたい。

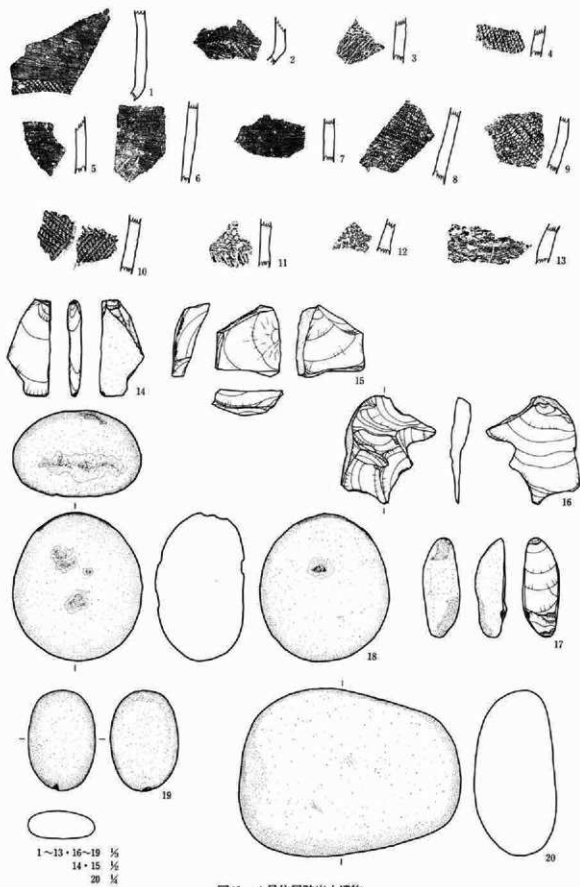


图41 4号住居跡出土遺物

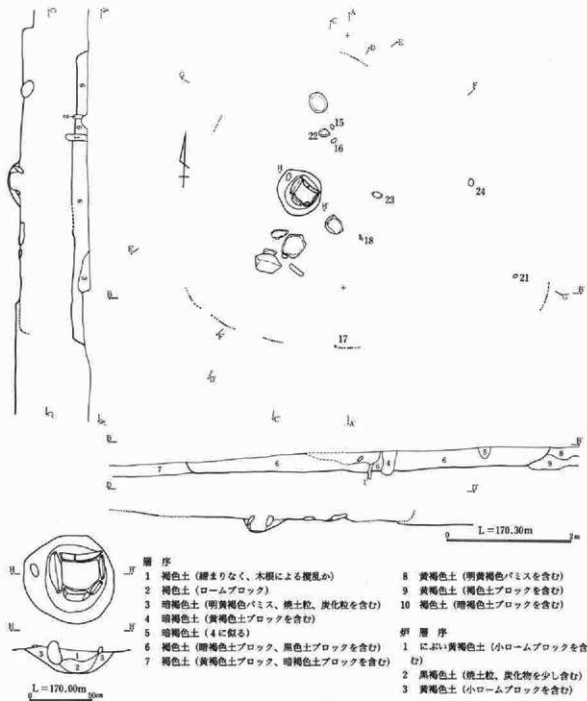


図42 7号住居跡(1)

7号住居跡(図42~45、図版11・32) 発掘区の中央部やや北よりのBE21で検出された。中世以降の遺構の検出時に、7号土坑の底面で石囲い炉の一部が認められたため、住居跡の平面形を確認するため精査を行ったが、その全容を把握するには到らなかった。グリッドの21ラインとBEラインに沿って設定した断面で、壁のかすかな立ち上がりを確認したが、不確実であり、平面形態・規模とも不明である。床面と認めたるは、特に硬化した部分は確認できなかった。

炉は、平面形が73×70cmの不整の円形で、深さ約20cmの掘り方に、粗粒安山岩や石英閃緑岩の5つの円礫や亜角礫を、内法で30×20cmの大きさの長方形に配した、石囲いの地床炉である。炉内の埋土下部には焼土

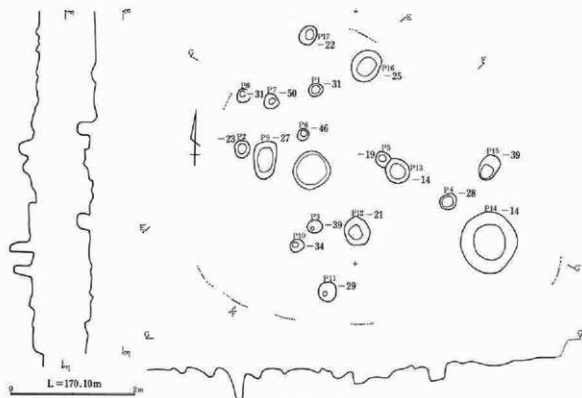


図43 7号住居跡(2)

粒や炭化物がわずかに含まれており、炉石の内面上部は赤褐色に変色していたり、剥落痕があり、顕著な火熱痕が認められた。

床面精査時には柱穴と想定されるピットは確認できず、掘り方の調査によりP₁からP₁₇までのピットを確認した。ピットの規模、配列に明確な規則性を見出すことができなかったが、1本不足するものの、P₁からP₈までが主柱穴になるのだろうか。

床面から出土した遺物は石器が中心で、土器は13の胴部下端部に粗い条痕の施文された底部のみである。石器には粗粒安山岩製で両側辺がやや凹む、短冊形の打製石斧(14)や黒色頁岩製の削器(20)、変質安山岩製の敲石(23)、表裏面に敲打痕のある閃緑岩製の凹石(24)や黒色頁岩製の使用痕のある剥片(15~18、22)がある。埋土からは、コンパス文の施文された土器片(1)など、いずれも小破片の土器と、剥片や破片などの10数点の石器が出土している。また、炉の周辺を中心として、大小の円礫や扁平な礫が出土しており、その中には炉石として使用されたと思われる火熱を受けたものも含まれる。

床面から出土した底部のみの土器から、本住居跡は中期後半に属するものと考えておきたい。

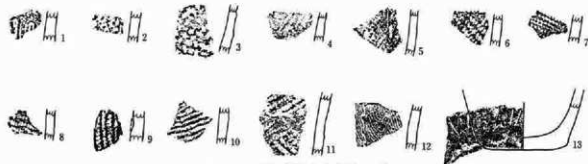


図44 7号住居跡出土土器 1/3

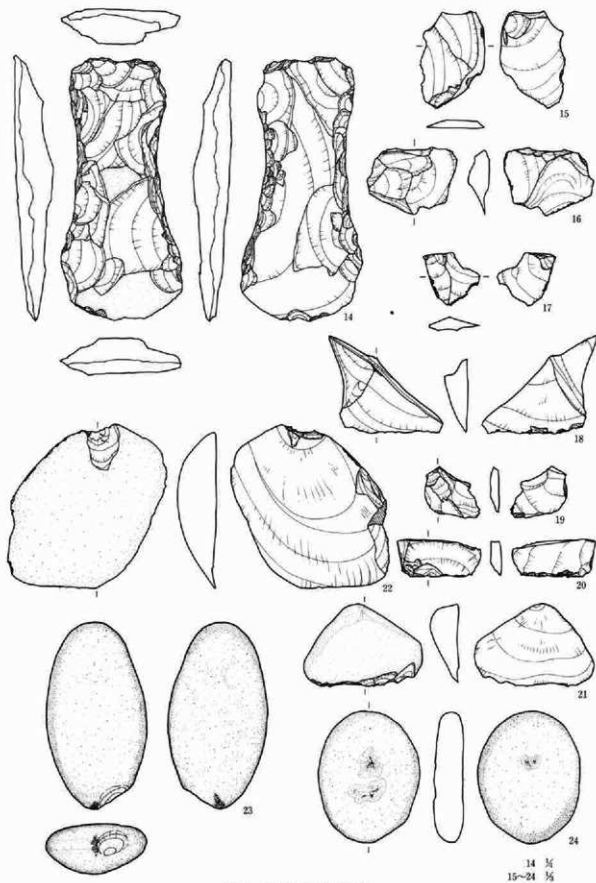


図45 7号住居跡出土石器

14 号
15~24 号

2. 土坑 (図46~54、図版35~41)

33号土坑 発掘区の北端部で検出された。平面形は不整で、断面形は皿状を呈する。

34号土坑 発掘区の北端部で、33号土坑の北に近接して検出された。平面形は不整楕円で、断面形は長方形状である。

35号土坑 発掘区中央部やや南よりで5号住居跡に近接して検出された。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。4点の土器片が出土し、縄文を地文にして粘土粒の貼付された諸磯C式と考えられる例が含まれる。石器は、和田峠産の黒曜石の剥片、黒曜石製の使用痕の剥片、黒色頁岩の剥片が出土している。このうち、最後の例は6号住居跡出土の石核に接合しているが、前述のように同時割れの剥片が上記石核と同じ番号で取り上げられており、疑問を残す。

36号土坑 発掘区の北部、8号住居跡の北東部に近接して検出された。元々浅い土坑だったと思われる、下部がわずかに遺存するのみであった。底面は凹凸が著しい。波状口縁で、連続爪形文による菱形文の施文された有尾系土器の破片と、使用痕のある剥片1点、剥片2点、わずかに磨面を有する大形磨石が底面に接して出土した。

37号土坑 発掘区の北部で検出された。平面形はほぼ円形で、断面形は長方形状である。連続爪形文の施文された例を含む14点の土器片と、黒色頁岩の剥片1点、炭化したクルミや木材の破片が10数点出土している。

38号土坑 発掘区の中央部で7号住居跡の南で検出された。平面形は長軸100cmの楕円形であるが、深さが125cmもあることが特徴的である。30点の土器の細片が出土しているが、関山II式が主体と考えられる。石器は剥片と砕片が17点出土しており、そのうちの4点は珪質頁岩の同一母岩と推定される。また、炭化したクルミや木材の破片や小礫が多く出土している。

39号土坑 発掘区中央部のやや南よりの西端部で検出された。平面形は楕円形で、断面形はU字状を呈する。連続爪形文の施文された例を含む2点の土器片と使用痕のある剥片1点、剥片2点が出土している。

40号土坑 発掘区のほぼ中央部で検出された。平面形は円形で、断面形は皿状である。搔器1点、使用痕のある剥片、剥片1点が出土している。

41号土坑 発掘区の北部で検出された。平面形は楕円形で、断面形は長方形に近い。遺物は埋土の中位からややまとまって出土した。出土した土器片は52点で、波状口縁の口縁部に半截竹管による平行線で菱形文の施文された例や連続爪形文の施文された土器片が含まれ、黒浜・有尾式が主体と考えられる。石器は26点出土し、石鏃1点、石核3点、剥片・砕片24点である。黒曜石製の剥片2点はいずれも和田峠産である。また、炭化したクルミや木材の破片が出土しており、粗粒安山岩を主とする小礫も27点認められた。

42号土坑 発掘区の北部で検出された。平面形は円形で、断面形は皿状である。出土した遺物は、土器の小破片3点と若干の炭化した木材の破片である。

43号土坑 42号土坑の南西部に近接して認められた。底面の一部が上面よりえぐられており、本来的には袋状を呈していた可能性がある。土器片が22点出土しているが、関山II式の特徴を示している例が多い。石器は石鏃1点、削器1点、使用痕のある剥片1点、剥片9点、砕片9点が出土している。炭化したクルミや木材の小破片が多数検出されている。

44号土坑 発掘区の北部で検出されている。平面形は円形で、断面形は長方形に近いが、底面がやや広くなり、袋状を呈する。遺物は埋土の中位を中心に豊富に出土した。土器はいずれも破片であるが、器形の知られる例が4点、他に土器片が十数点出土した。それらにはコンパス文が多用され、紐組も施文される率が高

- く、関山Ⅱ式の一括資料と考えてよいであろう。出土した石器は、石鏃1点、削器2点、赤色顔料の付着した凹石の半欠品、石核1点、使用痕のある剥片1点、剥片25点、砕片13点、磨石2点、大形磨石1点である。そして、端部に火熱痕のある扁平な長円礫が出土しており、炉石に使用されていたものと考えられる。また、炭化したクルミや木材の小破片が多数検出されている。粗粒安山岩や石英閃緑岩の円礫も7点出土している。
- 45号土坑** 発掘区の北部で検出された。平面形は楕円で、断面形は逆台形に近い。遺物は埋土の中位を中心として出土した。そのうち、土器片は21点で、組紐の施文された例が多く、関山Ⅱ式が主体と考えてよいであろう。石器は削器1点、剥片20点が出土している。剥片のうちの14点(9~22)は、頁岩・砂岩、頁岩の同一母岩に属するものと想定され、剥片間での接合(11・12)が認められる。また、その剥片のうちの1点は、土坑外出土の石核(8)に接合している。また、炭化したクルミや木材の小破片が20数点、粗粒安山岩・珪質変質岩の小円礫4点が出土している。
- 46号土坑** 発掘区の北部で、42号土坑の北に近接して検出された。平面形は楕円で、断面形は皿状である。
- 47号土坑** 発掘区の北部で、2号溝の底面下で検出された。平面形は円形に近く、断面形はU字状である。
- 48号土坑** 発掘区の北部で、8号住居跡の北東部で検出された。平面形は不整の楕円形で、断面形は皿状に近い。遺物は埋土の中位から上位にかけて出土した。そのうち、土器小破片が15点、黒色頁岩製の剥片12点、炭化したクルミや木材の小破片が20数点、粗粒安山岩を主とした小円礫が18点である。剥片のうちの2点(7・8)は離れて出土したが、接合面の風化状況から、打撃を受けながらも剝離しきれなかった部分が、遺存中に分離した可能性がある。なお、近世以降の陶磁器が3点混入していた。
- 49号土坑** 発掘区の北部で、43号土坑の南東方向に近接して検出された。平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形である。出土した遺物は土器の小破片3点のみである。
- 50号土坑** 発掘区の南部の西端で検出された。斜面に近いので、西部は発掘できなかった。平面形は楕円形を呈するかもしれない。断面形は全体的に皿状であるが、南部では段差が認められる。
- 51号土坑** 発掘区の北部で、8号住居跡の北端部を切って検出された。平面形は楕円で、断面形は逆台形に近い。出土した遺物は、連続爪形文の施文された例を含む土器片が13点、磨石1点、使用痕のある剥片2点、剥片1点、粗粒安山岩の礫6点である。
- 52号土坑** 発掘区の北部で、8号住居跡と切り合い関係を有して検出されたが、先後関係は確認できなかった。平面形は円形に近く、断面形は皿状である。
- 53号土坑** 発掘区の北端部で検出された。平面形は円形で、断面形は皿状に近い。黒色頁岩製の小剥片が1点出土した。
- 54号土坑** 発掘区の北部で検出された。平面形は楕円で、断面形は逆台形である。遺物は埋土の上位を中心として、土器の小破片が2点、多孔石の破片1点、剥片2点、砕片7点、炭化したクルミや木材の小破片が少し、そして、粗粒安山岩を主とした円礫が11点出土している。
- 55号土坑** 発掘区の中央部で検出された。平面形は不整で、断面形はU字状である。遺物は埋土の中位を中心として出土している。出土した土器片は13点であるが、関山Ⅰ式が中心と思われる。石器は石鏃の未成品1点と磨石2点、星ヶ塔産の黒曜石製の楔形石器1点が出土している。
- 56号土坑** 発掘区の北部、8号住居跡の南西部で検出された。連続爪形文の施文された例を含む土器片21点、削器・楔形石器・敲石・使用痕のある剥片が各1点、黒色頁岩を主とした剥片4点、粗粒安山岩を主とした小円礫6点が出土した。

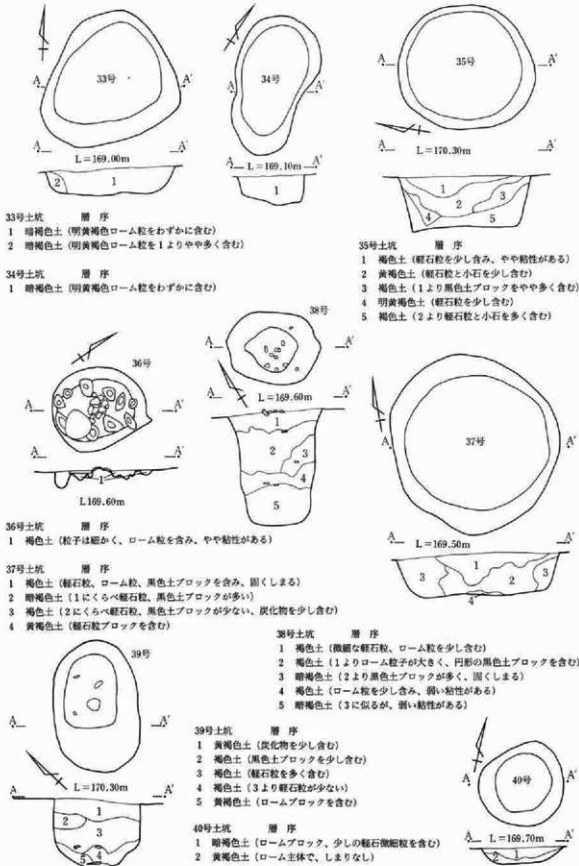


図46 土坑(1)(33~40号土坑) 1/40

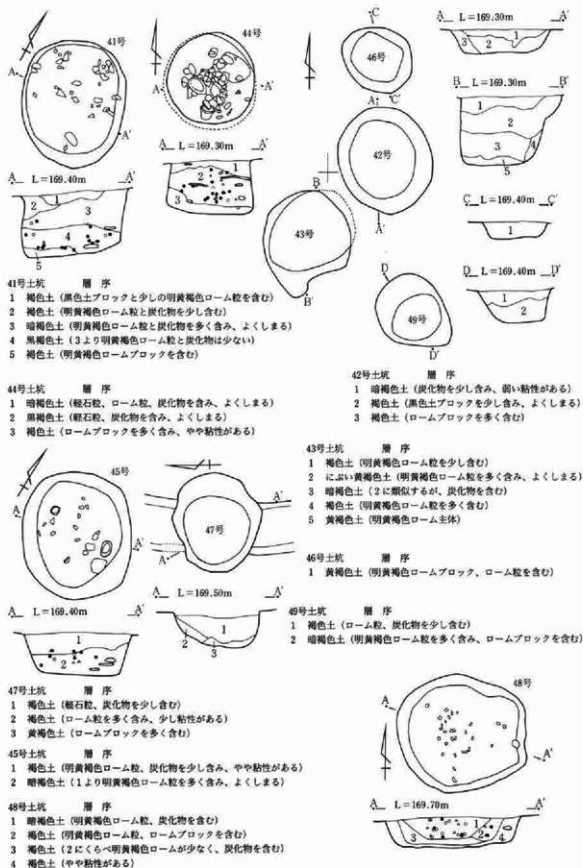


図47 土坑(2)(41~49号土坑) 1/40

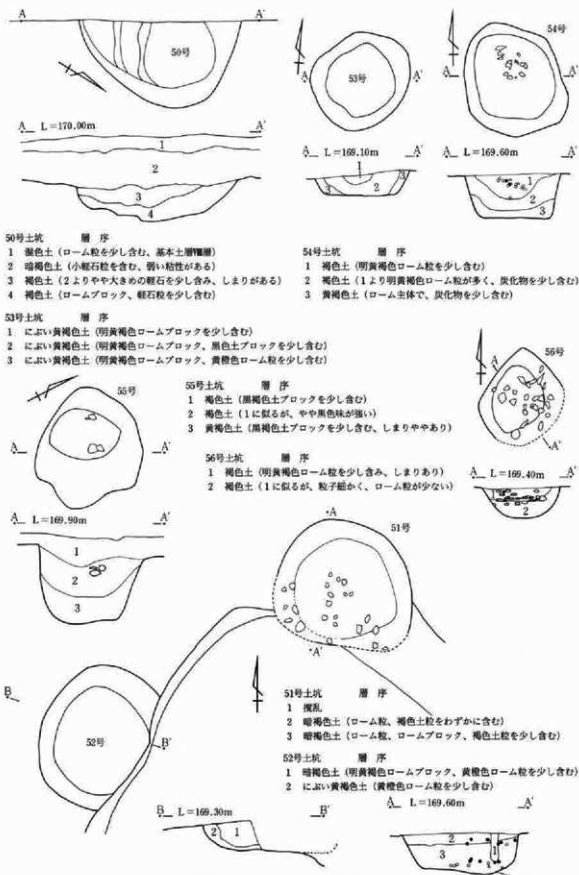


図48 土坑(3) (50~56号土坑) 1/40

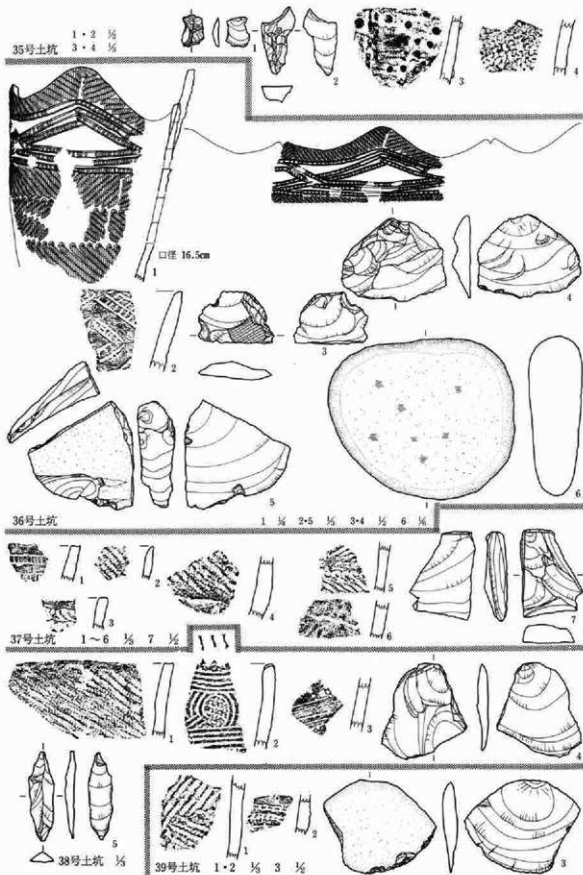


図49 土坑出土遺物(1)(35~39号土坑)

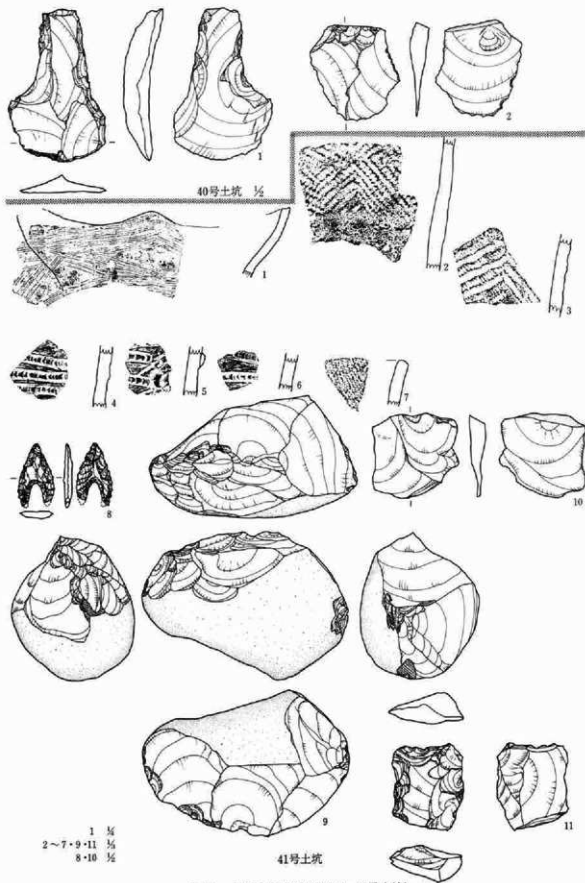


图50 土坑出土遗物(2)(40·41号土坑)

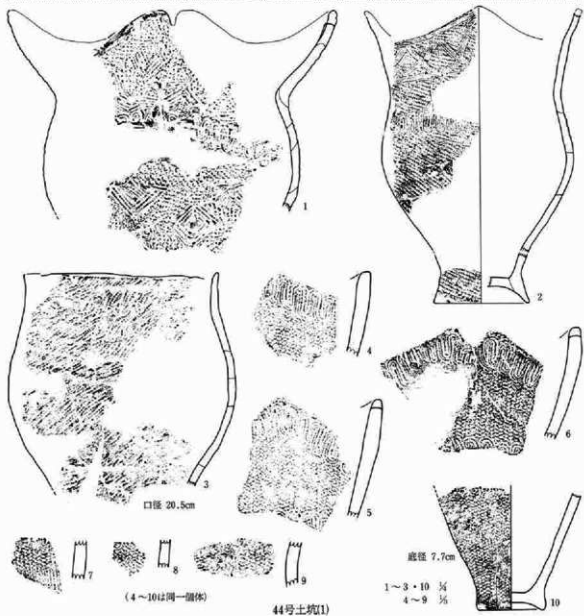
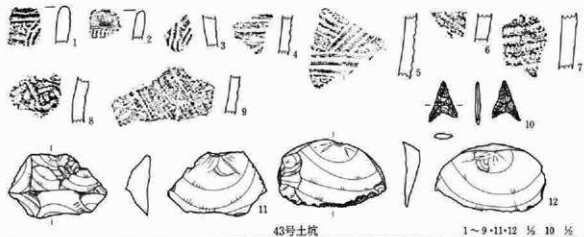


図51 土坑出土遺物(3)(43・44号土坑)

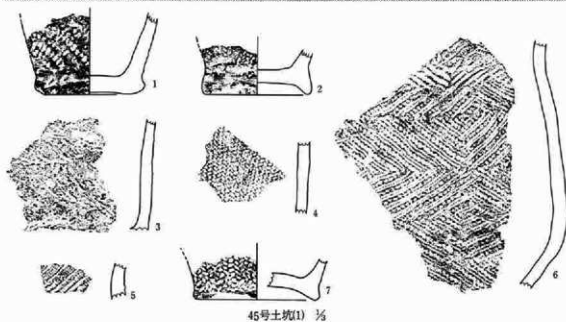
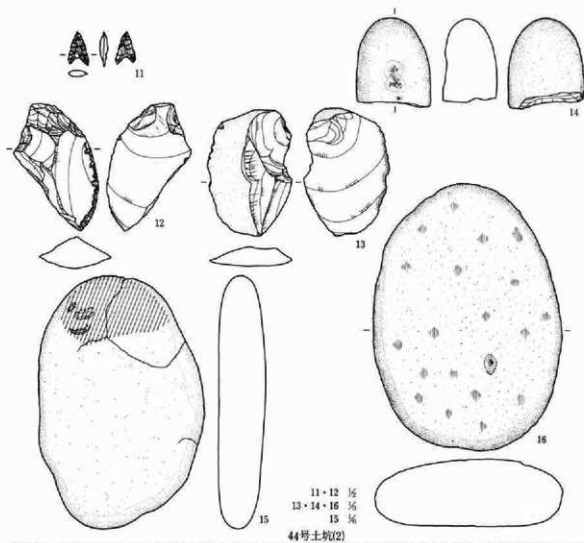


图52 土坑出土遗物(4)(44·45号土坑)

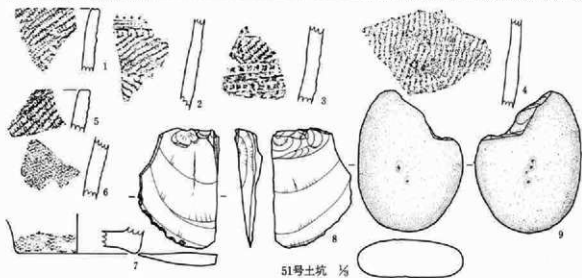
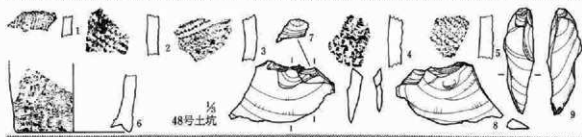
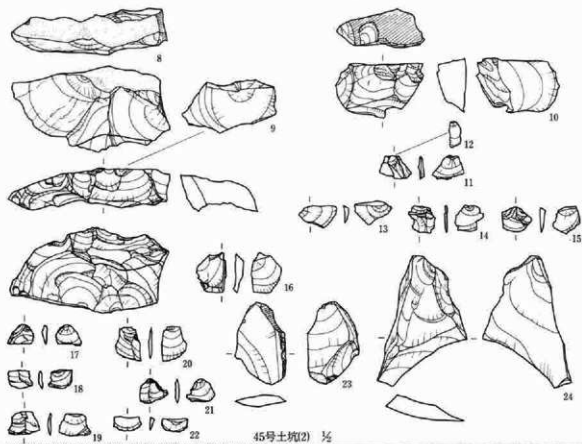
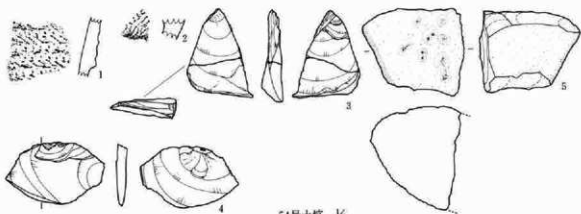
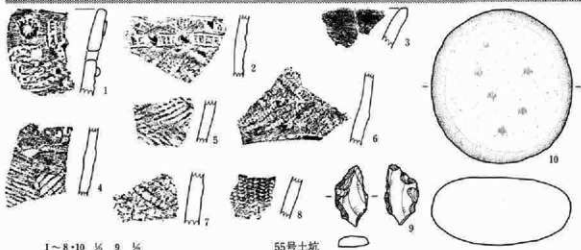


図53 土坑出土遺物(5) (45・48・51号土坑)

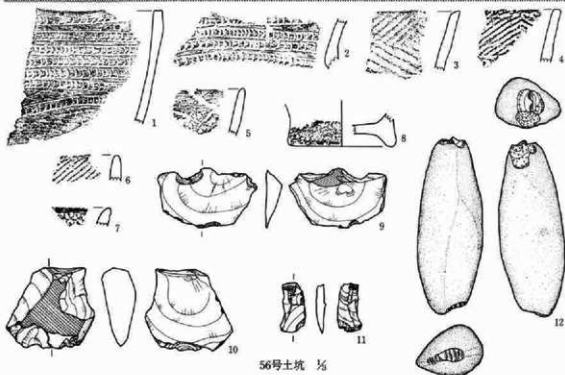


54号土坑 1/2



1~8·10 1/2 9 1/2

55号土坑



56号土坑 1/2

图54 土坑出土遗物(6)(54~56号土坑)

3. 溝

発掘区の北端部よりのBO21から中央部西よりのBC21にかけて、等高線にほぼ沿って、弱い蛇行を示しながら、2号住居を切り走行している溝が検出され、2号溝と呼称した。北東部はさらに延び、南部では崖まで達するかもしれない。深さは50～60cmで、断面形は上幅85～100cm、下幅約40cmの逆台形状を呈

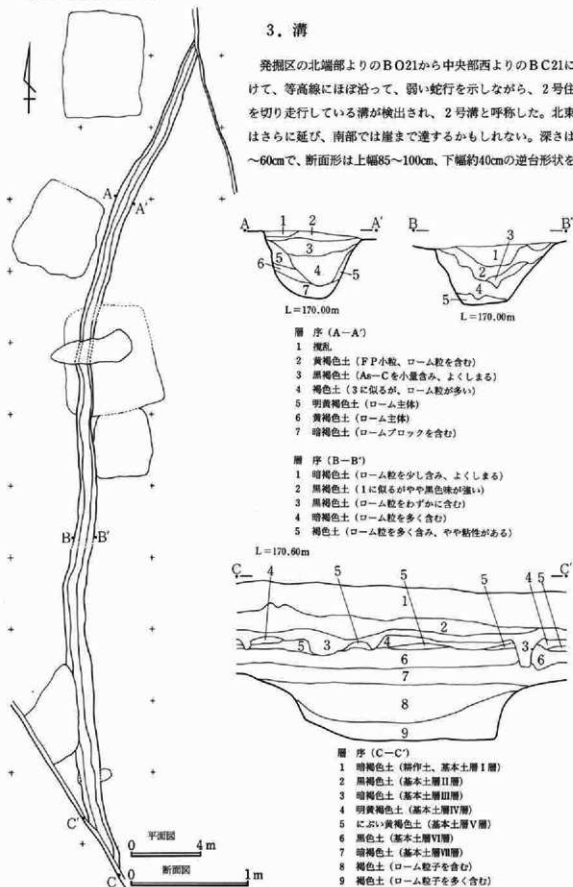


図55 2号溝

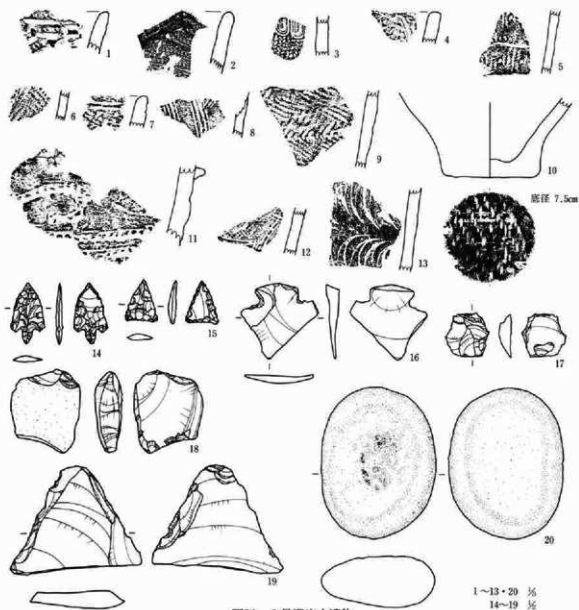


図56 2号溝出土遺物

する。底面のレベル差は両端で約20cmを測り、南端が低い。埋土の下端部を見る限りにおいては水の流れを積極的に示す形跡は認められなかった。

この溝の南端部の土層断面では、溝の埋土の上に浅間C軽石(As-C)が堆積しており、また2号住を切っていることから、この溝の掘削時期は4世紀中頃以前で黒浜・有尾式期以降であることは確実である。また埋土の中位から上位を主にして出土した土器は、縄文時代前期の各式を主として、最も新しい例では後期に属すると考えられる土器(10)がある。また、若干の近世以降の陶磁片が混入していたが、弥生土器や古式土師器は出土しなかった。

このように、本遺跡の掘削時期を限定する資料は乏しいが、縄文時代に属する可能性が考えられる。

出土した石器には、石鏃2点、石匙2点、打製石斧2点、削器1点、凹石1点、石核1点、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片8点、剥片・碎片20点がある。

4. 遺構外出土の遺物

(1) 土器 (図57、図版33)

上述のように、本遺跡において検出された住居跡は縄文時代前期前半が主体であり、前期後半がそれに次ぎ、中期の例も加わる。そのため、遺構外出土の土器も胎土中に繊維を多く含む縄文時代前期前半のものが圧倒的であるが、前期前半・中期・後期の土器も存在する。しかし、早期燃糸文系の土器は確認できず、北橋村教育委員会で調査した「城山遺跡」と近接して同一地形面上にありながら、その占地の有り方は対照的である。

縄文時代前期前半の土器は、遺構にともなって出土した土器により代表させることとして、本項ではそれ以外で特徴的な土器を例示する。各土器の諸属性は巻末の観察表(表10)に譲り、以下気付いた点について述べる。

まず、信州系の神ノ木式土器に特徴的に見られる「東の縄文」を持った土器が出土していることである。この土器は、繊維を含まず焼成が良いためか、同時期の関山式土器に比べ硬質で、色調も明るく、明らかに異質の土器で、他の土器との分類も容易である。東の縄文原体は、単節RとLの原体を各1本を折り返して4本の縄の束にしている。この際、折り返したRの閉端にLの縄を折り返し、縛り付けることによって末端の処理をしている。閉端は、他の細い縄で末端を縛りつけている。従来、東の縄文は4本の原体を用いて、両端を他の縄で縛り付けたものとされているが、本遺跡出土のものは、閉端を他の縄で縛り付け、閉端は折り返しているという違いが確認された。「東の縄文」は、管見に触れた群馬県内の報告例としては初出である。出土した神ノ木式土器は東の縄文を施文した部分のみで、他の文様を持った部分は未検出である。櫛歯状の工具によって施文された土器が数点出土しているが、神ノ木式土器と断定できるものではない。関山Ⅱ式土器と、有尾式土器との文様変遷にかかわる土器として考察するのは、今後文様をもった神ノ木式土器資料の増加に期待し、今回は神ノ木式土器が関山Ⅱ式の段階から黒浜・有尾式の段階へと変遷する過程の中で、県内では何等かのかかわりがあり、この時期に伴伴する事を予測するに止どめる。しかし、本遺跡と同時期と思われる周辺の遺跡からは、東の縄文を持った神ノ木式土器が出土していないという事実もあり、今後、当該期の遺跡では、東の縄文を注意していく必要がある。

前期後半では、東関東、南東北の土器である浮島式、大木式土器などの異系統のものが、諸磯Ⅱ式から諸磯Ⅲ式土器に伴って、県内東部の遺跡では出土している例が多い。図57No.19の大木5式土器は地文の平行沈線は諸磯式の特徴を持ち、粘度紐を鋸歯状に貼付するなど、大木5式の特徴を持っていると言える。これとは別に、大木式土器と浮島式土器、浮島式土器と諸磯式土器の両型式の特徴を持った土器が、特に、片品川、利根川流域の当該期の遺跡で多く見られるようになった。片品川の上流の尾瀬を越えると福島県の会津地方である。会津地方では、東関東の浮島系土器の分布も見られる。浮島系土器は利根川を上って来ただけでなく、大木系土器とともに浮島系土器は尾瀬を越え、片品川に沿ってこれらの土器が搬入され、諸磯系土器と融合していったとも考えられる。前期終末の十三菩提式土器については、本県でも遺跡数は少なく、遺構に伴って出土した例も少ない。十三菩提式土器は諸磯式期の集落遺跡から出土する例が多く、単独で出土する遺跡はあまり見られない。諸磯式期後半の遺跡と立地条件が同じためと考えられる。本遺跡でも遺構に伴わず表土中から数点出土したのみで、他の同時期の遺跡出土例と同様の在り方である。

このように、本遺跡からは、南東北、信州、そして東関東系の土器が出土しており、胎土からみて搬入品の可能性の高い例もある。今後、広い視野の中で本遺跡が捉えられなければならないことを示している。

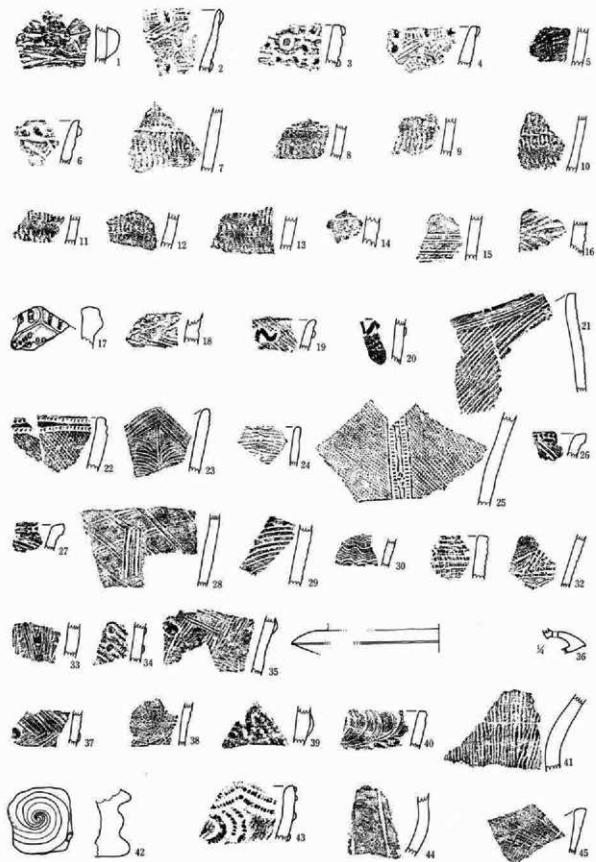


図57 遺構外出土土器 1/3

(2) 石器 (図58～61、図版34・35)

本遺跡の縄文時代の遺構に伴わない石器は、中世以降の土坑や溝から出土したが本来的にそれらの遺構に伴わないと考えられる石器を含めて、1153点出土した。特に密集した出土状況は認められなかったが、B区の1・2・8・3号住居の周辺から比較的多く出土した。以下、その概要を記す。

石鏃 (図58-1～15)

15点出土している。無茎鏃が主体で、凹基が10点 (1～9・15)、平基が2点 (10・13) であり、前者では黒曜石製が4点、黒色頁岩・チャート製が各2点であるが、大きさ・形態上変異に富む。15は側縁に段を有する五角形鏃に近い形態を示す。他に円基鏃 (12) や、有茎で飛行機鏃の可能性のある例 (11) がある。黒曜石製の6点のうち、長さが2cm未満の例が4点あり、素材の剥片および原石との関係が注目される。

石匙 (図58-16～24)

つまみ状の突起の作出が不明瞭な例 (18) もあるが、9点を認めた。縦型4点、横型4点、欠損で不明1点である。16の珪質頁岩製の他は、すべて黒色頁岩製である。

磨製石斧 (図59-26・27)

2点出土している。26は横断面が凸レンズ状を呈し、27は定角式である。いずれも破損しているが、後者は敲石に転用されている可能性がある。

打製石斧 (図59-28～37)

13点出土している。全体の形状が知られるのは7点であるが、分銅型 (28)、楕形 (29・30・31)、短冊型 (32) などがあり、両側縁が少しえぐられる例 (33) もある。また、調整剥離がほぼ片面のみの例 (31) は別な器種を想定すべきかもしれない。黒色頁岩製が10点、点紋頁岩・灰色安山岩・ホルンフェルス製が各1点である。

楔形石器 (図59-38～40)

10点出土した。石材はチャート6点、珪質頁岩・石英・黒色安山岩・黒曜石各1点である。

削器 (図58-25、図60-42～45)

剥片の縁辺に連続した剥離が加えられたもので、56点を認めた。横長剥片の端部に調整剥離を施すのが32点で約6割を占める。縦長剥片の1側縁のみに調整剥離を施すのが6点、縦長剥片の両側縁に調整剥離を施すのが3点である。刃部は直線状を呈するのが主体であるが、凹刃や凸刃も少数ながら認められる。また、調整剥離の中には急角度に施されるものもあり、掘器として扱われるべきかもしれない。石材は黒色頁岩が47点、チャート・細粒安山岩が2点、点紋頁岩・頁岩・砂岩・輝緑岩・流紋岩が各1点である。

スタンプ形石器 (図60-52)

棒状礫の長軸に直交した打割面を作出し、その面に直交する調整剥離を加えている例が1点出土している。打割された面には使用痕は認められない。

凹石・磨石・敲石 (図60-51・53、図61-57～62)

礫素材で明確な凹部を有するものを凹石、磨面のみを有するものを磨石、敲打痕のみを有するものを敲石とした。しかし、凹石のなかにも磨面のあるもの、磨石の中にも若干の敲打痕のあるものがあり、上記3者を明確に分離し、その関係を明らかにすることはできなかった。

凹石は14点を認めたが、表裏に凹部が形成されているのが11点、片面のみが3点である。60は両側縁に、61は表裏と四側縁に磨面が明確に形成されている例である。石材は粗粒安山岩が11点、石英閃緑岩が2点、ひん岩が1点であった。

磨石は28点を認めた。扁平な礫の表裏に磨面が認められるのが17点、他に片面のみのもの、側面のみのもの等がある。また、敲打痕を少し有するものもある。59は表裏の磨面とともに敲打痕が認められ、凹石に近い。62は棒状に近い礫の側面に磨面がある。ところで、重さが2kgをこえる磨面を有する扁平な礫が破片を含めて4点出土しており、石皿的な使用を想定し、分類を別にすべきであろう。石材は粗粒安山岩が20点、細粒安山岩が1点、石英閃緑岩が5点、角閃石安山岩・ひん岩が各1点である。

敲石は8点を認めた。扁平な円礫や棒状礫を主体にして、側縁や端部に敲打痕や剥離痕を有する(51・53)。石材は黒色頁岩・細粒安山岩各2点、灰色安山岩・粗粒安山岩・閃緑岩・変質玄武岩各1点である。今後、対象物に直角に作用する場合と円弧を描いて作用する場合を考慮に入れて分類しなければならない。

石皿(図61-63)

いずれも破片で、粗粒安山岩製の例が2点認められた。

石核(図60-48-50)

52点認められ、礫素材が17点、剝片素材が27点、不確定8点であるが、利器として利用されたものも含まれているかもしれない。石材は黒色頁岩41点、黒色安山岩3点、灰色安山岩3点、ホルンフェルス・ひん岩・文象斑岩・珪質頁岩、そして砂岩・頁岩が各1点である。

原石(図60-54・55)

黒曜石礫岩の2点が出土している。いずれも人為的な剥離痕は認められない。黒曜石として黒域外からの搬入品とは断定できないが、同様の状況を示す8号住居跡と41号土坑出土の石核(図76-9・12)の例からして、黒曜石の可能性が高いと考えられる。その前提に立てば、最大長が5cm未満という大きさから、その入手のあり方、石器との対応関係を考える上で注目してよい資料であろう。

二次加工のある剝片

非連続的な調整剥離が施された剝片で、58点を認めた。意識的に折断していると考えられる例も含まれていたり、調整剥離の部位の規則性など検討すべき課題は多い。石材は黒色頁岩が47点、黒色安山岩が4点、チャート2点、灰色安山岩・粗粒安山岩・流紋岩・細粒安山岩が各1点である。

使用痕のある剝片(図60-41・46・47)

微細な剥離痕を有する剝片で、111点を認めた。黒色頁岩89点、チャート8点、黒曜石7点、珪質頁岩3点、灰色安山岩2点、頁岩・黒色安山岩各1点である。二次加工のある剝片と同様な課題が残る。

剝片・砕片

772点を認めた。石材は黒色頁岩632点、黒曜石28点、黒色安山岩25点、チャート23点、頁岩15点、灰色安山岩12点、ホルンフェルス10点、粗粒安山岩7点、珪質頁岩6点、変質玄武岩5点、砂岩3点、変質安山岩・変質凝灰岩・輝緑岩・流紋岩・黒色片岩、そして砂岩・頁岩が各1点である。

飾り玉(図60-56)

ひすい(?)製で白玉状の例が1点出土した。

ところで、本遺跡で検出された住居跡は縄文時代前期を中心とするが、関山II式から諸磯b式期までの時期差があり、また遺跡外出土の石器には縄文時代中期・後期の例が含まれる。さらに、スタンプ形石器は縄文時代早期の撫余文期に限定され、飛行機線は縄文時代晩期に特徴的とされる。このようなことを考えると、本遺跡の遺跡外出土の石器群を時間的に限定するのは困難であると言わざるを得ない。

(3) 粘土塊等(図版35)

火熱を受けた粘土紐および粘土塊が5点出土している。いずれも繊維は含んでいない。

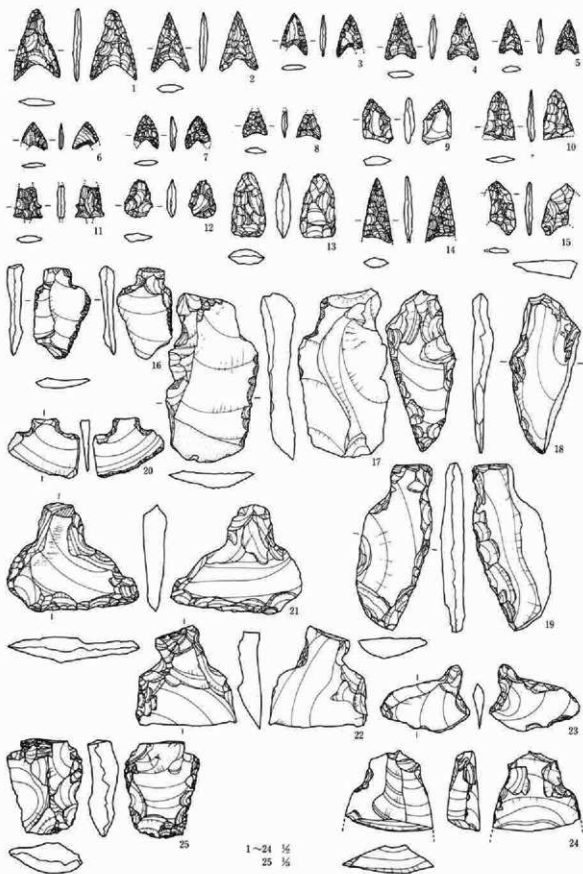


図58 遺構外出土石器(1)

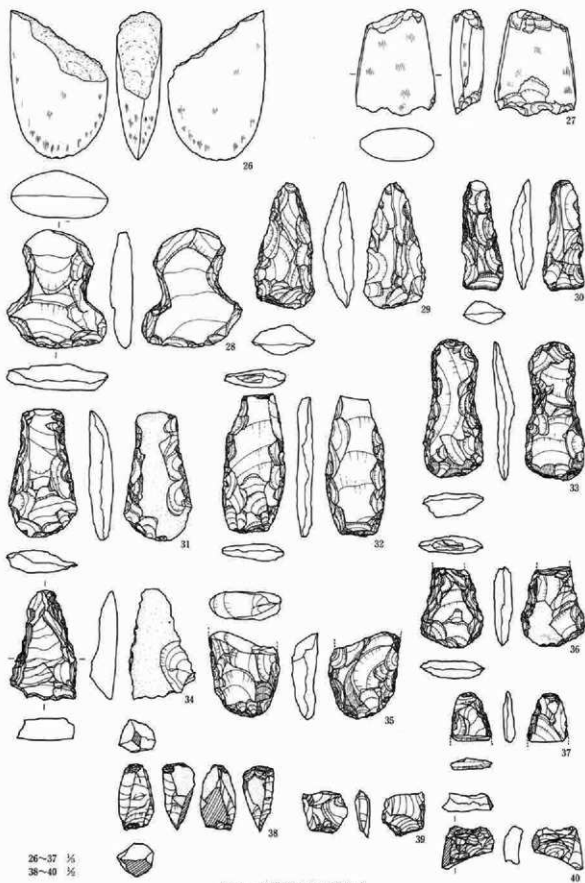


図59 遺構外出土石器(2)

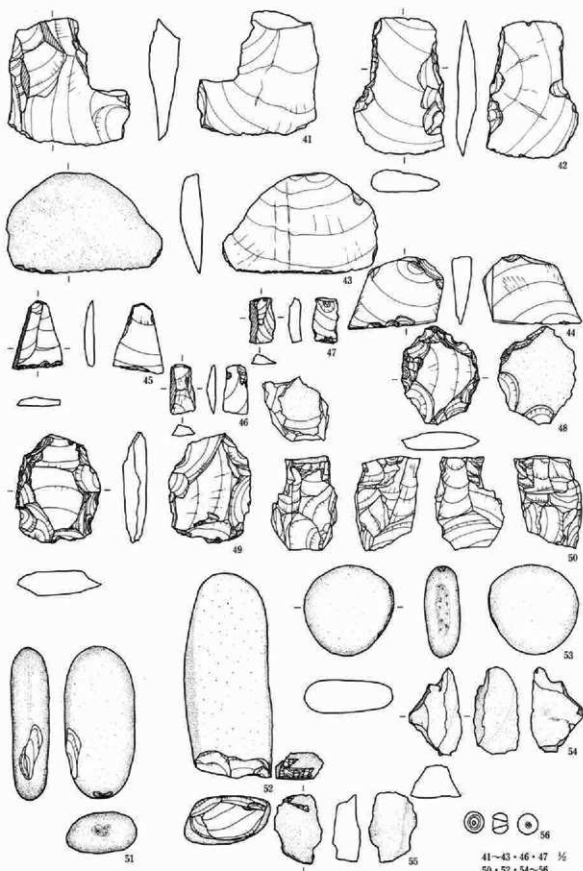


図60 遺構外出土石器(3)

41~43・46・47 片

50・52・54~56

44・45・48・49・51 片

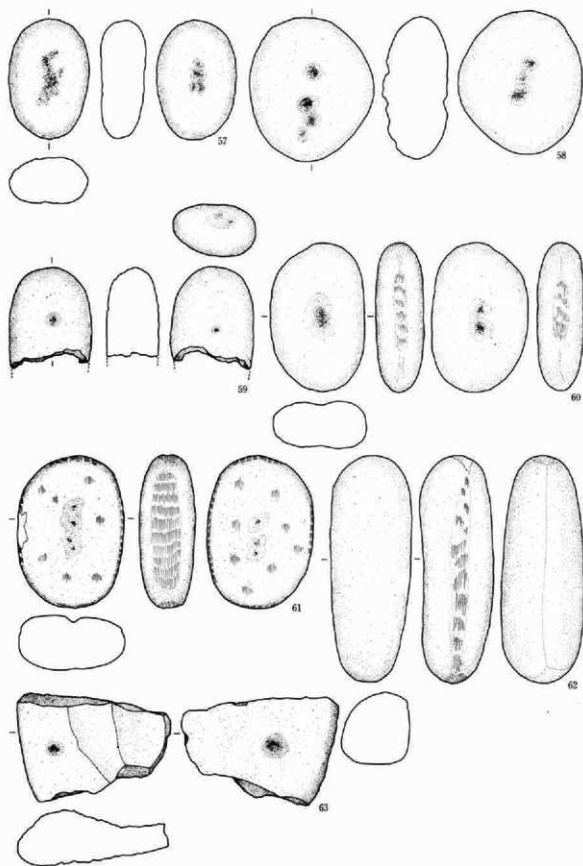


图61 遺構外出土石器(4) 1/3

第5章 中世以降の遺構と遺物

中世以降における遺構は、溝、土坑、墓塚、柵列等が主として検出された。分布状況は狭長な調査区に散見しているが、崖面が利根川に広く張り出す北半部に集中する。

遺物は量的には多くなく、陶磁器、土師質土器が中心を占める。

1. 溝 (図62~64、図版18・19)

1号溝 遺構は調査区北西端に位置し、北北東に向かって直線的に延びる。上幅2.2m~2.4m、下幅0.6m~0.7mを測り、断面は逆台形状を呈する。深さは1.6m~1.9mで、地形の関係から西側に比較して東側が高くになっている。掘り込み角度は鋭い。底部はローム層下の粘土層に達し、ほぼ水平に整えている。また楕円形を呈するピットが一列に交互に長軸方向を変えながら連続しているのが検出された。ピットの形状と深さから杭の存在は認めがたく、構築の際に穿たれた工具痕と思われる。埋没状況は中央部における土層観察から、自然堆積の様相が認められ、人為的な状況は見出されない。その他溝に伴う遺構は検出されなかった。重複する土坑はすべて堀より新しい時期のものである。

山崎一氏の御教示によると、形状は栗研堀で、占地、連続性から防壁上の遺構が想定される。東方の城山上に所在する箱田城を防御する最前線の遺構堀が考えられる。またこの遺構堀はさらに北側に回り込み、城の北半部を圍繞するように延長している痕跡が、踏査と空中写真により確認された。

遺物は遺構に伴うものではなく、埋没過程で流入した前時代のものである。

3号溝 BK22~BM21グリッドにかけて検出された。1号溝とほぼ平行しており、北端から約13m南側へ延びる。幅は南側へいくにつれて広がる。底部は平坦に整えられ、深さ20cmを測る。1号、2号柵列を切って掘り込まれる。

遺物は遺構に伴うものは出土していない。

4号溝 調査区のほぼ中央に位置し、地形の傾斜に平行して東西に走る。東端部は緩やかな弧を呈するが、おおむね直線的である。上幅は1.0m~1.5mを測り、中央付近が広がる。また両端部は幅を少し狭めながら区域外に延びる。底部は平坦に整えている。

覆土中より部分的であるが、底部からやや上面にブロック状に残存している浅間B軽石が確認された。本遺構の廃絶期を推定する上で注目すべき点である。

遺物は出土していない。

5号溝 本遺構はBHライン上にほぼ東西に延び、2号溝、17号、18号、19号土坑を切って重複し、22号土坑付近で収束する。上幅30cm~35cm、深さ約18cmと浅く、狭長なプランを呈する。

遺物は時期を決定できるものは出土していない。

6号溝 4号溝の北側に隣接している。西端は4号溝北壁に接し、東北東側に延びていくと思われる。上幅20cm~43cmと均一でなく、深さも一定していない。断面は浅いU字状を呈する。

遺物は出土していない。

7号溝・8号溝 5号溝の西側に位置し、ほぼ南北に走る。2条は平行しており、土層観察から時期を隔てることなく掘り込まれたと思われる。

遺物は出土していない。

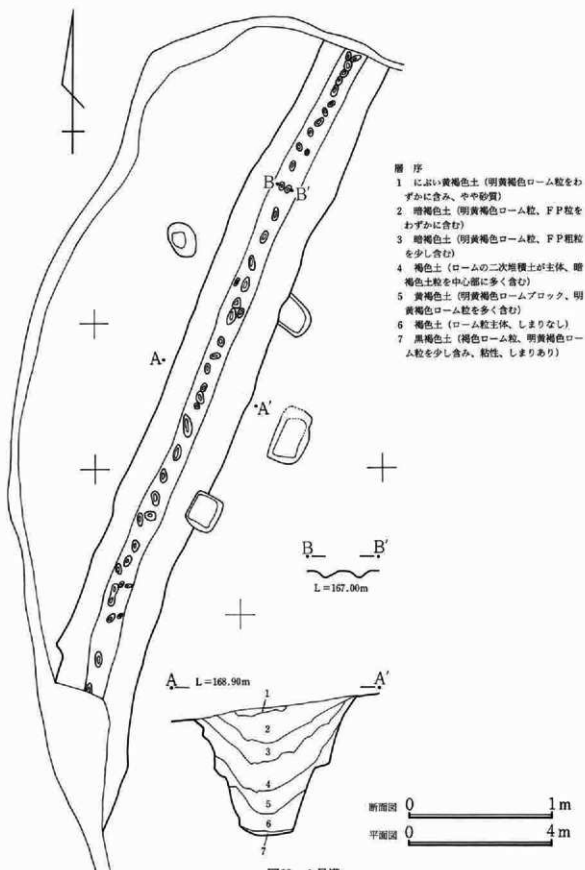


図62 1号溝

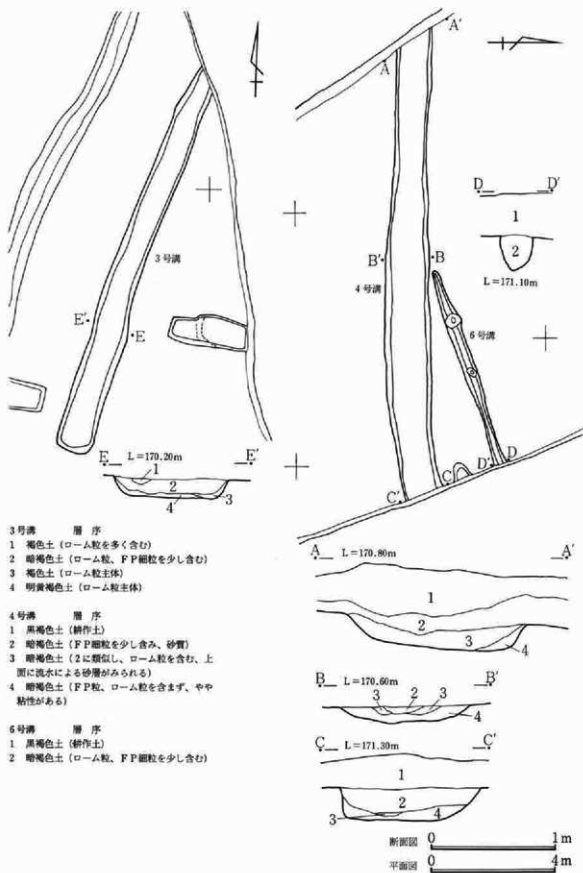


図63 3・4・6号溝

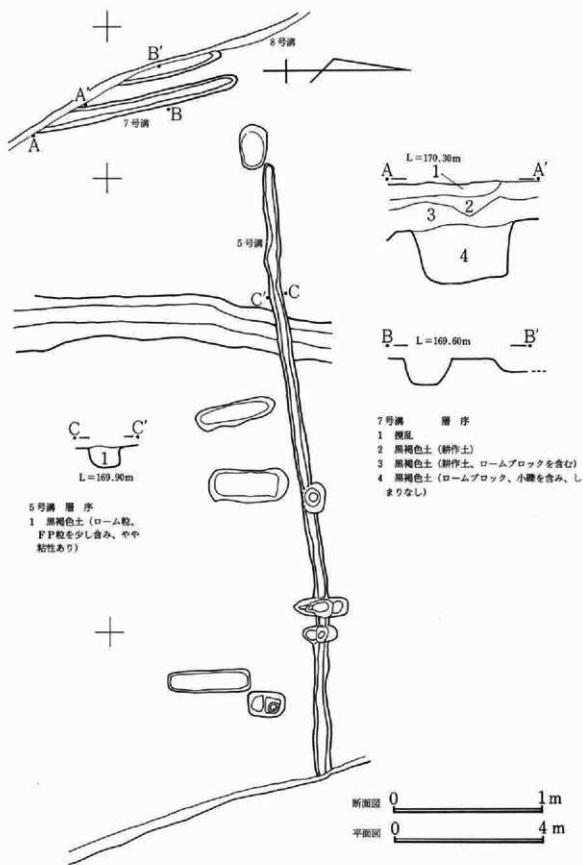


図64 5・7・8号溝

2. 29号土坑(墓墳)(図65・66、図版23・43~46)

遺構はBK22グリッドにおいて、長軸を北からやや東寄りに向けて位置する。2号溝を調査中に1号人骨を検出し、さらに足元後方にもう一体分の2号人骨を確認した。

調査は墓墳の重複を前提に進めたが、長辺の南北壁面に食い違いがなく、プランも整然としている。両人骨は同レベルにあり、底面においても差が認められない。さらに埋葬状況が共通している。1号人骨の南側の空間と2号人骨の北側の空間、そして両者の位置関係が意識されている点などを踏まえて、二体は同時に埋葬されたと思われる。

遺物は古銭のみである。1号人骨は頭部を中心に8枚が単一に、左肩に2枚、腹部に3枚が重なる(1~12)。2号人骨は胸部と腹部に3枚ずつ重なって出土している(13~18)。

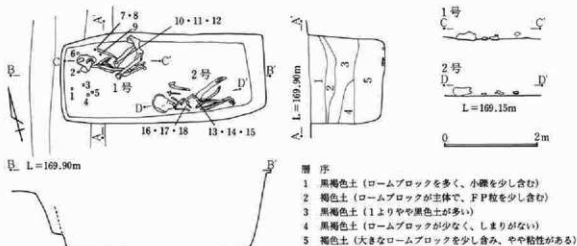


図65 29号土坑(墓墳)

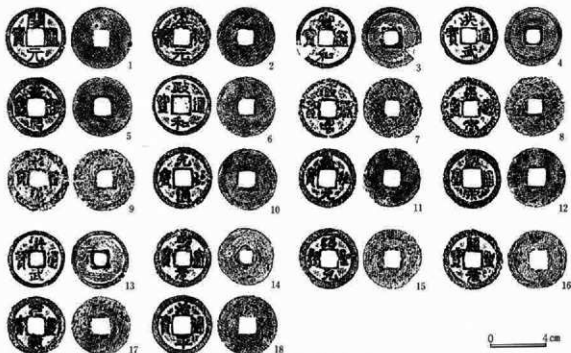
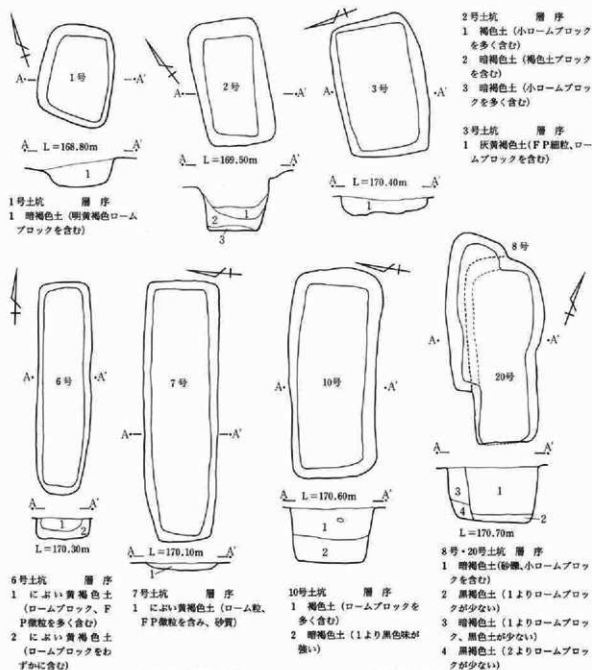


図66 29号土坑(墓墳)出土古銭

表3 29号土坑(基壇) 出土古銭一覧

No	銭文	読順	書体	径	孔	初鋳年	No	銭文	読順	書体	径	孔	初鋳年
1	開元通寶	対読	隸書	24mm	7mm	621年	10	元符通寶	順読	行書	24mm	6mm	1098年
2	淳祐元寶	順読	真書	23mm	7mm	1241年	11	嘉祐元寶	順読	真書	23mm	7mm	1057年
3	宣和通寶	対読	隸書	24mm	6mm	1119年	12	皇宋通寶	対読	隸書	23mm	6mm	1039年
4	洪武通寶	対読	真書	23mm	6mm	1368年	13	洪武通寶	対読	真書	23mm	5mm	1368年
5	宣和通寶	対読	隸書	24mm	7mm	1119年	14	紹聖元寶	順読	隸書	23mm	5mm	1094年
6	政和通寶	対読	隸書	24mm	6mm	1111年	15	紹聖元寶	順読	行書	24mm	7mm	1094年
7	政和通寶	対読	隸書	24mm	6mm	1111年	16	紹聖元寶	順読	隸書	24mm	7mm	1094年
8	皇宋通寶	対読	隸書	24mm	6mm	1039年	17	元豐通寶	順読	隸書	23mm	7mm	1078年
9	元祐通寶	順読	行書	24mm	6mm	1093年	18	治平通寶	対読	真書	24mm	7mm	1064年



第5章 中世以降の遺構と遺物

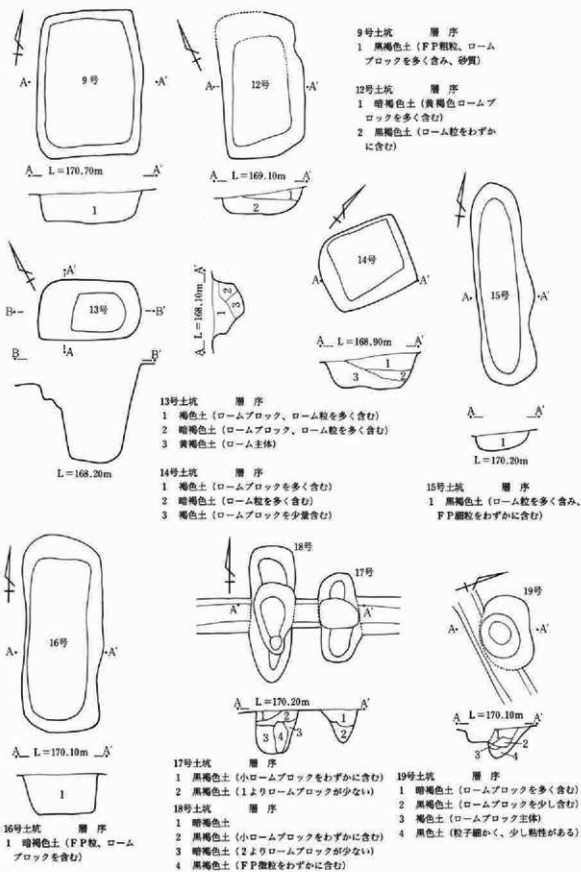


図68 土坑(2)(9・12~19号土坑) 1/40

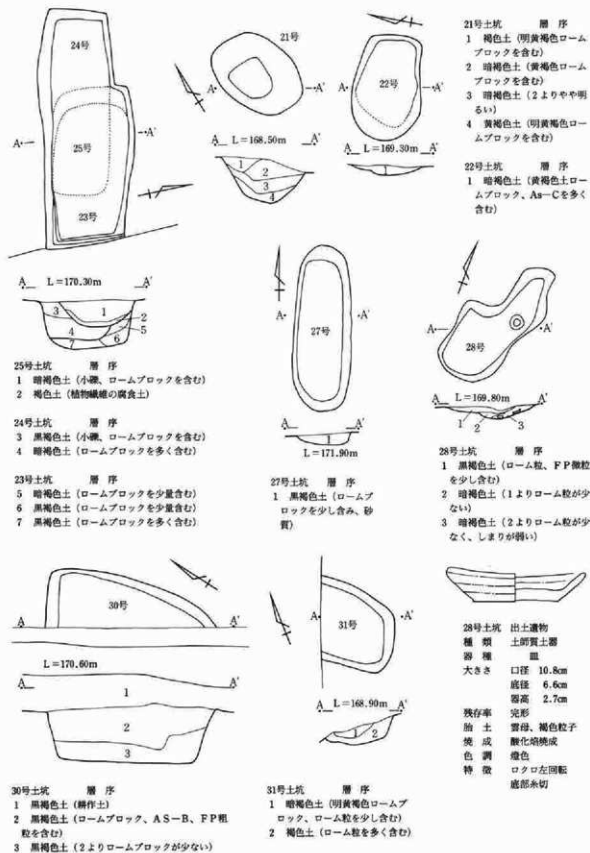


図69 土坑(3)(21~25・27・28・30・31号土坑) 1/40

3. 土 坑 (図67~69、図版20~24)

検出した土坑は、そのほとんどが調査区北半部に集中し、特に1号溝と5号溝付近に多くの分布がみられる。プランは楕円形と長方形があり、その多くは長方形を呈する。また長軸の長短の差および方向性(東西と南北)においても2種類に大別される。遺物は埋没過程で流入した陶磁器の小片がわずかに出土しているほかは、確実に遺構に伴うものとして土師質土器の皿が28号土坑より出土している。

なお、調査時において土坑と確認したが、その後現代に属すると考えられた4号、5号、11号、26号、32号については欠番として、写真のみを掲載した。

表4 中世以降の土坑一覧

No	位 置	平面形	規 模(cm)	長軸方位	備 考	No	位 置	平面形	規 模(cm)	長軸方位	備 考
1	BR22	長方形	104×80×31	N-35°-E	20土坑(新)	17	BH20	長方形	95×42×36	N-0°	5溝(新)
2	BP22	長方形	132×78×56	N-28°-E		18	BH21	長方形	145×47×46	N-0°	5溝(新)
3	BI21	長方形	148×97×18	N-80°-W		19	BH21	楕円形	79×55×31	N-71°-W	5溝(新)
6	BG20	長方形	225×58×23	N-1°-W		20	AW17	長方形	195×72×58	N-24°-W	8土坑(旧)
7	BE21	長方形	276×80×8	N-85°-E		21	CO0	楕円形	100×72×44	N-18°-W	
8	AW17	長方形	166×62×56	N-24°-W		22	BG24	楕円形	113×71×11	N-50°-W	
9	AT15	長方形	154×112×32	N-9°-W		23	BK20	長方形	168×93×50	N-75°-W	
10	AS15	長方形	222×94×58	N-82°-E		24	BK21	長方形	196×82×40	N-78°-W	23~24~25
12	BN24	長方形	154×87×21	N-22°-E		25	BK20	長方形	150×93×27	N-74°-W	
13	CO0	長方形	110×63×65	N-62°-W		27	BD21	長方形	175×61×12	N-3°-E	
14	CM0	長方形	96×83×35	N-28°-E	28	BK23	不整形	152×65×14	N-22°-E		
15	BG22	長方形	216×62×17	N-14°-W	30	B21	長方形	184×—×60	N-25°-W		
16	BG21	長方形	208×85×42	N-1°-W	31	BO24	長方形	—×84×18	N-53°-W	1溝(新)	

4. 柵 列 (図70・図版24)

BK~BM21グリッドにおいてビットが集中して確認されたが、1号および2号柵列に規則性が認められた。しかし柱穴間には等間隔ではなく、方向も相違する。前者はほぼ南北に直列し、後者は直角に開く。柱穴の規模や埋土の様相は両者とも類似性が認められる。

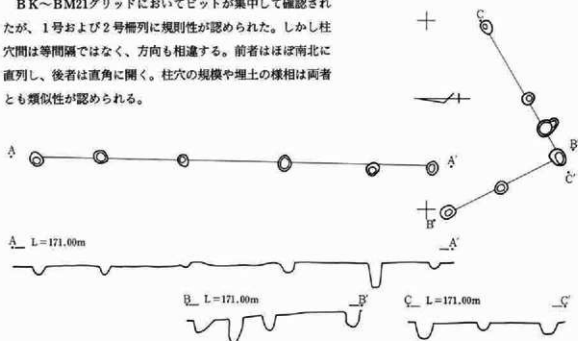


図70 1・2号柵列 1/80

5. 陶磁器 (図71、図版46)

当遺跡では、中世～近代に至る間の軟質陶器・陶器・磁器を98点ほど出土している。これらの陶磁器は、1～3・5号溝から22点、5・12・13・28・48土坑より9点が出土しているが出土遺構に確実に伴うものは見られない、またこの他の67点は、全て表土及び攪乱よりの出土である。

出土した陶磁器類の内訳は、中世では軟質陶器である内耳銅片12点、火鉢片1点である。近世では、瀬戸・美濃系陶器26点、肥前系陶器6点、肥前系磁器8点である。近代では、瀬戸・美濃系陶器11点である。また、産地・器種・時期の不明のものが34点である。

以上のように98点の陶磁器の出土がみられるが、ほとんどが小片で図示できるものは下記の7点であった。

表5 陶磁器観察表

No.	種類	出土位置	口径・底径 器高・残存率	胎土・焼成	色調	産地・軸調	特徴	時期
1	軟質陶器 内耳銅	A V-17G	—・— —・小片	骨母・微砂粒 還元焰焼成	灰黒色	在地産	体部片、下半に横方向のヘラ削り	16C
2	軟質陶器 内耳銅	B区表土	—・— —・小片	骨母・微砂粒 還元焰焼成	灰黒色	在地産	体部片体部下半に横方向のヘラ削り	16C～17C
3	軟質陶器 火鉢	5号溝	—・— —・小片	褐色粒・砂粒 還元焰	黄褐色	在地産	体部片、外面に書文	中世
4	陶器 椀	B区表土	—・— —・小片	微砂粒 還元焰	灰白色	瀬戸・美濃系	天目茶桶体部下位から底部にかけては無軸	16C～18C
5	陶器 椀	B区表土	10.8・— —・1/10	微砂粒 還元焰	淡灰色	瀬戸・美濃系 アメ軸	軸に黒斑点がみられる	18C
6	陶器 椀	B区表土	—・— —・小片	微砂粒 還元焰良好	灰白色	瀬戸・美濃系 軸・アメ軸	腰縮椀、体部に3条の凹線がある	18C後半～ 19C前半
7	陶器 皿	3号溝	—・— —・小片	微砂粒 還元焰軟質	白色	瀬戸・美濃系 志野軸	外面は帯状の施軸、内面は全面	
8	陶器 皿	1号溝	—・— —・小片	還元焰軟質	灰白色	瀬戸・美濃系 志野軸	内面に鉄軸がみられる。	
9	陶器 灌鉢	表土	—・— —・小片	砂粒 還元焰	灰色	瀬戸・美濃系 錆軸		17C後半
10	陶器 不明	BM-23G	—・— —・小片	微砂粒 還元焰軟質	灰白色	瀬戸・美濃系 アメ軸		
11	磁器 椀	B区	15.0・— —・1/10	良好	白色	肥前	外面、染付コンニャク版文	18C前半～ 中頃
12	磁器 椀	表土	9.0・— —・小片	良好	白色	肥前伊万里系	外面口縁部彫紙	18C前半～
13	磁器 椀	BP-22G	—・— —・小片	焼成不良	白色	肥前伊万里系	染付菱形椀、外面菊花文	18C後半～ 19C前半
14	磁器 皿	BK-25G	—・— —・小片	良好	白色	肥前佐波見系	蛇ノ目呂高台、高台端部に重ね焼き痕がみられる。	18C後半～ 19C前半
15	磁器 瓶	BM-25G	—・— —・小片	良好	白色	肥前 外面のみ	外面染付	17C後半～ 18C前半

第5章 中世以降の遺構と遺物

No	種類	出土位置	口径・底径 器高・残存率	胎土・焼成	色調	産地・釉調	特徴	時期
16	陶器 皿	B区	—・— —・小片	微砂粒 還元焼	灰色	不明	内面に鉄粒がみられる。	
17	磁器 茶 戸	5号土坑	外径4.0・内径 1.2・厚0.9	良好	白色	不明	外、内周面のみ施釉	19C

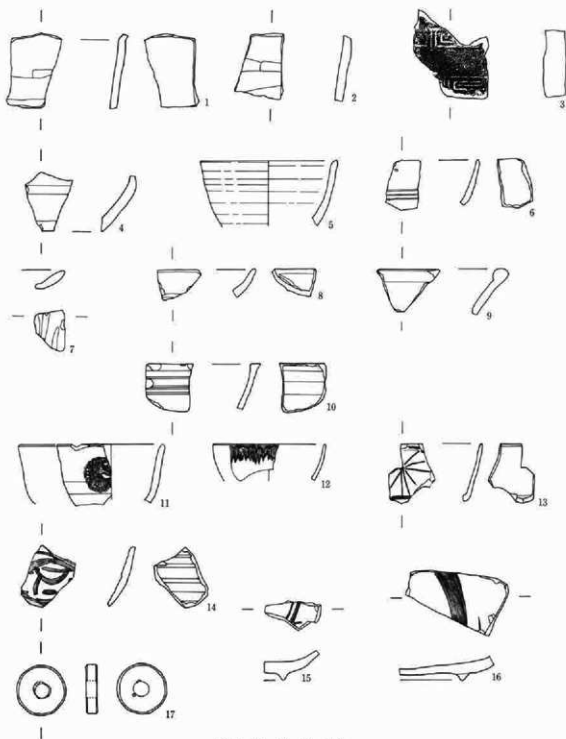


図71 陶磁器 1/3

第6章 特論

1. 8号住居跡出土の石器の接合資料

1. はじめに

下箱田向山遺跡の8号住居の埋土から、良好な石器の接合資料が出土したので、その剥片剥離工程について概略を記す。

この接合資料は住居埋土の途中で、南西部に比較的まとまって検出されたが、一部住居外からも出土している。8号住居は関山Ⅱ式の時期に営まれたものと考えられ、この資料も住居廃絶後、やや時間的経過を経ているが、同式の時期の時間枠のなかに属するものと考えてよいであろう。

2. 剥片剥離工程の検討

本資料は石核3点・剥片32点からなる。これらのうちには折れ面で接合するものがあり、実質的には石核2点・剥片25点となる(図72～図75)。接合状態での大きさは約16.2×8.3×9.4cmの細長い楕円形で(図72)、石材は黒色頁岩である。

接合の状態から見るかぎり本資料については、まず初めに自然面を打面とし原石側面において数枚の剥片が剥離されている。この際打面には、原石にもともとある平坦面が選択されている。ただし、この段階に属する剥片は接合資料中には存在しない。

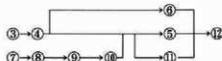
以後の剥片剥離工程は、i：分割 ii：固体Ⅰにおける剥片剥離 iii：固体Ⅱにおける剥片剥離の三段階に大きく分けられる。

i：分割(図72)

①→②+固体Ⅰ+固体Ⅱ

原石の端部において少なくとも3枚の剥片を剥離(①)。これによって生じた剥離面を打面として打撃を加え、大型の剥片(固体Ⅰ)と石核(固体Ⅱ)に二分。この時、同時割れによって剥片②が生じる。

ii：固体Ⅰにおける剥片剥離(図72・73)



素材となった剥片の両面において剥片剥離がなされる。背面側では分割によって生じた節理面とそれにつながる自然面を打面とし、打点を左右に順次移動させながら剥片が剥離されている(③、④、⑤、⑥)。剥離の方向は打面から下方へほぼ一定している。腹面側では、背面側の打面とほぼ180度反対側の自然面を打面とし、弧状にカーブする自然面に沿って打点を移動させながら剥片剥離が行われている(⑦、⑧、⑨、⑩、⑪)。剥離の方向は、石核打面の反対側中央部の一点にほぼ集約される。どちらの面においても6・7枚の剥片が剥出されている。両側面における剥離の前後関係は明確ではないが、剥片④は剥片⑪に先行し、剥片⑩は剥片⑤に先行することから、打面及び作業面の転移が何回かなされたようである。最後に、石核⑫の腹面中央に大きく剥離痕跡を残す剥片を両極打撃によって剥出した際に、中央部で折れて放棄された。

iii: 固体IIにおける剥片剥離 (図74・75)



分割に先立つ剥片剥離が行われた面と、分割の際の作業面との二ヶ所で剥片剥離が行われている。前者においては、まず作業面側からの打撃によって剥片⑬を剥離、それによって生じた剥離面を打面として剥片⑭・⑮を剥離、次いで打点を下方にずらし自然面を打面として剥片⑯を剥出している。剥片⑯は剥片⑰よりも後出のものであるが、剥片⑯との前後関係は不明である。後者においては、分割の際の打面と作業面を使用し、打点を左右に移動させながら剥片剥離を行っている(⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖)。この際剥片㉒と㉓、㉕と㉖は単一の打撃による同時割れによって生じたものである。剥離方向は打面から下方へと一定している。両者の前後関係については、剥離面の観察から剥片⑱の剥離が剥片⑰・㉕に先行することから、前者が後者に先立つものと思われる。最後に剥片㉖の剥離によって作業面にステップが生じ、また作業面中央よりやや右側の節理が障害となって、これ以上の剥離が行われなかったものと推測される。

3. 考察

以上の検討から、本資料における剥片剥離工程の特徴を示す。まず剥片剥離を行うための打面には、素材となった礫や剥片にもともとある平坦面が使用されている。一部に打面作出のためと思われる剥片が存在するが(剥片①・⑩)、かなり限られたものであり、作業工程として普遍的に行われたものとは積極的に位置付けられない。未調整の自然面や剥離面をそのまま打面として用いることが本来のあり方と思われる。次いで、打面の形状に応じて打点を左右に移動させながら剥片を剥離していく。この時剥離の方向は、打面の形状にもよるが、ほぼ同一の方向に一定している。頭部調整や側面調整などの剥片剥離に先立つ石核調整は行われぬ。石核はそれぞれ複数の打面と作業面を持つが、打面及び作業面が同時に転移され相互に一对一の対応をしている。

このような工程によって生み出された剥片の特徴としては、打面に自然面や節理面を持つものが多く、背面と腹面における剥離面の剥離方向が一致することが上げられる。本資料は剥片剥離の最も初期の工程を欠いているため、背面に自然面を持つものはほとんどない。平面形は一定しておらず、縦横の比がほぼ一対一のものからかなり横長のものまで、不定形の剥片が剥離されている。大きさは、長さ2cmほどのものから5~7cmのものまでであるが、接合資料の観察から作業面にある一定の長さを維持しようとした意図が見受けられ、特に固体Iにおいては石核がかなり薄くなり剥片の剥離が困難であるにもかかわらず、両極打撃によって作業面長の最大値を取り込むような形で剥離が行われている。したがって、本資料において目的とされる剥片は、大きさが5~6cmの不定形のものとして推測される。このような剥片の特徴と本遺跡における利器の素材となった剥片の特徴と比較すると、打面の形状や大きさの点から石砧との関連が窺えるが、その具体的な検討は機会を改めた。

また、本資料の性格であるが、住居埋土から比較的まとまって出土したものであり、資料中に利器や使用によると思われる摩滅や微細剥離痕を持つものがないことから、利器の素材生産の過程で剥離された素材として利用されなかった剥片や残核が一括して廃棄、もしくは遺棄されたものと考えられる。

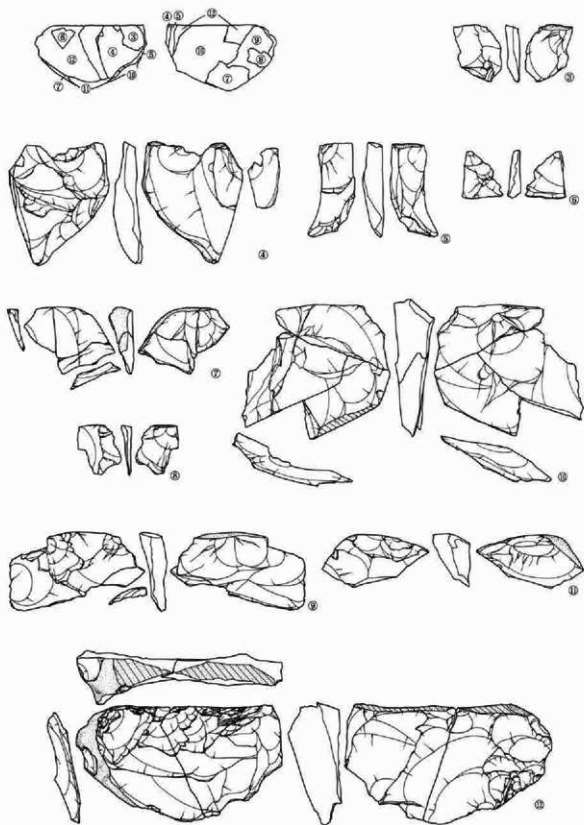


图73 接合資料(2) 1/2

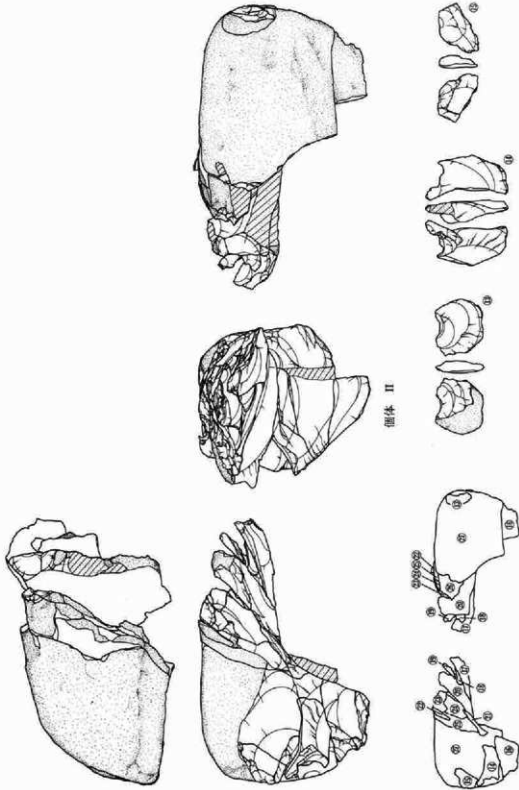


図74 接合資料(3) 1/2

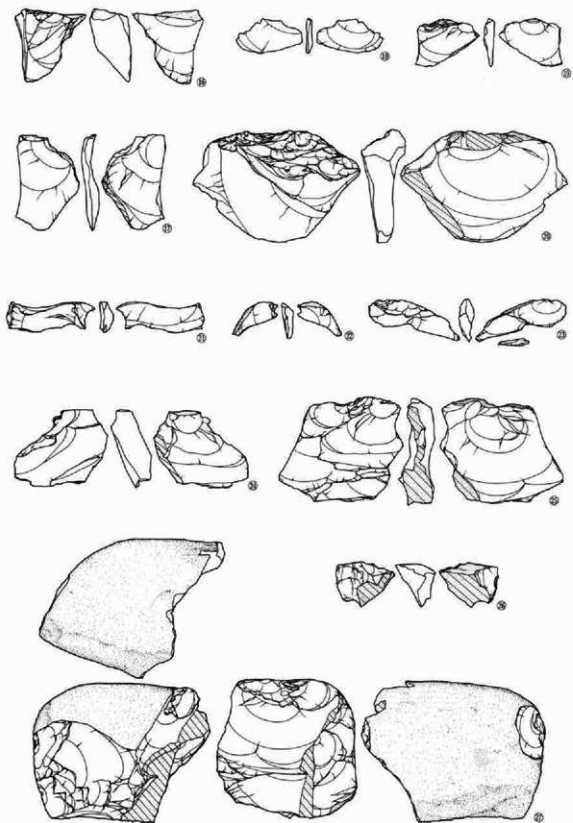


图75 接合資料(4) 1/2

2. 黒曜石の分析

立教大学一般教育部	鈴木正男
立教大学原子力研究所	戸村健児
野田市郷土博物館	金山喜昭
群馬県埋蔵文化財調査事業団	飯島義雄

〔はじめに〕

下箱田向山遺跡から出土した13点の黒曜石(表6・図76)について、黒曜石分析を行なった。その結果をここに報告する。

黒曜石は、 SiO_2 に富む溶岩が急冷して生じる天然ガラスであり、その産出地は限られている。黒曜石は先史時代に石器製作のための石材として運搬され交易された。

黒曜石分析は、黒曜石の産地推定と水和層年代測定からなる。すなわち考古学的黒曜石の多様な属性のうち二つ、運搬あるいは交易による移動の方向と距離(空間系)とそれが行われた年代(時間系)を同時に明らかにする。

遺跡出土黒曜石の原産地は、熱中性子放射化分析法、蛍光X線分析法、フィッシュントラック年代測定法などによって、原産地と遺跡出土の黒曜石の化学成分や噴出年代を測定し比較することによって推定される。ここでは原産地を熱中性子放射化分析と判別分析(Suzuki & Tomura, 1983; Suzuki et al., 1984a, b)によって推定し、その年代を黒曜石水和層年代測定法によって測定した。

〔熱中性子放射化分析〕

種々の核種に熱中性子を照射するとそれぞれの核種は放射化され、それぞれの核種に固有のエネルギーの γ 線を放出する。放射化された核種はそれぞれに固有の半減期で壊変する。したがって、冷却期間を調節することによって、産地の判別分析に有効な核種の γ 線を選択的に測定することができる。

試料の各元素の含有量は、①試料に、多種類の元素の含有量が知られている標準試料と同時に熱中性子を照射し、② γ 線を計数し、③試料と標準試料の γ 線のカウンtr数比、重量比、測定開始時間の差に起因する変動を補正することによって計算される。実際の操作は、以下のとおりである。まず、ダイヤモンドカッターを用いて、黒曜石試料の小片を切り出し、その重量を化学天秤で測り、ポリ袋に封入する。これを標準試料とともに照射キャプセルに入れ、立教大学原子力研究所TRIGALII型原子炉の回転試料棚(RSR)の位置に挿入して、出力100kWで12時間熱中性子を照射する。対照する標準試料はNB S 278(Obsidian Rock)である。

約10日間冷却した後、 γ 線スペクトルを1000~3000秒計数して、標準試料との比較から、サマリウム(Sm)、ウラン(U)、トリウム(Th)、ハフニウム(Hf)、スカンジウム(Sc)、鉄(Fe)、ランタン(La)の7元素の含有量を測定した。

下箱田向山遺跡から出土した13点の黒曜石試料の分析結果を次表に示した。これらの遺跡の黒曜石は、すべて星ヶ塔、和田峠、男女倉など長野県の産地に由来する。

遺跡名	№	Sm	U	Th	HI	Sc	Fe	La	DA	TOHL
SHIMOHAKODA	1	6.91	4.21	11.1	3.58	2.98	0.578	18.8	HOSHIGATO	5.1
SHIMOHAKODA	2	6.33	3.73	11.9	4.06	2.91	0.532	19.0	HOSHIGATO	5.5
SHIMOHAKODA	3	6.31	3.63	12.0	2.96	3.09	0.393	19.6	HOSHIGATO	6.3
SHIMOHAKODA	4	7.96	6.10	23.0	3.82	3.80	0.597	28.0	OMEGURA	5.5
SHIMOHAKODA	5	6.18	6.02	23.2	3.62	3.90	0.671	28.1	OMEGURA	5.4
SHIMOHAKODA	6	7.73	8.14	29.8	4.36	5.51	0.612	25.1	WADATOGI	5.0
SHIMOHAKODA	7	7.62	7.46	30.1	3.97	5.60	0.541	24.3	WADATOGI	8.1
SHIMOHAKODA	8	6.71	6.85	26.1	3.63	4.35	0.604	29.7	WADATOGI	6.5
SHIMOHAKODA	9	7.10	7.21	28.3	3.77	4.75	0.600	30.0	WADATOGI	7.5
SHIMOHAKODA	10	5.82	4.15	11.5	3.04	3.32	0.404	17.3	HOSHIGATO	6.3
SHIMOHAKODA	11	6.64	7.08	27.4	4.43	4.69	0.588	30.8	WADATOGI	7.1
SHIMOHAKODA	12	5.85	6.11	23.8	3.48	4.05	0.534	26.4	WADATOGI	6.1
SHIMOHAKODA	13	5.72	3.22	10.9	3.08	3.65	0.356	15.4	HOSHIGATO	4.7

【黒曜石水層年代】

黒曜石の水層の厚さ (THL: μm) と、経過した年代 (A: a) との間には、次の関係がある。

$$A = 1000 \cdot (\text{THL}^2 / K)$$

ここに、Kは効果水と温度 (EHT) が一様と見なされる地域で設定され、かつ適用される水と速度 ($\mu\text{m}^2 / (1000\text{a})$) である。

この値については、すでに野川遺跡などを基準にして、次のように設定されている (Suzuki, 1973)。

産地・露頭	水と速度
WADATOGI	7.89
HOSHIGATO YATSUGATAKE OMEGURA	5.13
KOZUSHIMA	2.69
TAKAHARAYAMA	1.11*
KAMITAGA	0.98
HATAJUKU	0.28

水和速度は気温によって左右される。ここでは前橋の補正值0.88を用いた。

実際の試料の調整は、黒曜石の剝離面に直交して切り出した小片平均約10個を、エポフォームの試料枠に入れ、エポキシ系樹脂エポフィックスと硬化剤を容積比8：1に混合した。硬化完了後、通常の手順にしたがって、厚さ約30 μ m程度の薄片に仕上げた。

これを、光学顕微鏡約1,000倍で透過光観察し、その水和層の厚さをビデオプリンターのプリント上で計測した。

【黒曜石水和層年代測定結果】

黒曜石水和層年代の測定結果は、下表に示した。

下箱田向山 (縄文時代前期)				
試料	数	水和層厚	年代	
WADATOGÉ(6)	1	5.0	3,600	
WADATOGÉ(8・12)	2	6.30 \pm 0.28	5,700 \pm 500	
HOSHIGATO(1・2・13) OMEGURA(4・5)	3 2	5.24 \pm 0.34	6,100 \pm 800	
WADATOGÉ(9・11)	2	7.30 \pm 0.28	7,700 \pm 600	
HOSHIGATO(3・10)	2	6.3	8,800	
WADATOGÉ(7)	1	8.1	9,400	

【結果の解釈】

限られた試料の範囲で検討すると、8号住居跡出土5点中4点が和田峠産、3号住居跡2点とも星ヶ塔産であり、出土遺構と黒曜石産地に関係がみられる。

しかし水和層年代は必ずしも一致していない。このような問題の解析は試料数の増加によって可能となるであろう。

遺跡の時代観を与えるデータには土器や石器の型式・形式、発掘時の層位がある。これらに黒曜石水和層年代が加えられる。

下箱田向山遺跡の考古年代は縄文時代前期であり黒曜石水和層年代は5,700～6,100年である。

これらの結果を見ると、1点の和田峠産黒曜石の例を除いて、一般に考古年代より古い時代の黒曜石の混入が認められる。

参考文献

- Suzuki, M., 1973 : Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan-Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol. IV, 241-318.
- Suzuki M. and Tomura, K., 1983 : Basic data for identifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99-110.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Aoki, Y., and Tomura, K., 1984a : Intrasite obsidian analysis of the Hasimoto site, Sagami-hara-shi, Kanagawa-ken. Japan. St. Paul's Review of Science, 4, 121-129.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K., 1984b : Obsidian analysis : 1974-1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131-140.

表6 黒曜石分析試料一覧

No	出土位置	器種	時期	法量(cm)			備考
				横	縦	厚さ	
1	3号住埋土	割片	有尾式系	1.94	2.65	1.05	ほぼ透明。自然面を残す。
2	3号住埋土	使用痕のある割片	有尾式系	1.39	1.95	0.46	ほぼ透明で、わずかに縞状の黒色部あり。
3	5号住埋土	使用痕のある割片	関山II式	1.62	1.92	0.28	透明感はあるが、縞状の黒色部多し。
4	5号住埋土上位	楔形石器	関山II式	1.35	2.57	1.02	透明度はやや高く、縞状の黒色部あり。径1cm前後の球状の夾雑物を含む。
5	8号住埋土	石核	関山II式	1.84	0.89	1.90	径3mm前後の灰白色で球状の夾雑物を含む。両極打法によるか。
6	8号住埋土	使用痕のある割片	関山II式	0.89	1.99	0.39	透明度は高く、縞状の黒色部がわずかにあり。
7	8号住埋土	折れた割片	関山II式	1.67	1.86	0.37	透明度は高く、縞状の黒色部はほとんどない。
8	8号住埋土	折れた割片	関山II式	1.85	2.08	0.98	透明度は低く、黒色。自然面を残す。両極打法によるか。
9	8号住埋土	石核	関山II式	3.18	4.38	1.60	縞状の暗褐色部あり。自然面を多く残す。両極打法によるか。
10	35号土坑埋土	割片	諸磯c式	1.53	3.92	0.84	透明感があり、縞状の黒色部あり。
11	41号土坑埋土	折れた割片	有尾式系	3.15	1.99	0.50	透明度はやや高く、わずかに縞状の黒色部あり。
12	41号土坑埋土中位	石核	有尾式系	5.08	2.60	3.43	透明度は低く、黒色。灰白色で径4~5mmの球状の夾雑物を含む。自然面を多く残す。
13	55号土坑埋土	楔形石器	関山I式	1.24	2.30	0.87	透明度は高い。縞状の黒色部は少ない。

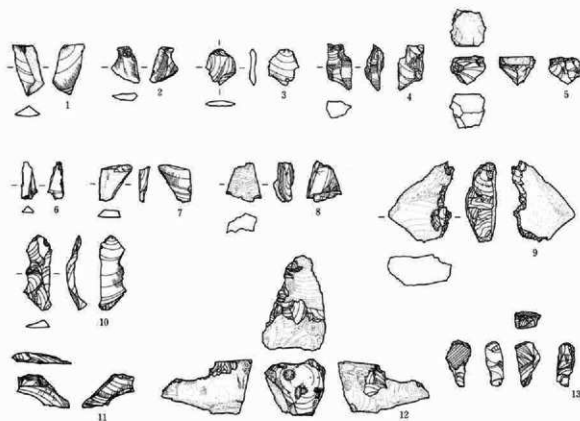
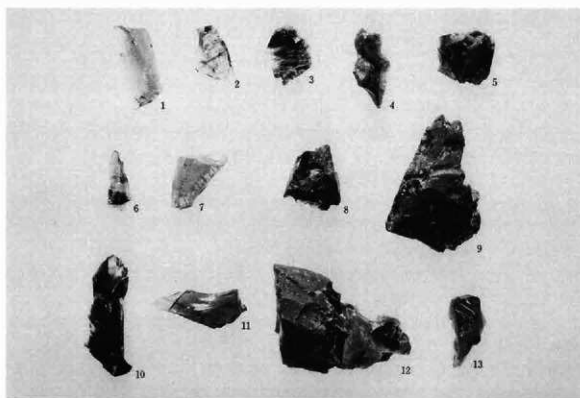


图76 黒曜石分析対象試料 2/3

3. 箱田城

群馬県文化財保護審議会委員 山崎 一

箱田城は、勢多郡北橋村下箱田の字城山に城の主体部を置き、東北200m程の中屋敷附近(下曲輪と呼ぶ)が根小屋となっていた。本城と根小屋の間の小流が水の手であろう。

現国道17号沿いの地帯は、中世の頃は利根川の河道であって、田口から橋山の東側を北上する道は、下箱田、下真壁を経て八崎城(分郷八崎)に通じていた。城山、中屋敷間の道もその一部であろう。

その通路に近く、箱田、真壁、塚原の三城が構えられていた。

本城の最高所は、国道面よりは50m高いが東側の中屋敷からの高さは20mにすぎない。

本城の大部を占める本丸は、西北-東南の長径100m、幅40mの楕円形で、高さ2m程の土居をめぐらしていたが、近年、老人保養施設ができて、北部が破壊されてしまった。

本丸面から4~5m低い所をめぐって堀が掘られているが、堀底は平らで(箱形という)、外縁は、高さ1mばかりの土居状をなす。この堀自体、二の丸の役目なのである。

外縁の土居上には柵が結われ、四面に戸口が設けられていたらしく、その痕跡と、そこから下の小径が認められた。

本丸には、東北面の南寄りに坂戸口が開き、反対側の、西南面北寄りには武者屯の窟所がある。今は明らかでないが、武者屯の南端にも坂戸口があったのではあるまいか。

北隅には櫓台があり、台の西北下に坂戸口があったらしく、小さい堅堀様の部分があった。

本丸東北面南寄り戸口から北に向かって下り、堀状の二の丸を越えた所に追手戸口が設けられていた。本丸の戸口と追手戸口との間の部分は、馬出しとして役立つ。

追手戸口と、二の丸のこの附近も喰違ひ構造になっている。

今次(1989年1月)の発掘調査で、本城の西北200mの下方に堀跡が検出された。基盤での上幅4~5m、深さ2m程度の急な薬研堀で、長さ20mあまりの部分である。

そこは字を向山というが、城山の斜面が利根川河道に落ちる崖端に迫っていて、直下に用水路と国道17号線を通じているが、中世の頃は、川水が直接当たっていた所とも推定される。坂東橋東たもとからここまで250mほどである。

河崖はこの附近から北東に転じ、本城の北西200mの線に、長さ200mの弧を置き、数mの崖下に木曾川の支流が流れて、自然の要害となっている。今回検出された遺構は、その崖端に沿って掘られていると推定される。それは、本城の東北面、東南面にまで掘られているかも知れないが不明である。

この城は、木曾義仲の郎党今井兼平の裔と伝えられる今井氏や高梨子、小野沢氏らの寄居として築かれたものと推定できるが、白井城周辺に散在する猫、宮田、三原田、八崎、真壁、伊熊、金井、赤川、横室、箱島等の寄居や前橋周辺の関根、青柳、清王子、三俣、天川の寄居のように平坦地か崖端に構えられているものとは異り、丘の頂点を占めている点、真壁城(真壁の寄居とは別)と共に異例である。おそらく築造の時期と事情が異なるのであろう。

寛文12年(1672)、三原田の永井実平が、当時米沢に住んでいた長尾景光(白井長尾の正系)のために認めた長文の書状に「古へ御領分境々之儀御尋に候——中畧——辰橋境は神谷三河被指置候。」とあり、正徳3年(1713)、前橋藩士河岡武太夫が、祖父有川彦太夫の遺稿に基いて記し、天徳寺に送った書状には、「利根川より東廻りには八崎村に墮上之所に居申候者吉田基之丞跡絶、箱田へ境地墮上有神谷内のもの金井新

3. 箱田城

右衛門と申すもの罷在候。」と書かれていて、木曾川が白井領の南限となっている。箱田城は厩橋領の北限に築かれた城という事になる。

今次発見の箱田城遺構え堀が、白井領との境めの木曾川に備える位置にあることも、以上の点から肯定できるように思われる。

但し、永禄3年(1560)、長尾景虎(後の上杉謙信)が初めて関東に出陣した際、景虎に従った関東諸将とその陣幕紋を列記した「関東幕注文」という文書(山形の上杉家所蔵)には、神谷氏は、白井衆中でなく、惣社衆中に記されている。神谷図書が白井長尾に属したのは、長尾憲景が北条氏に従った後のことであろうか。

箱田城は、その行き届いた構造から、天正年間のものではないかとも考えられ、この城と、箱田地衆とに関する史料が全く見当たらないのも、それによるのかも知れない。

(1989年2月)

(註) 木曾川は木曾三社神社附近を流れる川で、この社は郡裏仲の郎党今井兼平の裔等の祀る神社。

追記

山崎先生には平成2年1月3日に御逝去されました。憤んで哀悼の意を表します。

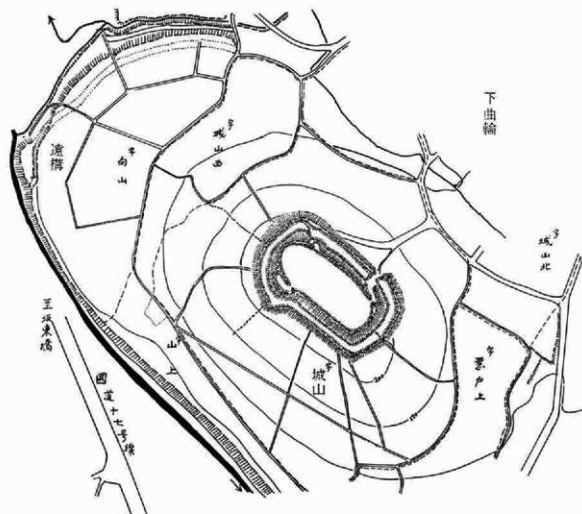


図77 箱田城

4. 29号土坑（墓墳）出土の人骨

群馬県立大岡々高校教諭 宮崎重雄

I. はじめに

群馬県勢多郡北橋村下箱田山遺跡から出土した2体の中世人骨を調査する機会を得たので、その成果を報告する。

II. 本文

1. 1号人骨（図78、図版43、表7）

この個体は体幹部を斜め左下に、顔を下に向けて、膝を 15° ～ 35° 、肘を 18° ～ 30° に屈曲させて土壇墓の中に横たわっていた。上肢骨においては、左右の上腕骨が互いにほぼ平行に保たれ、前腕部が遠位端に近いところで交叉している。下肢における大腿骨も平行に並走し、左右の脛骨が遠位端で合している。この埋存姿勢から、この個体は手首と足首付近で縛られていたことが可能性の一つとして考えられる。脊柱、肋骨は残存していない。

本個体の大腿骨の骨頭は完全に癒合している。Brothwell¹⁾によれば大腿骨骨頭の癒合は15～20才でおこる。

口蓋縫合のようすは、切歯縫合がほぼ消失しているものの、正中口蓋縫合、横口蓋縫合はすべてが明らかに認められる。上条²⁾によれば、若年（20年代）では口蓋縫合の消失はほとんどないが、中年（30～40年代）になると切歯縫合のほとんどが消失し、正中口蓋縫合、横口蓋縫合は部分的に消失する。Brothwell¹⁾の臼歯の咬耗度による年齢推定法を用いると、本個体の下顎第一大臼歯は17～21才程度の年齢を示す。以上の諸事実を総合すると本個体の年齢は17～27才前後が推定される。

長骨は保存が悪く、身長推定に役立つ計測値の得られたものはない。試みに最も保存良好な大腿骨の欠損部分を補正し、その値を藤井³⁾の式にあてはめると、151.7cmと算出される。

Nakahasi & Nagai⁴⁾の性別判定法で用いられる計測値のうち本個体で得られたのは、乳様突起幅と乳様突起長、上腕骨最小周、大腿骨中央周、脛骨最小周であるが、これらの値はすべて女性のそれを下まわっている。歯の大きさを現代日本人の男女の計測値⁵⁾と比べると、上顎では歯冠類舌径、近遠心径とも現代日本人の男女のいずれよりも大きい、下顎では歯によって現代日本人の男女のいずれより大きかったり小さかったり、またその中間であったりする。これらの諸事実を総合すると本個体は歯が大きい傾向にあるものの、女性である可能性が高い。

この個体の歯は顎骨に植立していたものが多いと思われるが、そのほとんどが発掘時以降に歯槽から脱落している。ただし、下顎においては左第一切歯、右第三大臼歯、上顎においては左第二大臼歯、左第三大臼歯の部分に破損があり、もとの歯槽の全容を知ることができない。上下顎とも第三大臼歯は検出されず、残存する歯槽骨のようすからすると、脱落したというより未萌出であった可能性がうかがえる。左下顎の第二切歯、第一大臼歯、第二大臼歯、右上顎の第二大臼歯の歯槽は痕跡をとどめるが、歯は生前に病的な脱落を

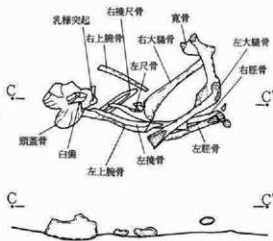


図78 1号人骨 1/15

していたものと思われる。また、下顎の左右の第一切歯、上顎の左右の第一切歯、第二切歯は歯槽の痕跡も残っており、生前はるか以前に脱落したようである。右下顎の第一、第二大臼歯の歯槽はきわめて浅く、歯は脱落寸前の状態であったことを示している。

歯の咬耗はMartinの分類上の1~2度に相当している。

どの歯でも歯槽骨の吸収が起こっていて、 $P_3 \sim P_4$ の程度⁶まで至るひどい歯周炎(歯槽膿漏)を患っている。また、残存している歯のすべてが齶歯にも冒されていて、その程度の内訳は1度が1本、2度が6本、3度が7本であり、かなり重症というべきで、咀嚼機能が十分果たせずに、栄養失調になって死に至った可能性が考えられる。上記の歯の脱落した原因には歯周炎または齶歯が関係していたようである。

原始古代人では咬合面齶歯はかなり少ない⁷と言われるが、本個体においては中世人でありながらも、すべて歯頸部のみが冒されている。佐倉⁸によれば、日本では中世人(室町時代)に至って急激に齶歯の増加をみるが、それでも中世人(室町時代)の一人当たりの齶歯の本数は4.3本である。残存している歯のすべてが齶歯に冒されているという本個体の異常さがうかがえる。中世の齶歯増加の原因については、米に白米、半白米、黒米の区別が生じ、ポルトガル人の渡来によって、カステラ、ビスケット、コンペイトウ、カルメラ、ポーロなどの外来の多くの食物に接するようになり、一般庶民の食生活が多様化してきたことと密接に関係する⁷とされている。本個体も糖分の多い食物を好む当時の美食家であったのであろうか。

2. 2号人骨(図79、図版44・45、表8)

この個体は体幹部を左斜め上に向け、顔を左に向けて横たわっている。下肢では大腿骨がほぼ平行に並走し、膝を35°~45°屈曲して、脛骨が遠位端で交叉している。上肢でも上腕骨が平行に並走し、肘を30°~35°曲げて、右腕の下で左右の手指が合している。1号人骨同様に手首と足首付近が縛られた状態で埋葬された可能性が考えられる。脊柱、肋骨、下肢帯は腐蝕して残存していない。

本個体の頭蓋骨最大長は184.0mm、同最大幅は134.0(±5)mmで、長幅指数を求めると72.8となり、中世人の特徴である長頭を示している。

大腿骨遠位端、脛骨遠位端などの骨端部はいずれも

癒合が完了している。Brothwell⁹によれば前記部分の癒合が完了するのは16~23才とされる。また、頭蓋骨内面の癒合線は、冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合ともブロックの1程度の癒合度を示す。これらの癒合線はBiggerstaff¹⁰によれば、癒合が開始されるのが22~26才、終了するのが35~42才とされている。口蓋縫合のようすは、切歯縫合がほぼ消失しているが、正中口蓋縫合、横口蓋縫合は癒合していない。口蓋縫合の癒合時期については前述したとおりである。本個体は第三大臼歯が既に萌出し、歯根も根尖部まで完全に完成している。第三大臼歯の萌出年齢は一般的には18~25才である⁶。Brothwell⁹の臼歯の咬耗度による年齢推定法を用いると、本個体においては25~35才の年齢が得られる。これらの諸事実を考え合わせると、本個体の年齢は結局25~35才と推定される。

長骨の保存状態は悪く、身長推定に役立つ計測値の得られたものはない。最も保存の良い大腿骨の欠損部分を補正し、その値を藤井¹¹の式に当てはめると156.0cmと算出される。この大腿骨全長の補正值を現代関東人

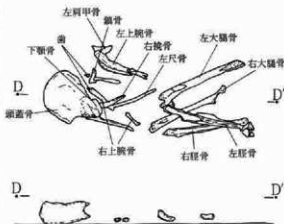


図79 2号人骨 1/15

の男女⁸と比較すると、男女の平均値に近い値を示す。

Nakahasi & Nagai⁴提案の性別判定法に役立つ計測値のうち本資料で得られたのは、後頭骨の厚さ、乳様突起長、乳様突起幅、大腿骨中央周、脛骨最小周である。前三者の計測値では現代関東人の女性に近いが、後二者の計測値では男性に近い。井原¹⁹の下顎骨の性差を示す計測値表を参考にすると、得られた3つの計測値のうち、下顎長、下顎幅で男性のそれを上回るが、オトガイ高、オトガイ孔部における下顎体高、下顎角幅では女性のそれを下回っている。後述のように本個体では歯周炎（歯槽膿漏）に罹患していて、歯槽吸収が顕著であるため、下顎体の高さに関係する計測値が本来のものより小さくなっていることが予想される。また、下顎角幅が小さいのは長頭で、頭骨が前後に長く左右幅が狭いことに関係しているかもしれない。Hanihara¹¹の提案した性別判別式に下顎骨の計測値をあてはめると本個体はsectioning pointを下回り、女性であることを指示している。歯の大きさを現代日本人の男女⁸と比べると、切歯では上顎の中切歯、側切歯とも歯冠唇舌径、近遠心径が現代日本人の男女のいずれよりも大きい、下顎では両切歯とも唇舌径が男女のいずれよりも小さい。ただし、歯冠近遠心径は男性より小さいが、女性と等しい大きさである。その他の歯についてみると、下顎では現代日本人の男性より各歯とも唇舌径、近遠心径のいずれも小さいが、女性と比べると大きかったり小さかったり様々な値を示す。上顎では唇舌径、近遠心径とも現代日本人の女性のそれを上回るが、男性と比べると大小様々である。本個体は以上のように現代人と比較した場合、男女両方の形質を持っていて、いずれとも決めがたいが、1号人骨とは特に体肢骨の大きさ、つくり等において違いが認められ、男性である可能性もある。本個体は歯を含めた頭骨の大きさに比べて体肢骨の発達が良かったようである。

この個体の歯は顎骨に植立して埋存していたものが多いと思われるが、そのほとんどが発掘時以降に歯槽から脱落している。上顎においては左右のいずれの大白歯も欠損し、この部位のものと状態を知ることはできない。右下顎第一大臼歯の歯槽は浅く、歯槽内に骨増強がはじまっていることが観察され、生前に脱落していたものと思われる。

歯の咬耗は右上顎第三大臼歯がMartinの咬耗度の1度であるのを除けば、すべての歯が2度である。

残存している歯は疑わしいもの数点を含めると、すべて齶歯に冒されている。その程度は2度がほとんどであり、3度に達しているのは右上顎第三大臼歯だけで、1号人骨より齶歯の程度は軽い。下顎の第一切歯の舌側にはBrothwell¹の顯著（considerable）な歯石が、同第二切歯には中程度（medium）の歯石が沈着している。歯石の沈着は歯周炎（歯槽膿漏）の発病をうながすことがある¹といわれているように、本個体でも上、下顎骨とも顎骨の吸収が進み2～4度の歯周炎に冒されている。そのなかでは3度のものが最も多い。

上顎切歯の舌側面は凹み、シヨベル型切歯になっており、Hrdlickaの2～3型を示す。第三大臼歯の歯根は上顎では1根であるが、下顎では左右とも2根を認めることができる。下顎の第二大臼歯の歯根は癒合が進み根尖部近くだけが2根に分かれている。下顎大臼歯の咬合面型は右第三大臼歯がX₄であるほかはY₄である。

なお、本個体の距骨には踵距面は認められない。

III. まとめ

- 1) 群馬県勢多郡北橋村下箱田向山遺跡の土壌墓から出土した2体の人骨を記載した。
- 2) 2体の人骨はいずれも横臥姿勢で埋葬され、体肢骨の配列の様子から手首、足首付近を縛られていたことも可能性の一つとして考えられる。
- 3) 1号人骨は女性と判断され、2号人骨は男性の可能性もある。年齢は1号人骨が17～27才前後、2号人

骨が25~35才前後と推定され、推定身長は1号が152cm、2号人骨が156cmである。

- 4) 2体とも齶歯、歯周炎を患っているが、1号のほうが重症で、全歯が歯頸部を2~3度の齶歯に冒され、歯周炎の程度はP₃~P₄度に達している。

引用文献

- Brothwell, D. R. (1972) *Digging up Bones*. British Museum.
- 上条海彦 (1949) 「九州日本人口蓋縫合の解剖学的研究 (その一)」 臨床歯科学報 第4巻1号 26-29
- 藤井 明 (1960) 「西枝長骨の長さと言長との関係に就いて」 順天堂大学体育学部紀要 第3号 49-61
- Nakashashi, T & M. Nagai. (1965) Sex Assessment of Fragmentary Skeletal Remains. *Journal Anthropological Society Nippon*, 94: 289-306
- 上条海彦 (1962) 「日本人永久歯の解剖学」 東京歯科大学・解剖学教室
- 鈴木和男 (1988) 「法歯学一訂版」 永永書店
- 佐倉 剛 (1964) 「日本人における齶歯頻度の時代的推移」 人類学雑誌 第7巻 153-177
- Biggerstaff, R. H. (1977) Craniofacial characteristics as determinants of age, sex, and race in forensic dentistry. *Dental Clinics North America*, 21 (1): 85-97
- 平井 隆、田橋丈夫 (1982) 「現代日本人人骨の人類学的研究」 人類学雑誌 第43巻第一付録
- 井原正安 (1950) 「日本人下顎骨の人類学的研究」 歯学 第39巻1、2号 11-72
- Hanihara, K. (1959) Sex diagnosis of Japanese skulls and scapulae by means of discriminant functions. *Journal Anthropological Society Nippon*, 67: 21-27

表7 1号人骨の歯牙に関する記録

1. 上顎歯

		右										左					
		M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
存否		?	●	◎	◎	◎	◎	●	●		●	◎	◎	◎	◎	●	?
全長				19.1	20.2	20.2	23.7					21.9	20.6	20.6	16.4		
歯根長				12.6	13.8	13.9	15.6					13.1	14.4	14.6	9.3		
歯冠長				6.0	6.5	6.6	8.0					9.9	6.4	6.4	7.1		
歯冠厚 (顎舌径)				11.9	9.4	9.1	8.6					8.6	9.2	9.5	11.8		
歯冠幅 (近遠心径)				10.9	7.1	7.5	8.0					6.2*	7.5	7.1	10.9		
咬合面	Martin			2	2	2	1					2	2	2			
摩耗度	Brothwell			3												2*	
齶 歯	部位			舌側齶	◎ 舌側齶	舌側齶	舌側齶					舌側齶	舌側齶	舌側齶	舌側齶		
	程度			3	2	2	3					3	3	1	3		
歯周炎の程度				3	3	3	3					3	3	3	3		

2. 下顎歯

		右										左					
		M ₂	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₂
存否		?	○	◎	○	◎	◎	◎	●	●	●	◎	◎	◎	○	○	?
全長				15.8		19.2		21.0									
歯根長				12.8		14.6		14.0									
歯冠長				5.2		6.4	8.3	6.2				8.2		6.0			
歯冠厚 (顎舌径)				9.8*		7.9	7.3	6.6				7.3		7.7			
歯冠幅 (近遠心径)				10.3*		6.5	7.2	6.0				7.1		6.8			
咬合面	Martin			1		2	2	2				2		2			
摩耗度	Brothwell			2													
齶 歯	部位			舌側齶		舌側齶	舌側齶	舌側齶				舌側齶		舌側齶			
	程度			3		2	2?	2				2		3			
歯周炎の程度				3		4	4	4				4		4			

◎：歯が残存している場合、○：歯槽のみが残存する場合、●：歯も歯槽も残存していない場合

表8 2号人骨の歯牙に関する記録

1. 上顎歯

	右									左								
	M ³	M ²	M ¹	P ³	P ²	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ²	P ³	M ²	M ¹	M ³		
存否	◎	?	?	◎	○	◎	◎		◎	◎	◎	○	◎	?	?	?		
全長						22.0	21.0		24.8	20.6	22.5		20.2					
歯根長						16.4	14.0		14.6	13.6	16.5		14.9					
歯冠長	3.8					6.9	8.1		10.8	7.5	7.1		5.3					
歯冠厚(頬舌径)	10.5					8.5	6.6		7.5	6.1	8.5		9.0					
歯冠幅(近遠心径)	8.4			6.8		7.7	7.4		8.7	7.2	7.7		6.9					
咬合面	Martin		1		2	2	2		2	2	2		2					
摩耗度	Brothwell		2															
齧歯	部位	近心齧				遠心齧	遠心齧		近・遠心齧	遠心齧	近・遠心齧		近心齧					
	程度	3				2	1		1	2	2		2					
歯周炎の程度						3	3		3	3	2		3					
シヨベル型									2-3									

2. 下顎歯

	右									左								
	M ₃	M ₂	M ₁	P ₃	P ₂	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₂	P ₃	M ₁	M ₂	M ₃		
存否	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎		○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
全長	17.0	16.7				18.0	17.6*	20.5	18.0		22.3	19.2	19.5	17.3	16.0			
歯根長	12.4	11.4				12.6	10.9*	15.2			15.8	13.0	14.0	12.4	13.2			
歯冠長	4.6	4.5		4.8	5.2	7.0	5.7			7.3	7.0	6.3	4.9	4.7	3.5	3.0		
歯冠厚(頬舌径)	8.8	10.1		8.1	7.6	7.5	6.0	?		6.0	7.6	7.5	8.1	10.2	9.8	8.9		
歯冠幅(近遠心径)	8.9*	10.3		6.8	6.6	6.8	5.8	5.1		5.7	6.7	6.5	6.8	10.7	10.1	9.1		
咬合面	Martin		2	2		2	2	2	2		2	2	2	2?	1?	2?		
摩耗度	Brothwell		3*	4										4	3*	4		
齧歯	部位	側切歯	側切歯	近心齧	遠心齧	遠心齧	遠心齧		遠心齧	近・遠心齧	近・遠心齧	側切歯	側切歯	側切歯	側切歯	近・遠心齧		
	程度	2	2	2	2	2	2		2		2	2	2	2?	1?	2?		
歯周炎の程度	4	4		3	3	3	4	4		4	3	3	3	2	2	2		
咬合面型	X ₄	Y ₄												Y ₄	Y ₄	Y ₄		

◎：歯が残存している場合、○：歯槽のみが残存する場合、●：歯も歯槽も残存していない場合

第7章 まとめ

上述のように、本遺跡からは縄文時代前期を中心とした住居跡・土坑、そして中世の溝と墓墳を中心とした遺構が検出され、豊富な遺物が出土した。これらの遺構・遺物からは新しい知見が得られた。そのうちのいくつかの点についてまとめておきたい。

1. 縄文時代の遺構と遺物

前期の土器 (図80) 該期の土器がまとまって出土したのは、5・8号住居跡と44号土坑(図80)である。いずれも廃棄の資料であり、厳密な意味での共存関係を把握することはできない。しかし、5号住居跡では埋土の中位から上位にかけて、8号住居跡では埋土の下位に、44号土坑では埋土の中位から上位にかけて比較的まとまって出土しており、時間的にも限定された有意の土器群として取り扱って良いものと思われる。これらの遺構のうち、個体数の保証された5・8号の両住居跡から出土した土器群は、総合的に見れば胎土に繊維を含み、組紐の施文されること、片口土器が存在すること、さらにコンパス文や半截竹管の平行線文による幾何学文が施文されること、底部は上げ底等で共通する。しかし、器形面においては大形の壺形土器の存否や片口土器の胴部における括れの有無など、異質性が窺える。また、両住居出土の土器に施文された縄文の種類を比較する(表9)と、ループ文では両住居とも0.7%前後と同様であるが、組紐では5号住居が約20%、8号住居では25%とやや8号住居が多く、前々段反摺(異節)では5号住居が0.3%、8号住居が0.6%と例数が少ないもののその間には2倍の差がある。また、比較的遺存状況がよく、復元された土器をみると、5号住居では前々段反摺(異条)や直前段反摺が目立ち、8号住居では3段の撚りや附加条が存在する。さらに、片口土器を見ると、いずれも3点のうち5号住居では前々段反摺・直前段反摺・ループ文が施文されているが、8号住居では組紐のみである。このように、両住居跡出土の土器群においては、土器の出土状況や個体数の差など集計上無視できない要素があるものの、差異が存在するものと認められよう。

このように、上記特徴から、これらの土器群は、若干の時間幅を有しながらも関山II式の範疇として把握され、可能性としては5号住居跡から出土した土器群は、やや先行するかもしれないことを想定しておきたい。類似の土器群は、県内では太田市大塚・間之原遺跡(太田市教育委員会 1981)、子持村黒井峯遺跡(能

表9 縄文原形種別集計表(5住・8住)

縄文原形	5号住	8号住
1段加飾	16	4
2段加飾	72	137
3段加飾	4	2
直前段反摺	2	6
前々段反摺	1	12
直前段反摺	7	50
前々段反摺	7	35
異節	—	1
ループ文	17	40
結束第1種	3	10
結節	3	8
附加条	3	7
束	2	1
組紐	47	132
短輪絡条体	—	2

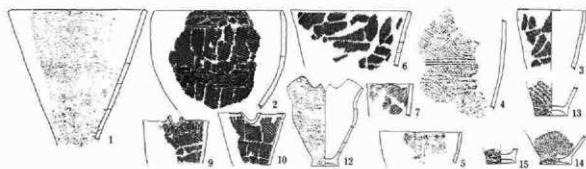
〈表9について〉

ここに示す表は、5号住居跡および8号住居跡埋土中から出土した一群の縄文土器に加えられた縄文を集計したものである。集計は使用された縄文原形の種類を主として行なっているため出土点数とは相違している。観察できた点数は5号住居で239点中179点、8号住居で548点中424点であり、小片もしくは器面が傷み種別不明なものは除外している。

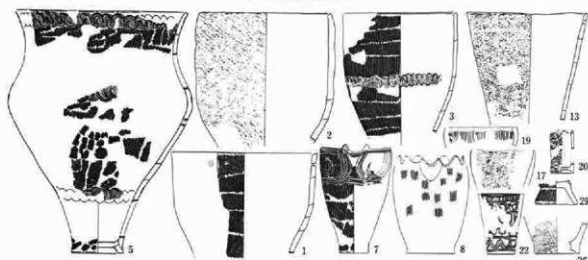
縄文原形の種類については表に示す通りであるが、この中には結束によらない羽状縄文(5住1例、8住30例)、0段多条、附加条I～IIIなどが一括含まれている。また、基本撚りについてもR・L両者が使用されている例が多いということも条件としてその傾向性については割愛している。

このような各種縄文の特徴をはじめとして、集計とは別に注目される組紐、前々段反摺、束などメルクマールとなり得る縄文の施文効果における類似性など別の機会に分析・報告しなければならぬ点もある。今後引き続き分析していきたいと考えているが、ここでは縄文原形種別一覧として報告しておく。

なお、原形の名称は山内清男『日本先史土器の編纂』先史考古学会 1979年に拠っている。



5号住居跡出土土器



8号住居跡出土土器



44号土坑出土土器

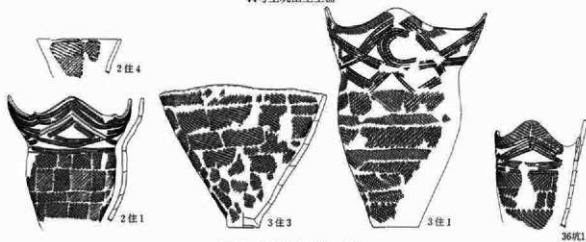


図80 主な縄文土器 1/8

登・藤巻 1988)、赤城村勝保沢中ノ山遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)、渋川市後田東遺跡(渋川市教育委員会 1989)などで出土しており、詳細な比較検討が必要である。さらに、千葉県幸田貝塚(幸田貝塚発掘調査団 1975)や井沼方遺跡(浦和市教育委員会 1981)などで、上記土器群の口縁部文様と強い関連性を持つ土器群が出土している。今後、広い視野の下に分析を行わなければならない。

また、特筆すべきは神ノ木式土器の一つの特徴である東の縄文の出土である。明確な共存関係は確定できないが、遺構外に、5・8号住居跡の埋土からも出土しており、これまで神ノ木式が関山Ⅱ式と併行関係を示すと考えられていたこと(戸田他 1979)と矛盾は示していないものと考えられる。

一方、2・3号住居跡、そして36号土坑からは、連続爪形文による菱形文が口縁部に施文された、有尾式系の土器が出土している。いずれの遺構においても全形をうかがえる資料が少なく、本遺跡における一般性をとらえるには到らない。しかし、上記3者の遺構から出土した土器を比較すると、いずれも波状口縁を有する土器でありながらも、胴部の括れの有無、波底部における突起の有無、波頂部の差異、また、菱形の中における充填文の有無、連続爪形文の胴部への施文の有無等の違いが見られる。そうしたことの意味は、今後資料が集積されている赤城山西麓の各遺跡出土土器と比較検討する中で追及して行きたい。その中で、本遺跡からは、有尾式土器の特徴である櫛歯状刺突文を有する土器は小破片のみで、主体的な文様要素としては認めることはできない。こうした問題も上記の追求と合わせて、時期差あるいは遺跡の個性の問題を考慮して考えて行かなければならない。

ところで、関山Ⅱ式と、有尾式系土器の関係を見る上で問題にしなければならないのは、有尾式系土器の指標となっている口縁部における連続爪形文による菱形文の出自についてである。確かに、信州地方における有尾式との関係は無視できない。しかし、内的関連としての関山Ⅱ式との関係も追求しなければならないのではなかろうか。有尾式系土器における菱形文の構成を見て見ると、波状口縁が主体であり、菱形文は連続爪形文による口縁にそった平行線の窟歯状文と、胴部と口縁部の境界線、場合によると括れ部における平行線間に施文されている。

一方、関山Ⅱ式においても、波状口縁が安定的に存在することは2住-6や44土坑-1のように明らかである。また、それらの文様の中には、波状口縁にそった半截竹管による平行線文、胴部と口縁部の境界の括れ部における平行線(平行線を区切る文様があるが)、そして半截竹管による刺突文が存在するのである。このように両者間では、波状口縁を有するという器形状また半截竹管による平行線文・および刺突文という工具上及び施文上の共通要素が存在することを積極的に認めてよいのではないと思われる。今後、信州、そして東北地方も視野に入れながらも、地域内における有機的な関連も注意する必要がある。

住居跡 本遺跡では8軒の縄文時代の住居が検出された。しかし、そのうちの4号住・7号住は全掘できなかったり、平面形が確認されず、その構造を検討するだけで資料を抽出することはできなかった。そして、のこりの5軒の住居は、土器の出土がいずれも埋土からの出土であり、不確定要素を多分に残すが、関山Ⅱ式期が1・5・8号住の3軒、黒浜・有尾式期が2軒、前期後半が2軒と想定した。全体的に柱穴の同定が困難で、住居の基本構造の把握の面では不十分であったと言わざるを得ない。また、平面形の形状や、規模、壁溝の有無とその位置、炉の有無をその構造および住居等各住居間に変異が存在し、例数が少ないことと相俟って、一般性を把握することはできなかった。今後、他遺跡の検出例と合わせて検討して行きたい。

なお、北橋村教育委員会が1987(昭和62)年度には場整備事業で実施した本発掘区の東側における道路部分の調査により、関山・黒浜式期の土器が出土しており、住居跡の存在の可能性も指摘されている(北橋村教育委員会 1989)。本発掘区は東側に延びる縄文時代前期の集落の一部と言えよう。

土坑 規模や形状に変異があるが、長軸約150cm、短軸約120cmの楕円形と、直径が約1mの円形が主体的である。遺物の出土状況を見ると、完形土器を安置したような様子は認められず、器としての機能は既に失っている土器片や、安置したとは思われない石器類、そして燻や炭化したクリ・木材が比較的多く出土する土坑と、ほとんど遺物の出土しない土坑にわけられる。前者では、底面から出土する例は少なく、埋土の中位を中心に遺物が出土している。そして、出土した石器の中には、45号土坑のように、同一母岩に属すると考えられる剥片類が一括して出土している。こうした状況を手し得た範囲内で考えると、本調査により検出した土坑の中には、墓壙を積極的に想定させる例はない。そして、遺物は坑底からやや浮いた状況で出土することから、貯蔵用等の本来の目的とした機能が達せられた、あるいは停止された後に、坑底に少しの埋土の堆積する時間的間隔を置いて、その埋まりきらない窪みを利用して、不要になったものが廃棄されていたものと想定したい。出土したクリも小破片で炭化しており、本来的に貯蔵されていたものが遺存したとは考えにくく、他のものと一括で廃棄されているものであろう。そうした廃棄の契機としては、日常生活上の様々な機会が考えられるが、同一母岩の剥片類のように、剥片生産終了後の一括廃棄（小剥片の存在から剥片剥離時における動物の存在を予想してよいであろうか）や、45号土坑のように、炉石や内面にはじけを有する土器から、炉の改築時などが、その機会の中に含まれよう。しかし、土坑の本来の目的を示すような資料は得られなかった。一部袋状の痕跡が残っている土坑もあり、堅果類の貯蔵を予想するにとどめたい。

本発掘では土坑の埋土の水選別を実施し、石器の小剥片を抽出することができた。土坑の意味を考える上で一定の成果を取めたものと思われる。

溝 2号溝とした溝は、前述のとおり縄文時代に属する可能性を想定した。しかし、類例を聞かず、その目的・用途は類例の追加を持って検討したい。

石器群

縄文時代の石器については、器種の認定方法から始まり、器種と石材との関係、機能・用途の問題等課題は山積している。本報告ではそのいずれの問題についても追求は不充分といわざるを得ず、以下限られた問題について記すにとどめたい。

まず、黒曜石の原石の問題である。本発掘では、遺構内および遺構外をあわせて4点の黒曜石・黒曜石様岩の石核・原石が出土している。そのうちの2点の石核（図76-9・12）は、長野県男女倉産の黒曜石と同定され、他の2点の黒曜石様岩も同様の外観を示すことから、黒曜石と考えておきたい。そうすると、それらの特徴は最大長で約5m前後と小形であることがあげられる。そのことは、黒曜石製の石鏃や楔形石器、及び剥片類が総体的に小形であることと対応するものと考えてよいものと思われる。

一方、昭和村糸井宮前遺跡では、13.7×18.7×6.6cmの大きさで、約1.9kgの重さの黒曜石の原石が諸磯b～c式期にぞくするものとして出土しており、長野県星ヶ塔産とされる（鈴木他 1988）。県域では黒曜石は産出しないとされ、本遺跡出土の黒曜石様岩を含めた黒曜石は、他地域からの搬入品と考えざるを得ず、糸井宮前遺跡のあり方と対照的である。

また、本遺跡出土の黒曜石の産地を遺構ごとに分けてみると、例数が限られる上に、水層による年代測定に矛盾が生じており、不確定要素を多分に含むが、遺構と黒曜石の産地に限定的な対応関係を示す可能性も考えてよいものと推定される。

今後、黒曜石としての同定を踏まえ、原石の搬入の大きさ、原石と定形石器および剥片との関係、時期ごとの搬入経路のあり方などが目的意識的に追求される必要がある。

さらに、8号住居跡の埋土からは良好な石器の接合資料が検出され、剥片剥離工程の復元を試みる上で重

要な資料を提示できたものとする。これ以外にも石器の接合資料が確認され、縄文時代の石器でも接合を積極的に行う必要性が痛感される。そのことは、単に石器の剥片剥離工程の復元にとどまらず、定形石器と剥片との対応関係や、石器の遺存していた場の機能の理解などについて、多くの情報を与えてくれることが予想される。

2. 中世以降の遺構と遺物

今回の調査において、溝8条、土坑26基、墓墳1基、柵列2ヶ所が検出され、貴重な資料を得ることができたとともに数々の問題点を提起した。以下、得られた内容について概要をまとめてみたい。

1号溝は山崎一氏の御教示により、遺跡地東方丘陵上に位置する箱田城（山崎 1971）の遺構だと判明した。そして、本遺構がさらに北側へ延び、大きく東側へ回り込む様相が踏査と調査時に実施した空中写真からも明白となった。図版1の地籍図と航空写真の地割の様子からもあてはまる。利根川の侵蝕を受けた急峻な崖面が、傾斜を緩めた地点からこの遺構は構築され、大きく北側へ回り込む小規模な段差の上端からやや内側に沿って、さらに東側に延びると推定される。

従来、城山の丘陵上に築城された箱田城は単郭塁構造とされていたが、調査によって丘陵地全域を防護する広大な総構が判明された。他の施設構造についても総合的に検討を加え直さねばならないであろう。

29号土壇は二体合葬の墓墳である。しかも宮崎重雄氏の所見によれば、1号は17～27歳前後の女性、2号は25～35歳前後の男性の可能性があるという。当時の男性と女性の社会的立場や副葬品として古銭の枚数の差異、埋葬状況での位置関係、死因、手首と足首付近が縛られていた可能性がある、という多くの問題点があげられる。未確認ではあるが、築城の際に二人の人柱を立てるといふ。箱田城との関係は不明である。

遺構に伴う遺物としては、28号土壇出土の土師質土器の皿が唯一である。形態、法量、技法等の所見を大江正行氏による群馬県の土師質土器の変遷観（大江 1980）によると、15世紀末～16世紀に比定されると思われる。

28号土坑と墓墳は位置関係や遺物の年代観から、墓墳に対する墓前祭祀的性格が推定できるが、古銭は伝世があり、年代観に決定を欠く。類例の増加を待ち、言及していきたいと考える。

引用・参考文献（年代順）

- 山崎 一 1971 『群馬県古城原址の研究 上巻』
 埼玉県教育委員会 1974 『関山貝塚』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集
 山田貝塚発掘調査班 1975 『山田貝塚 第5次（昭和50年度）調査報告』
 沢口 宏 1976 一、地形 『北橋村誌』 第一章 北橋村の自然 第一節 地形・地質 pp. 23～38
 新井 房夫 1979 関東地方北西部の縄文時代の示標テラス層 『考古学ジャーナル』 157 pp. 41～52
 戸田 哲也・大矢昌彦 1979 神ノ木式・有底式土器の研究（前） 『長野県考古学会誌』 34 pp. 1～20
 山内 清男 1979 『日本先史土器の概観』
 大江 正行 1980 群馬県と周辺地域の縄文土師質土器Ⅰ—近世の出土例を中心に— 『群馬考古通信』 7 pp. 1～14
 太田市教育委員会 『大塚・関之原遺跡確認調査の概要—第2次調査（白金・榎戸・大塚・高梁地区）—』
 浦和市遺跡調査会 1981 『大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第15集
 秋池 武・新井 順二 群馬県における神ノ木式・有底式土器について 『信濃』 35-4 pp. 280～289
 大宮市遺跡調査会 1984 『深作東部遺跡群』
 鬼形 芳夫 1985 赤城山麓における縄文文化の展開 『群馬県史研究』 21 pp. 6～38
 北橋村教育委員会 1986 『分郷八崎遺跡』
 鈴木正男・堀岡 久・金山富昭・戸村健児・関根慎二 1987 第2節 糸井宮前遺跡の黒曜石分析 『糸井宮前遺跡』 pp. 204～209
 熊倉 健・藤巻孝男 1988 黒井基遺跡 『群馬県史 資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』 pp. 516～530
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『勝保沢中ノ山遺跡1』
 早田 勉 1989 6世紀における標名火山の2回の噴火とその災害 『第四紀研究』 27 pp. 297～312
 北橋村教育委員会 1989 『城山遺跡』
 澁川市教育委員会 1989 『市内遺跡II—1988年度補助事業に伴う調査報告及び中跡遺跡地下レーダー探査報告—』

表10 縄文土器観察表

表10 縄文土器観察表

番号	出土位置	器形	胎土	色調	遺存状況	特徴(縄文・文様・口唇部・底部等)	型式
5住1	埋土上位	深鉢	含繊維	明褐	口縁・胴	平行沈線山形、弧状文、前々段合摺	岡山Ⅱ
5住2	埋土上位	深鉢	含繊維	にぶい・褐	口縁・胴	平行沈線山形、円形、方形、前々段反摺RLL	岡山Ⅱ
5住3	埋土上位	深鉢	含繊維	暗褐	口縁・胴	0段多条単筋RL斜行縄文	前期前半
5住4	埋土下位	深鉢	含繊維	黄橙	胴部	平行沈線山形、弧状文、地文組紐、ループ文	岡山Ⅱ
5住5	埋土下位	深鉢	含繊維	明褐	口縁部	直前段反摺L	前期前半
5住6	埋土上位	深鉢	含繊維	黒褐	口縁部	単筋RL、LR羽状縄文	前期前半
5住7	埋土	深鉢	含繊維	明褐	口縁・胴	無筋RL斜行縄文	前期前半
5住8	埋土中位	深鉢	含繊維	黄橙	口縁部	前々段合摺	前期前半
5住9	埋土上位	片口深鉢	含繊維	褐	口縁・胴	前々段反摺RLL、コンパス文、補修孔	岡山Ⅱ
5住10	埋土上位	片口深鉢	含繊維	褐	口縁・胴	単筋RL、LR羽状縄文、ループ文	岡山Ⅱ
5住11	埋土上位	片口深鉢	含繊維	にぶい・褐	片口部	無筋RL斜行縄文	岡山Ⅱ
5住12	埋土上位	片口深鉢	含繊維	褐色	3分2残	RL+L、無筋Lの羽状縄文、上げ底	岡山Ⅱ
5住13	埋土中位	深鉢	含繊維	にぶい・橙	底部	単筋RL斜行縄文、上げ底	岡山Ⅱ
5住14	埋土上位	深鉢	含繊維	橙	底部	組紐L L L L、コンパス文、上げ底	岡山Ⅱ
5住15	埋土	深鉢	含繊維	橙	底部	単筋LR、斜行縄文	岡山Ⅱ
5住16	埋土中位	深鉢	含繊維	黄橙	口唇部	沈線梯子状刻み粘土層、地文無筋RL斜行縄文	岡山Ⅰ
5住17	埋土中位	深鉢	含繊維	黒褐	口唇部	平行沈線内爪形文菱形構成、区画内円形刺突	岡山Ⅱ
5住18	埋土	深鉢	含繊維	にぶい・褐	口唇部	平行沈線内爪形文上に粘土層貼付	岡山Ⅱ
5住19	埋土	深鉢	含繊維	にぶい・褐	口唇部	平行沈線内爪形文	岡山Ⅱ
5住20	埋土中位	深鉢	含繊維	褐	口唇部	半截竹管の山形文、地文0段多条単筋RL	岡山Ⅱ
5住21	埋土	深鉢	含繊維	褐	口唇部	平行沈線で横位、山形に施文、地文組紐	岡山Ⅱ
5住22	埋土中位	深鉢	含繊維	明褐	口唇部	平行沈線で横位、山形に施文、地文組紐	岡山Ⅱ
5住23	埋土中位	深鉢	含繊維	明褐	口唇部	柳状工具で頸部に縦位の施文、地文組紐	岡山Ⅱ
5住24	埋土	深鉢	含繊維	暗褐	口唇部	組紐L L R R。波状になり小突起を持つ	岡山Ⅱ
5住25	埋土上位	深鉢	繊維少	暗褐	胴部	組紐、内面は良く研磨されている	岡山Ⅱ
5住26	埋土上位	深鉢	含繊維	明褐	胴部	複筋RLRと直前段反摺Lによる羽状縄文	岡山
5住27	埋土上位	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	0段多条単筋RLのループ文	岡山
5住28	埋土上位	深鉢	含繊維	にぶい・橙	胴部	複筋RLR斜行縄文	前期前半
5住29	埋土上位	深鉢	含繊維	にぶい・橙	胴部	東の縄文4本束ねる	神ノ木
5住30	埋土	深鉢	含繊維	にぶい・橙	胴部	東の縄文4本束ねる	神ノ木
8住1	埋土下位	深鉢	含繊維	褐	口縁・胴	組紐L L R R、補修孔	岡山Ⅱ
8住2	埋土下位	深鉢	含繊維	にぶい・橙	口縁・胴	前々段反摺RLLと無筋Lの羽状縄文	前期前半
8住3	埋土下位	深鉢	含繊維	にぶい・橙	口縁・胴	組紐、R R L L、コンパス文	岡山Ⅱ
8住4	埋土下位	深鉢	含繊維	にぶい・橙	胴部	組紐L L R R、コンパス文、平行沈線の弧状文	岡山Ⅱ
8住5	埋土中位	壺	含繊維	褐	口縁・胴	コンパス文口縁、頸、胴3段に施文、地文前々段合摺	岡山Ⅱ
8住6	埋土下位	深鉢	含繊維	褐	胴部	単筋RL、0段多条単筋LR羽状縄文	前期前半
8住7	埋土下位	片口深鉢	含繊維	にぶい・橙	口一部欠	平行沈線の横位、弧状施文、地文組紐R R L L	岡山Ⅱ
8住8	埋土中位	片口深鉢	含繊維	暗褐	2分1欠	組紐L L R R、口縁は波状を呈するか?	岡山Ⅱ
8住9	埋土下位	片口深鉢	含繊維	暗褐	片口部	平行沈線の山形、弧状文、地文組紐L L R R	岡山Ⅱ
8住10	埋土南東部	片口深鉢	含繊維	褐	片口部	平行沈線の弧状文、地文ははっきりしない	岡山Ⅱ
8住11	埋土中位	深鉢	含繊維	にぶい・褐	胴部	単筋RL、附加条第1種LR+L羽状縄文	前期前半
8住12	埋土中位	壺	含繊維	暗褐	胴部	コンパス文2段、地文RLループ、組紐L L R R	岡山Ⅱ
8住13	埋土下位	深鉢	含繊維	暗褐	口縁・胴	前々段合摺か?、補修孔	前期前半
8住14	埋土	深鉢	含繊維	にぶい・褐	胴部	平行沈線の縦、斜位施文、地文0段多条RL	前期前半
8住15	埋土下位	深鉢	含繊維	暗褐	口縁・胴	RL、LR羽状縄文	前期前半
8住16	埋土	深鉢	含繊維	褐	口縁	0段多条単筋RL、LR羽状縄文、補修孔	前期前半
8住17	埋土	深鉢	含繊維	暗褐	口縁・胴	単筋RL斜行縄文、直前段反摺LRか?	前期前半
8住18	埋土南東部	深鉢	含繊維	橙	口唇部	平行沈線の山形文、地文組紐	岡山Ⅱ
8住19	埋土南東部	深鉢	含繊維	橙	口縁部	平行沈線の弧状文、地文組紐	岡山Ⅱ
8住20	埋土北東部	小型深鉢	含繊維	にぶい・褐	一部欠損	無筋L斜行縄文、上げ底	岡山Ⅱ
8住21	埋土	小型深鉢	含繊維	褐	一部欠損	単筋LR斜行縄文	前期前半
8住22	埋土下位	小型深鉢	含繊維	暗褐	口一部欠	平行沈線の波状、弧状文、胴部上無文	岡山Ⅱ
8住23	埋土下位	深鉢	含繊維	橙	底部	直前段合摺RとLの羽状縄文、上げ底	岡山Ⅱ
8住24	埋土下位	深鉢	含繊維	明褐	底部	前々段合摺Rの斜行縄文、上げ底コンパス文	岡山Ⅱ
8住25	埋土	深鉢	含繊維	にぶい・褐	底部	組紐L L R R	岡山Ⅱ
8住26	埋土下位	深鉢	含繊維	明褐	底部	直前段合摺RとLの羽状縄文、上げ底	岡山Ⅱ
8住27	埋土下位	深鉢	含繊維	褐	胴・底部	組紐L L R R、やや上げ底	岡山Ⅱ

表10 縄文土器観察表

番号	出土位置	器形	胎土	色調	遺存状況	特徴(縄文・文様・口唇部・底部等)	型式
8住28	埋土中位	深鉢	含繊維	赤褐	底部	単節LR縦位、附加条第1種RL+L	前期前半 関山II
8住29	埋土中位	深鉢	含繊維	黒褐	底部	組紐L.L.R.R、高台状になる	関山II
8住30	埋土下位	深鉢	含繊維	明赤褐	口唇部	梯子状沈線で変形を呈する	関山I
8住31	埋土下位	深鉢	含繊維	にぶい褐	口唇部	平行沈線で異状に施文後粘土層貼付	関山I
8住32	埋土南西部	深鉢	含繊維	褐	口唇部	平行沈線の山形に施文、地文組紐、波状口縁	関山II
8住33	埋土下位	深鉢	含繊維	黒	胴部	平行沈線の渦巻、波状文、地文組紐	関山II
8住34	埋土	深鉢	含繊維	にぶい褐	口唇部	梯子状沈線による文様施文後粘土層貼付	関山I
8住35	埋土	深鉢	含繊維	にぶい褐	口縁部	梯子状沈線による文様施文後粘土層貼付	関山I
8住36	埋土	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	梯子状沈線施文後粘土層貼付、ループ文	関山I
8住37	埋土北西部	片口深鉢	含繊維	にぶい褐	注口部	コンパス波状文、単節RLを横位縦位に施文	関山II
8住38	埋土南東部	深鉢	含繊維	橙	胴部	梯子状沈線	関山I
8住39	埋土	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	梯子状沈線後粘土層	関山I
8住40	埋土南東部	深鉢	無繊維	にぶい橙	胴部	束の縄文、縄の束端に結び目が見られる	関山I 神ノ木
8住41	埋土	深鉢	含繊維	暗暗褐	胴部	前々段合摺L	関山I
8住42	埋土南西部	深鉢	含繊維	極暗褐	口唇部	断面四角形の柳状工具による押し引き	前期前半 前期後半
8住43	埋土北東部	深鉢	無繊維	にぶい橙	胴部	単節RL、LRの結束による羽状縄文	前期前半 前期後半
1住1	埋土南東部	深鉢	繊維少	暗褐	口唇部	単節LR横位に施文、口縁は内そぎ平縁	有尾系 有尾系
1住2	埋土南東部	深鉢	含繊維	明褐	口唇部	爪形文、地文RL?、口縁は内そぎ波状	有尾系
1住3	埋土南西部	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	0段多条単節RL横位施文	前期前半 前期前半
1住4	埋土南西部	深鉢	含繊維	褐	胴部	単節RL〔1段多条?〕横位に施文	前期前半 前期前半
1住5	埋土南西部	深鉢	含繊維	褐	胴部	表面摩減多く縄文原体不明	前期前半 前期前半
1住6	埋土南東部	深鉢	含繊維	橙	胴部	表面摩減多く縄文原体不明	前期前半 前期前半
1住7	埋土南東部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	無節R?横位施文	前期前半 前期前半
1住8	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい褐	胴部	0段多条単節LR横位施文	前期前半 前期前半
1住9	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい褐	胴部	単節RL縦位と横位施文で羽状縄文か?、表面摩減多い	前期前半 前期前半
1住10	埋土南西部	深鉢	繊維少	明褐	胴部	単節RL横位施文、薄手	前期前半 前期前半
1住11	埋土南西部	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	2段の異条斜縄文、1段1条のもの	前期前半 前期前半
1住12	埋土南西部	深鉢	含繊維	黒褐	胴部	摩減多く原体不明	前期前半 前期前半
1住13	埋土南西部	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	摩減多く原体不明	前期前半 前期前半
1住14	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	単節RL、LRの羽状縄文	前期前半 前期前半
1住15	埋土南西部	深鉢	含繊維	褐	胴部	0段多条の単節RL、LRの羽状縄文	前期前半 前期前半
1住16	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	0段多条の単節RL、LRの羽状縄文	前期前半 前期前半
1住17	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	単節RL、LRの結束による羽状縄文	前期前半 前期前半
1住18	埋土南西部	深鉢	含繊維	明褐	胴部	摩減多い、RLの前後段反折りか?	前期前半 前期前半
1住19	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい褐	胴部	組紐	関山
1住20	埋土南西部	深鉢	含繊維	黒褐	胴部	附加条第3種か?	関山II
1住21	埋土南東部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	組紐、弧状文、斜行縄文	関山II
1住22	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	組紐、縦曲状の沈線が施される	関山II
1住23	埋土南西部	深鉢	含繊維	暗褐	胴部	組紐L.L.R.R	関山II
1住24	埋土南西部	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	組紐	関山II
1住25	埋土南東部	深鉢	含繊維	橙	胴部	組紐	関山II
1住26	埋土南西部	深鉢	繊維少	橙	胴部	組紐	関山II
3住1	埋土中位	甕	含繊維	明褐	ほぼ完形	連続爪形文、無節R、単節LR・RL、前々段反折LR等羽状	有尾系
3住2	埋土中位	甕	含繊維	褐	連続爪形文、前々段反折L.R.R、R.L.L羽状縄文	有尾系	
3住3	埋土中位	深鉢	含繊維	黒褐	ほぼ完形	0段多条単節RL、LR羽状縄文	前期前半 前期前半
3住4	埋土	深鉢	含繊維	にぶい褐	口唇部	0段多条単節RLの斜行縄文、口唇に面を持つ	前期前半 前期前半
3住5	埋土	深鉢	含繊維	黒	口唇部	単節RLの斜行縄文、口唇は丸くなる	前期前半 前期前半
3住6	埋土	深鉢	含繊維	にぶい褐	胴部	前々段合摺	関山II
3住7	埋土	深鉢	含繊維	にぶい橙	胴部	半載竹管による爪形文を横位に施文	関山II
3住8	埋土	深鉢	含繊維	にぶい橙	口縁部	爪形文を山形状に施文、交点に粘土貼付	有尾系
3住9	埋土	深鉢	含繊維	にぶい褐	胴部	組紐、コンパス文を二回重ねて施文	関山II
3住10	埋土	深鉢	含繊維	にぶい褐	胴部	組紐、コンパス文を施文	関山II
3住11	埋土中位	浅鉢	繊維少	暗褐	3分1脱	縄文、全体に磨き、口縁ゆるい波状を呈する	前期前半 前期後半
3住12	埋土	有孔浅鉢	無繊維	橙	胴部	胴部無文、外面は磨かれている	器種b
2住1	埋土下位	甕	含繊維	明褐	底部欠損	連続爪形文の変形、0段多条単節RL、無節L羽状縄文	有尾系

表10 縄文土器観察表

番号	出土位置	器形	胎土	色調	遺存状況	特徴(縄文・文様・口唇部・底部等)	型式
2住2	埋土下位	壺	合織羅	橙	口縁・胴	連続爪形文の變形、0段多糸単節RL、LR羽状縄文	有尾系 関山
2住3	埋土	片口深鉢	合織羅	にぶい橙	片口部	組紐、片口上唇の片口部	有尾系 関山II
2住4	埋土中位	深鉢	合織羅	暗褐	口唇部	無節Rと0段多糸単節LRの羽状縄文	関山II
2住5	埋土	壺	合織羅	にぶい橙	口唇部	半截竹管による山形、弧状文、刺突、地文組紐	関山II
2住6	埋土中位	壺	合織羅	にぶい橙	口縁・胴	半截竹管による山形、弧状文、地文組紐	関山II
2住7	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	口唇部	平行沈線山形、円形文。0段多糸RL、LR	関山I 前期前半
2住8	埋土ベルト	深鉢	合織羅	橙	口唇部	平行沈線と梯子状沈線に粘土瘤	前期前半
2住9	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	単節LRの斜行縄文	前期前半
2住10	埋土南西部	深鉢	合織羅	褐	口唇部	0段多糸単節RLの斜行縄文、横位施文	前期前半
2住11	埋土ベルト	深鉢	合織羅	黒褐	口唇部	単節RLの斜行縄文、補修孔	前期前半
2住12	埋土南西部	深鉢	合織羅	にぶい褐	口唇部	単節RLの斜行縄文、横位施文	前期前半
2住13	埋土	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	直前段反摺RRの横位施文	前期前半
2住14	埋土南西部	深鉢	合織羅	黒	胴部	単節LRの斜行縄文	前期前半
2住15	埋土ベルト	深鉢	合織羅	褐	胴部	単節LRの斜行縄文	前期前半
2住16	埋土	深鉢	合織羅	黒褐	胴部	ループ文	関山
2住17	埋土ベルト	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	0段多糸Lの斜行縄文	前期前半
2住18	埋土	深鉢	合織羅	明褐	胴部	摩滅多く原体がはっきりしないRとLか?	前期前半
2住19	埋土南西部	深鉢	合織羅	明褐	胴部	0段多糸単節RL、LRの結束羽状縄文	前期前半
2住20	埋土ベルト	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	0段多糸単節LRとRLの羽状縄文變形構成	前期前半
2住21	埋土南西部	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	単節RLの斜行縄文	前期前半
2住22	埋土	深鉢	合織羅	明褐	胴部	単節RLとLRの結束による羽状縄文	前期前半
2住23	埋土ベルト	深鉢	合織羅	明褐	胴部	前々段反摺RLとLRの羽状縄文	前期前半
2住24	埋土南西部	深鉢	合織羅	褐	胴部	0段多糸単節RLとLRの羽状縄文、ループ文	前期前半
2住25	埋土中位	深鉢	合織羅	明褐	胴部	0段多糸単節RLとLRの羽状縄文	前期前半
2住26	埋土南西部	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	単節RLとLRの羽状縄文	前期前半
2住27	埋土	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	単節RLとLRの羽状縄文	前期前半
2住28	埋土	壺	合織羅	橙	胴部	0段多糸単節RLとLRの結束による羽状縄文	前期前半
2住29	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	0段多糸単節LRとRLの結束による羽状縄文	前期前半
2住30	埋土	壺	合織羅	にぶい褐	胴部	単節RLの縄文を縦位、横位に施文する羽状縄文	前期前半
2住31	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	直前段合摺	前期前半
2住32	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	0段多糸単節RLのループ文	関山
2住33	埋土	深鉢	合織羅	黒	胴部	0段多糸単節RL、LRのループ文を羽状縄文	関山
2住34	埋土南西部	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	0段多糸単節RLのループ文	関山
2住35	埋土中位	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	R2本の結節縄文	前期前半
2住36	埋土ベルト	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	摩滅多い、結節R2本摺か?	前期前半
2住37	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	結節R2本摺か?	関山
2住38	埋土	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	コンパス文、地文組紐	関山II
2住39	埋土南西部	深鉢	合織羅	橙	胴部	単節RL斜行縄文、コンパス文	関山II
2住40	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	組紐、摩滅多い	関山II
2住41	埋土ベルト	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	摩滅多い、RRLの直前段反摺りか?	前期前半
2住42	埋土	深鉢	合織羅	橙	底部	摩滅多い、複節RLの斜行縄文か?。上げ底	前期前半
2住43	埋土	壺	合織羅	橙	口縁部	石から左へ連続爪形文、地文前々段反摺RLか?	有尾系
2住44	埋土上位	深鉢	合織羅	にぶい橙	口縁部	連続爪形文、地文単節LR、摩滅多い	有尾系
2住45	埋土下位	深鉢	合織羅	明褐	胴部	連続爪形文、地文0段多糸単節LRとRL	前期前半
2住46	埋土	深鉢	合織羅	黒褐	胴部	連続爪形文、地文摩滅多く不明	前期前半
2住47	埋土上位	壺	合織羅	にぶい橙	口縁部	平行沈線で変形を描き、一部に爪形文を施文	有尾系
6住1	埋土	深鉢	合織羅	にぶい褐	口唇部	単節LRの斜行縄文	前期前半
6住2	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	摩滅多く原体がはっきりしないが附加か?	前期前半
6住3	埋土	深鉢	合織羅	にぶい褐	胴部	摩滅多く原体がはっきりしないが単節LRか?	前期前半
6住4	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	単節RLの斜行縄文	前期前半
6住5	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	前々段反摺LRの斜行縄文	前期前半
6住6	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	胴部	鋭利な工具による沈線で格子目に描く	前期前半
6住7	埋土上位	深鉢	合織羅	黄橙	胴部	R2本S字状、L2本Z字状の結節での羽状縄文	関山I
6住8	埋土	深鉢	合織羅	にぶい橙	底部	単節RLの斜行縄文、上げ底、摩滅多い	前期前半
6住9	埋土上位	深鉢	合織羅	にぶい橙	底部	単節RLの斜行縄文、上げ底	前期前半
6住10	埋土下位	深鉢	合織羅	暗褐	口唇部	単節RLとLRの結束羽状縄文	前期後半
6住11	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	単節RLとLRの羽状縄文	前期後半
6住12	埋土	深鉢	合織羅	暗褐	胴部	単節RLとLRの羽状縄文	前期前半

表10 縄文土器観察表

番号	出土位置	器形	胎土	色調	遺存状況	特徴(縄文・文様・口唇部・底部等)	型式
6住13	埋土	深鉢	無織維	暗褐色	口唇・胴部	集合沈線により格子目を描く。	諸磯c 前期後半
6住14	埋土	深鉢	無織維	黄褐色	胴部	厚減多い、不鮮明な沈線	諸磯a 前期後半
6住15	埋土	深鉢	無織維	暗褐色	胴部	平行沈線による条線	前期後半
6住16	埋土上位	深鉢	無織維	明褐色	胴部	単節R LとL Rの結束羽状縄文	前期後半
6住17	埋土	深鉢	無織維	暗褐色	胴部	単節R LとL Rの結束羽状縄文	前期後半
6住18	埋土上位	深鉢	無織維	暗褐色	胴部	樽(4本) 状工具により格子目状の文様	前期後半
4住1	床面直上	浅鉢	無織維	明褐色	胴部	屈曲部上磨き、下部は単節R Lの斜行縄文	諸磯b
4住2	埋土	浅鉢	無織維	明褐色	胴部	屈曲部上磨き、下部は単節R Lの斜行縄文	諸磯b
4住3	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	平行沈線に爪形文を加える。地文無節L	諸磯b
4住4	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	単節R L斜行縄文	諸磯b
4住5	埋土	浅鉢	無織維	明褐色	胴部	無文、全体に磨きを施す	諸磯b
4住6	埋土	浅鉢	無文	明褐色	胴部	無文、全体に磨きを施す	諸磯b
4住7	埋土	浅鉢	無織維	明褐色	胴部	無文、全体に磨きを施す	諸磯b
4住8	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	単節R L斜行縄文	諸磯b
4住9	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	単節R L斜行縄文	諸磯b
4住10	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	RとLの2段の直前段合割り、羽状縄文	前期前半
4住11	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	組紐、縦位の平行沈線	前期前半
4住12	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	組紐、コンパス文	前期前半
4住13	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	全体に厚減多く縄文原形不明	前期前半
7住1	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	コンパス文、地文組紐	関山II
7住2	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	胴部	単節R Lのループ文	関山
7住3	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	組紐L L R R	関山II
7住4	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	単節L Rの斜行縄文	諸磯
7住5	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	厚減多い、単節R Lの斜行縄文	前期前半
7住6	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	単節R Lの斜行縄文	前期前半
7住7	埋土	深鉢	無織維	明褐色	胴部	複節R L Rの斜行縄文	諸磯
7住8	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	胴部	単節L Rの斜行縄文	前期前半
7住9	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	単節R Lの斜行縄文	前期前半
7住10	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	単節R Lの斜行縄文	前期前半
7住11	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	胴部	単節R L、L Rの羽状縄文	前期前半
7住12	埋土	深鉢	無織維	褐色	胴部	結部のあるL Rを縦位に施文	前期後半
7住13	床面直上	深鉢	無織維	灰白	底部	わずかに縦位の沈線が確認される	中期後半
35土坑3	埋土	深鉢	無織維	黒褐色	胴部	棒状、ボタン状貼付文、地文に0段多糸単節R L	諸磯c
35土坑4	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	胴部	単節R Lの斜行縄文	前期前半
36土坑1	床面直上	深鉢	含織維	明赤褐色	口・胴部	連続爪形文の變形、0段多糸R L、L R羽状縄文	有尾系
36土坑2	埋土	深鉢	含織維	明褐色	口唇部	梯子状沈線による菱形の施文	関山II
37土坑1	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	口唇部	平行沈線と連続爪形文	有尾系
37土坑2	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	口唇部	0段多糸単節R L斜行縄文	前期前半
37土坑3	埋土	深鉢	含織維	明褐色	口唇部	単節R Lのループ文	関山
37土坑4	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	単節R Lの斜行縄文	前期前半
37土坑5	埋土	深鉢	含織維	明褐色	胴部	前々段反照R L Lのループと単節L R羽状縄文	前期前半
37土坑6	埋土	深鉢	無織維	黄褐色	胴部	厚減多い、単節R Lの末端を筋彫にしたものか?	前期後半
38土坑1	埋土上位	深鉢	含織維	暗褐色	胴部	0段多糸単節R L斜行縄文	前期前半
38土坑2	埋土中位	深鉢	含織維	明褐色	口唇部	小突起、平行沈線の幾何学文様、地文組紐	関山II
38土坑3	埋土	深鉢	含織維	明褐色	口唇部	平行沈線と柳葉状工具による刻突	前期前半
39土坑1	埋土下位	深鉢	含織維	明褐色	胴部	厚減多い0段多糸L Rと直前段合割りの羽状縄文	前期前半
39土坑2	埋土下位	深鉢	含織維	暗褐色	胴部	平行沈線と横位の連続爪形文	有尾系
41土坑1	埋土下位	浅鉢	含織維	暗褐色	口唇部	平行沈線による菱形施文	有尾系
41土坑2	埋土中位	深鉢	含織維	明褐色	胴部	単節R LとL Rの羽状縄文	前期前半
41土坑3	埋土中位	深鉢	織維少	黒褐色	胴部	附加糸第1種、糸に各々縄を巻く	前期前半
41土坑4	埋土	深鉢	含織維	暗褐色	口唇部	平行沈線に連続爪形文	有尾系

表10 縄文土器観察表

番 号	出土位置	器 形	胎 土	色 調	遺存状況	特 徴 (縄文・文様・口唇部・底部等)	型 式
41土坑5 41土坑6 41土坑7	埋土 埋土 埋土	深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維	暗褐 暗褐 黒褐	口縁部 口縁部 口唇部	平行沈線に連続爪形文、交点上に輪土瘤貼付 平行沈線に連続爪形文 単節L Rの斜行縄文	有尾系 前期前半
43土坑1 43土坑2 43土坑3 43土坑4 43土坑5 43土坑6 43土坑7 43土坑8 43土坑9	埋土 埋土 埋土 埋土 埋土 埋土 埋土 埋土 埋土	深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維	浅黄橙 ぶい褐 浅黄橙 ぶい褐 ぶい橙 暗褐 明褐 ぶい褐 明褐	口唇部 口唇部 胴部 胴部 胴部 胴部 胴部 胴部 胴部	平行沈線、爪形施文 連続爪形文 平行沈線による渦巻き文 平行沈線、地文単節R L 平行沈線の幾何字模様、地文組紐 平行沈線、単節R Lの斜行縄文 0段多糸単節L R斜行縄文 Rの軸糸(?)を縮断にしたもの 摩滅多い、単節R Lの斜行縄文	関山Ⅱ 有尾系 関山Ⅱ 有尾系 関山Ⅱ 前期前半 前期前半 前期前半
44土坑1 44土坑2 44土坑3 44土坑4 44土坑5 44土坑6 44土坑7 44土坑8 44土坑9 44土坑10	埋土上位 埋土上位 深鉢 埋土上位 埋土中位 埋土中位 埋土中位 埋土 埋土中位 埋土中位	甕 甕 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維	黄橙 褐 黄橙 明褐 明褐 橙 橙 橙 橙 ぶい橙	口縁・胴 口～底 口縁・胴 口唇部 口唇部 口唇部 口唇部 胴部 胴部 底部	平行沈線のV字状文等コンパス文、単節R Lループ文 彫面による彫形文、コンパス文0段多糸単節R L 直前段反摺L R斜行縄文 4から10は同一個体 口縁部二段にコンパス文、地文組紐L R R	関山Ⅱ 関山Ⅱ 前期前半 関山Ⅱ 関山Ⅱ 関山Ⅱ 関山Ⅱ 関山Ⅱ 関山Ⅱ
45土坑1 45土坑2 45土坑3 45土坑4 45土坑5 45土坑6 45土坑7	埋土下位 埋土中位 埋土中位 埋土 埋土 埋土中位 埋土中位	深鉢 含繊維 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維	明褐 ぶい褐 明褐 褐 明褐 ぶい橙 ぶい褐	底部 底部 胴下部 胴部 胴部 胴部 底部	0段多糸単節R L斜行縄文 縄文ははっきりしないが単節R Lか?、上げ底 附加糸第3種で擦戻しぎみに附加する 組紐 単節L R斜行縄文 直前段合摺RとLにより羽状縄文 組紐L L R R、上げ底	前期前半 前期前半 前期前半 関山Ⅱ 前期前半 前期前半 前期前半
48土坑1 48土坑2 48土坑3 48土坑4 48土坑5 48土坑6	埋土中位 埋土中位 埋土上位 埋土 埋土中位 埋土中位	深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維	極暗褐 褐 褐 ぶい橙 ぶい橙 橙	胴部 胴部 胴部 胴部 胴部 胴部	コンパス文 単節R L斜行縄文 単節L R斜行縄文 R L照のループ文 0段多糸R L斜行縄文 全体に擦戻りが認められる、上げ底	関山Ⅱ 前期前半 前期前半 前期前半 前期前半 前期前半
51土坑1 51土坑2 51土坑3 51土坑4 51土坑5 51土坑6 51土坑7	埋土 埋土中位 埋土中位 埋土 埋土上位 埋土上位 埋土上位	深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維	明褐 極暗褐 明褐 極暗褐 黒褐 ぶい橙 ぶい橙	口唇部 胴部 胴部 胴部 口唇部 胴部 底部	0段多糸R L斜行縄文 連続爪形文、0段多糸単節R L、L R結束羽状縄文 連続爪形文、0段多糸単節R L、L R羽状縄文 単節L斜行縄文 連続爪形文、0段多糸単節R L、L R羽状縄文 組紐 組紐、若干上げ底になる	前期前半 有尾系 有尾系 前期前半 有尾系 関山Ⅱ 関山Ⅱ
54土坑1 54土坑2	埋土上位 埋土上位	深鉢 深鉢	含繊維 含繊維	ぶい褐 ぶい褐	胴部 胴下部	0段多糸R LとL Rのループ文 直前段合摺	関山Ⅰ 前期前半
55土坑1 55土坑2 55土坑3 55土坑4 55土坑5 55土坑6 55土坑7 55土坑8	埋土上位 埋土 埋土 埋土 埋土 埋土 埋土上位 埋土	深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢 深鉢	含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維 含繊維	橙 ぶい橙 褐 暗褐 ぶい褐 暗褐 橙 ぶい褐	口唇部 胴部 口唇部 胴部 胴部 胴部 胴部 胴下部	梯子状沈線、粘土瘤、補修孔を持つ 梯子状沈線、粘土瘤、地文単節R L、L R羽状縄文 無文 0段多糸単節R L、L R羽状縄文 0段多糸単節R L、L R羽状縄文 平行沈線、0段多糸単節R L、L R羽状縄文 単節R L斜行縄文 組紐	関山Ⅰ 関山Ⅰ 前期前半 前期前半 前期前半 前期前半 前期前半 関山Ⅱ

表10 縄文土器観察表

番号	出土位置	器形	胎土	色調	遺存状況	特徴(縄文・文様・口唇部・底面等)	型式
56土坑1	埋土上位	壺	含繊維	明褐色	口唇部	連続爪形文の横位、菱形施文	有尾系
56土坑2	埋土中位	壺	含繊維	明褐色	胴部	連続爪形文の横位施文	有尾系
56土坑3	埋土中位	深鉢	含繊維	暗褐色	口唇部	単筋RL、LR斜行縄文	前期前半
56土坑4	埋土中位	深鉢	含繊維	明褐色	口唇部	連続爪形文、前々段反筋RL、LRの羽状縄文	前期前半
56土坑5	埋土	深鉢	含繊維	明褐色	口唇部	単筋LR斜行縄文	前期前半
56土坑6	埋土中位	深鉢	繊維少	明褐色	口唇部	0段多糸単筋LR斜行縄文	前期前半
56土坑7	埋土	深鉢	含繊維	明褐色	口唇部	単筋RLルーペ	関山I
56土坑8	埋土上位	深鉢	含繊維	明褐色	底面	単筋RL、LR羽状縄文、上げ底	前期前半
2溝1	埋土	深鉢	含繊維	浅黄褐色	口唇部	梯子状沈線、粘土層	関山I
2溝2	埋土	深鉢	繊維少	浅黄褐色	口唇部	R筋の直前段合線	関山II
2溝3	埋土	深鉢	含繊維	明褐色	胴部	コンパス文、地文組紐	関山II
2溝4	埋土	深鉢	含繊維	明褐色	口唇部	コンパス文、地文組紐	関山II
2溝5	埋土	深鉢	無繊維	褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
2溝6	埋土	深鉢	繊維少	明褐色	胴部	連続爪形文と単筋RL	黒浜
2溝7	埋土	深鉢	含繊維	褐色	口唇部	平行沈線、地文0段多糸単筋RL斜行縄文	黒浜
2溝8	埋土	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	平行沈線による弧、斜線	諸磯a
2溝9	埋土	深鉢	無繊維	明赤褐色	胴部	0段多糸単筋RL、LR結束羽状縄文	前期後半
2溝10	埋土両端	深鉢	無繊維	浅黄褐色	底面	無文、底面新代産	後期
2溝11	埋土	深鉢	含繊維	明褐色	口縁部	連続爪形文、粘土層	有尾系
2溝12	埋土	深鉢	含繊維	明褐色	胴部	平行沈線による幾何学文様	諸磯a
2溝13	埋土	深鉢	無繊維	褐色	胴部	貝殻による波状文	浮島II
図57 1	B区VⅢ上	深鉢	含繊維	明褐色	口縁部	櫛状工具による菱形文、粘土層貼付	有尾系
図57 2	M21	深鉢	含繊維	褐色	口唇部	平行沈線による山形文、交点に粘土層貼付	関山I
図57 3	A区W18	深鉢	含繊維	褐色	口唇部	平行沈線横位円形の施文、交点に粘土層貼付	関山I
図57 4	B区L22Ⅲ上	深鉢	含繊維	褐色	口唇部	梯子状沈線による山形文、交点に粘土層貼付	関山I
図57 5	B区21Ⅲ上	深鉢	含繊維	明褐色	胴部	貝殻腹縁を引きずるよう施文	関山I
図57 6	B区B表土	深鉢	含繊維	明褐色	口唇部	梯子状沈線による山形文、交点に粘土層貼付	関山I
図57 7	B区B表土	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 8	B区N22Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 9	B区N22Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 10	B区A12	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 11	B区E20Ⅲ上	深鉢	無繊維	褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 12	B区D20Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 13	B区M21	深鉢	無繊維	褐色	胴部	東の縄文、末端を縛る	神ノ木
図57 14	B区A20	深鉢	含繊維	褐色	胴部	櫛状工具を縦位に施文	有尾系
図57 15	B区B表土	深鉢	含繊維	褐色	口縁部	櫛状工具と平行沈線による横位施文	有尾系
図57 16	B区D22Ⅲ上	深鉢	含繊維	褐色	口縁部	櫛状工具と平行沈線による横位施文	有尾系
図57 17	B区O19	深鉢	含繊維	褐色	口唇部	櫛状工具による縦位の施文、粘土による隆帯	前期前半
図57 18	B区K25	深鉢	含繊維	明褐色	胴部	木目状漆糸文	前期前半
図57 19	B区B20Ⅲ上	深鉢	無繊維	黄褐色	口唇部	斜行する平行沈線、粘土層を波状に貼付	大木5
図57 20	B区E21Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	単筋LR斜行縄文、粘土層を波状に貼付	大木5
図57 21	B区E20Ⅲ上	深鉢	無繊維	黄褐色	口唇部	平行沈線、波状口縁になる	諸磯b
図57 22	B区N21、23	浅鉢	無繊維	褐色	口唇部	連続爪形文を横位施文、地文0段多糸単筋RL	諸磯a
図57 23	A区V17	深鉢	無繊維	明褐色	口唇部	平行沈線による鈔骨文	諸磯a
図57 24	B区O1Ⅲ	深鉢	無繊維	明褐色	口唇部	連続爪形文と平行沈線、円形刺突	諸磯a
図57 25	B区D22Ⅲ上	深鉢	無繊維	明赤褐色	胴部	連続爪形文と下円形刺突、地文0段多糸単筋RL	諸磯a
図57 26	B区D20Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	口唇部	連続爪形文と平行沈線	諸磯a
図57 27	B区D20Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	口唇部	連続爪形文と平行沈線	諸磯a
図57 28	A区Ⅲ上	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	平行沈線による唇目文様	諸磯a
図57 29	B区E22	深鉢	無繊維	浅黄褐色	胴部	平行沈線による渦巻き文	諸磯b
図57 30	表土	深鉢	無繊維	暗褐色	胴部	平行沈線による波状文	諸磯b
図57 31	A区A L-12	深鉢	無繊維	明赤褐色	胴部	横位の集合沈線、土製円筒に転用か?	諸磯c
図57 32	A区A S-15	深鉢	無繊維	明赤褐色	胴部	平行沈線による入り組み文様、沈線内同尺	諸磯b
図57 33	B区J 25	深鉢	無繊維	褐色	胴部	木目状漆糸文	前期後半
図57 34	A区R16Ⅲ下	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	単筋LR斜行縄文にボタン状貼付	諸磯c
図57 35	AZUMIKY19	深鉢	無繊維	明褐色	胴部	矢羽根状の集合沈線、ボタン状貼付	諸磯c
図57 36	B区B20	有孔浅鉢	無繊維	明赤褐色	胴部	無文、表面研磨	諸磯b

表11 縄文時代の石器観察表

番 号	出土位置	器 形	胎 土	色 調	遺存状況	特 徴 (縄文・文様・口唇部・底部等)	型 式
図57 37	B区 I 24埋土	深鉢	無織維	にぶい橙	胴部	横方向の矢羽根集合沈線	溝織c
図57 38	B区 D22	深鉢	無織維	にぶい橙	胴部	連続爪形文で渦巻き状に施文	溝織c
図57 39	B区 E 22埋土	深鉢	無織維	にぶい橙	胴部	単筋R Lの斜行縄文にボタン状貼付	溝織c
図57 40	B区 D23	深鉢	無織維	にぶい橙	口唇部	貝殻波状文	浮島II
図57 41	B区 P 24	深鉢	無織維	明赤褐	胴部	縦文に燕糸	加曾利EIII
図57 42	B区 I 24	深鉢	無織維	浅黄橙	口縁部	渦巻き状の文様を隆帯で施文	加曾利EIII
図57 43	表土置場	深鉢	無織維	黄橙	口唇部	渦巻き状の結節浮線。地文単筋LR	十三番提
図57 44	B区表土	深鉢	無織維	浅黄橙	胴部	沈線直下。間に不明瞭ながらLRの縄文	堀之内II
図57 45	B区 F 20	深鉢	無織維	浅黄橙	胴部	沈線で格子目に描く	加曾利BII

表11 縄文時代の石器観察表 (長さ・幅・厚さの単位はcm、重量の単位はg)

5号住居跡

図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
10-11	5住居土上位	罎器	黒色頁岩	6.9	4.2	1.4	41.05	37	5住居土	指環	黒色頁岩	5.7	9.6	1.9	107.05
32	5住居土上位	罎器	黒色頁岩	8.7	5.6	1.7	84.23	38	5住居土上位	石核	黒色頁岩	9.8	7.1	5.1	350.00
33	5住居土上位	襷形石器	チャート	1.8	1.7	0.8	2.20	39	5住居土上位	割片	黒色頁岩	5.3	4.7	1.8	26.43
34	5住居土	襷形石器	チャート	1.6	1.6	0.6	1.02	40	5住居土上位	磨石	鵜股安山岩	7.5	8.9	4.5	410.00
35	5住居土	打製石片	黒色頁岩	8.0	5.6	1.8	69.86	41	5住居土上位	凹石	鵜股安山岩	13.4	9.8	2.4	690.00
36	5住居土	磨器	黒色頁岩	10.1	13.2	1.2	250.00	42	5住居土上位	凹石	鵜股安山岩	10.7	7.5	3.2	340.00

8号住居跡

図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
15-44	8住居土	石鏡	黒色頁岩	3.2	1.6	0.6	2.84	60	8住居土	石鏡	黒色頁岩	5.5	4.8	1.0	23.80
46	8住居土	石鏡	チャート	2.4	1.9	0.4	0.77	61	8住居土	石鏡	黒色頁岩	7.4	5.6	1.2	53.43
47	8住居土	石鏡	黒曜石	1.7	0.9	0.3	0.31	62	8住居土	磨器	黒色頁岩	6.3	5.7	1.2	51.42
48	8住居土	石鏡	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.33	19-83	8住居土下位	石核	黒色頁岩	9.0	12.9	6.9	810.00
49	8住居土	石鏡	黒色頁岩	1.9	2.0	0.4	1.27	94	8住居土	割片	黒色安山岩	2.7	5.9	1.0	8.26
48	8住居土	石鏡	チャート	3.0	1.6	0.8	2.36	65	8住居土	割片	黒色安山岩	1.9	1.6	0.4	0.88
50	8住居土	石鏡	チャート	3.5	1.2	0.6	1.77	66	8住居土	襷形石器	黒色頁岩	2.2	1.0	0.8	1.03
51	8住居土下位	石鏡	黒色頁岩	6.7	3.6	0.7	13.18	67	8住居土	チャート	1.8	1.2	0.7	1.19	
52	8住居土下位	石鏡	黒色頁岩	8.3	3.0	1.4	27.47	68	8住居土	襷形石器	チャート	2.1	2.0	1.1	2.38
53	8住居土	石鏡	黒色頁岩	7.5	3.8	1.4	27.73	69	8住居土上位	磨石	安賣女武岩	17.2	10.5	6.9	3830.00
54	8住居土	石鏡	安賣女武岩	5.9	2.9	1.1	11.19	70	8住居土	割片	安賣女武岩	2.5	1.9	0.3	2.12
55	8住居土	石鏡	黒色頁岩	2.8	3.7	0.7	6.52	71	8住居土	凹石	鵜股安山岩	10.8	7.4	5.6	610.00
56	8住居土下位	石鏡	埴貫頁岩	2.6	3.2	0.9	4.77	72	8住居土	磨石	鵜股安山岩	12.3	8.6	4.4	689.00
57	8住居土	石鏡	チャート	3.8	4.0	0.9	9.53	73	8住居土下位	磨石	鵜股安山岩	12.2	8.9	4.2	665.00
58	8住居土	石鏡	黒色頁岩	5.5	5.7	0.9	23.48	74	8住居土上位	磨石	鵜股安山岩	11.9	9.5	3.5	565.00
59	8住居土	石鏡	黒色頁岩	5.9	4.8	1.5	34.49								

1号住居跡

図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
23-27	1住居面直上	割片	黒色頁岩	5.2	5.2	1.3	28.79	31	1住居土上位	凹石	チャート	15.3	7.5	3.6	599.00
28	1住居土	割片	黒色頁岩	4.9	6.2	1.1	36.53	32	1住居土下位	磨石	石炭燐岩	14.3	8.4	4.4	820.00
29	1住居土	石核	黒色頁岩	6.3	4.7	2.4	62.28	33	1住居土上位	磨石	鵜股安山岩	16.8	9.2	3.2	1163.00
30	1住居土	磨器	黒色頁岩	7.0	7.2	1.5	69.59	34	1住居面直上	大形磨石	石炭燐岩	31.4	26.0	8.4	10100

3号住居跡

図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
29-13	3住居土上位	磨器	黒色頁岩	3.5	4.6	0.8	9.95	17	3住居土上位	磨器	黒色頁岩	12.3	11.0	3.8	320.00
14	3住居土上位	石鏡	黒色頁岩	4.4	6.1	0.7	15.97	18	3住居土上位	磨器	黒色頁岩	7.4	10.5	2.7	163.65
15	3住居土上位	磨製石片	安賣女武岩	15.0	5.3	3.9	420.00	19	3住居土下位	石核	黒色頁岩	15.2	4.7	3.2	193.00
16	3住居土	打製石片	黒色頁岩	8.7	2.4	2.1	79.26	20	3住居土下位	磨石	鵜股安山岩	13.5	9.8	4.1	820.00

2号住居跡

図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量	図番号	出土位置	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重量
33	2号炉石	石皿	鵜股安山岩	18.3	26.6	9.0	5425.00	53	B区 D22埋土	石核	埴貫頁岩	6.0	5.0	4.2	115.33
35	2住居土	石鏡	黒色頁岩	4.5	5.7	1.4	22.26	54	2住居土	割片	埴貫頁岩	2.2	2.0	0.4	3.19
49	2住居土	石鏡	黒色頁岩	2.0	1.8	0.4	1.28	55	2住居土上位	割片	黒色頁岩	11.1	11.9	3.0	208.65
2	2住居土	襷形石器	埴貫頁岩	2.7	2.2	0.8	5.93	56	2住居面直上	石皿	鵜股安山岩	14.9	23.3	5.3	2440.00
51	2住居土	打製石片	黒色頁岩	5.6	5.5	2.4	76.86	57	2住居土下位	磨石	鵜股安山岩	10.4	8.0	4.5	560.00
52	2住居土下位	磨器	黒色頁岩	7.8	6.8	2.4	123.82	58	2住居土下位	凹石	鵜股安山岩	7.1	5.9	2.9	182.97

表11 縄文時代の石器観察表

6号住居跡

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
20-19	6住居土下位	打製石斧	黒色頁岩	11.9	5.4	1.4	87.42
20	6住居土下位	石核	黒色頁岩	10.8	9.9	3.6	790.00
21	6住居土中位	使用痕のある剥片	黒色頁岩	4.5	6.9	2.0	29.67
22	6住居土下位	使用痕のある剥片	黒色頁岩	4.5	6.5	1.2	37.73
23	6住居土下位	剥片	黒色頁岩	4.7	9.6	1.1	41.38

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
24	6住居土中位	礫石	鵜飼安山岩	9.8	8.3	4.7	560.00
25	6住居土中位	礫石	鵜飼安山岩	9.8	8.0	5.3	580.00
26	6住居土下位	大形礫石	鵜飼安山岩	36.3	28.8	10.6	15047
27	6住居土下位	台石	鵜飼安山岩	32.8	24.2	7.9	7225.0

4号住居跡

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
41-14	4住居土	剥片	黒色頁岩	5.1	2.3	0.8	8.85
15	4住居土	剥片	黒色頁岩	3.8	3.6	1.5	18.48
16	4住居土	剥片	黒色頁岩	8.6	7.6	1.7	71.76
17	4住居土	礫石	黒色頁岩	7.8	3.0	2.7	79.68

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
18	4住居直面上	凹石	鵜飼安山岩	11.9	11.9	5.3	1110.0
19	4住居直面上	礫石	砂岩	7.0	5.4	2.3	132.84
20	4住居直面上	大形礫石	石灰質緑岩	35.5	26.5	13.0	18950

7号住居跡

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
45-14	7住居直面上	打製石斧	鵜飼安山岩	20.1	9.6	3.0	480.00
15	7住居直面上	使用痕のある剥片	黒色頁岩	7.7	5.3	0.6	33.75
16	7住居直面上	使用痕のある剥片	黒色頁岩	5.1	7.2	1.7	53.21
17	7住居直面上	使用痕のある剥片	黒色頁岩	4.1	4.5	1.1	14.31
18	7住居直面上	使用痕のある剥片	黒色頁岩	7.7	9.2	2.0	74.73
19	7住居土	剥片	鵜飼安山岩	4.1	4.5	0.8	14.45

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
20	7住居土	削器	鵜飼安山岩	3.0	6.8	0.9	24.89
21	7住居直面上	削器	黒色頁岩	6.5	9.6	2.3	133.15
22	7住居直面上	使用痕のある剥片	黒色頁岩	12.9	12.6	3.2	570.00
23	7住居直面上	礫石	安曇安山岩	14.7	8.1	3.9	598.00
24	7住居直面上	凹石	閃緑岩	10.5	8.1	2.4	325.00

土坑・溝出土石器

図番号	遺物番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
49	35土坑1	使用痕のある剥片	黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.45
	35土坑2	剥片	黒色頁岩	3.5	1.8	1.2	4.54
	36土坑3	使用痕のある剥片	チャート	2.8	4.1	0.9	10.45
	36土坑4	剥片	黒色頁岩	4.5	5.5	1.2	26.54
	36土坑5	剥片	黒色頁岩	8.7	9.8	2.8	173.45
	36土坑6	大形礫石	鵜飼安山岩	31.8	25.2	8.3	9600.0
	37土坑7	剥片	黒色頁岩	4.7	3.3	1.0	18.30
	38土坑4	剥片	黒色頁岩	7.7	6.9	1.0	55.15
	38土坑5	剥片	黒色頁岩	4.7	1.4	0.6	2.93
	39土坑3	使用痕のある剥片	黒色頁岩	4.9	6.1	0.9	28.14
50	49土坑1	磨器	黒色頁岩	8.1	5.4	1.8	51.53
	49土坑2	使用痕のある剥片	黒色頁岩	5.1	5.0	0.9	18.21
	41土坑8	石鏝	黒色頁岩	3.3	1.9	0.4	1.89
	41土坑9	剥片	黒色頁岩	11.8	16.6	9.5	1903.0
	41土坑10	剥片	黒色頁岩	4.5	4.7	1.2	15.62
	41土坑11	石核	黒色頁岩	6.8	5.6	2.5	104.25
	43土坑10	石鏝	チャート	2.1	1.4	0.2	0.43
	43土坑11	剥片	黒色頁岩	5.1	7.7	1.8	56.04
	43土坑12	磨器	黒色頁岩	5.5	8.7	1.7	62.69
	44土坑11	石鏝	陸奥安曇岩	1.7	1.1	0.3	0.45
51	44土坑12	磨器	黒色頁岩	6.7	4.6	1.8	35.74
	44土坑13	剥片	黒色頁岩	10.1	6.9	2.2	127.46
	44土坑14	凹石	鵜飼安山岩	7.0	5.9	4.6	274.80
	44土坑15	(伊石)	石灰質緑岩	40.0	26.6	7.0	13050
	44土坑16	大形礫石	鵜飼安山岩	21.2	14.9	5.5	2712.0
	45土坑13	石核	砂岩・頁岩	2.0	8.6	4.4	66.24
	45土坑9	剥片	砂岩・頁岩	2.8	5.1	0.9	12.44
	45土坑10	剥片	砂岩・頁岩	4.7	2.8	2.0	23.72
	45土坑11	剥片	頁岩	1.2	1.7	0.2	0.41
	45土坑12	剥片	頁岩	1.3	2.0	0.1	0.12
53	45土坑13	剥片	頁岩	1.1	2.0	0.3	0.35
	45土坑14	剥片	頁岩	1.4	1.5	0.2	0.38

図番号	遺物番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
54	45土坑15	剥片	頁岩	1.3	1.5	0.3	0.53
	45土坑16	剥片	頁岩	2.1	1.6	0.5	1.37
	45土坑17	剥片	頁岩	1.0	1.4	0.2	0.36
	45土坑18	剥片	頁岩	1.0	1.4	0.2	0.36
	45土坑19	剥片	頁岩	1.2	1.6	0.3	0.52
	45土坑20	剥片	頁岩	1.8	1.4	0.3	0.52
	45土坑21	剥片	頁岩	1.3	1.5	0.3	0.45
	45土坑22	剥片	頁岩	0.7	1.4	0.2	0.20
	45土坑23	剥片	黒色頁岩	4.4	2.8	1.0	11.65
	45土坑24	剥片	黒色頁岩	7.2	5.1	1.3	25.76
	48土坑7	剥片	黒色頁岩	2.1	2.7	0.5	1.56
	48土坑8	剥片	黒色頁岩	4.8	8.7	1.1	32.36
	48土坑9	剥片	黒色頁岩	8.4	2.5	1.5	29.30
	51土坑8	使用痕のある剥片	黒色頁岩	9.5	6.3	2.0	99.46
	51土坑9	礫石	鵜飼安山岩	11.2	8.5	3.0	372.00
	54土坑3	剥片	黒色頁岩	7.1	5.6	1.5	40.02
	54土坑4	剥片	黒色頁岩	4.8	7.9	1.0	29.99
	54土坑5	多孔石	鵜飼安山岩	6.1	8.0	8.3	448.00
	55土坑9	石鏝未製品	珪質頁岩	3.2	1.8	0.6	3.80
	55土坑10	礫石	鵜飼安山岩	12.2	11.2	5.3	1094.0
56土坑9	磨器	黒色頁岩	4.6	7.8	1.4	38.99	
56土坑10	剥片	珪質頁岩	6.4	7.1	2.7	108.94	
56土坑11	楔形石鏝	珪質頁岩	2.5	1.4	0.5	2.24	
56土坑12	礫石	黒色頁岩	13.9	5.1	3.9	357.00	
56	2溝14	石鏝	珪質頁岩	3.2	1.8	0.3	1.51
	2溝15	石鏝	鵜飼安山岩	2.3	1.7	0.4	1.22
	2溝16	石鏝	黒色頁岩	4.0	4.1	0.8	7.31
	2溝17	楔形石鏝	珪質頁岩	2.3	2.3	0.8	3.69
	2溝18	剥片	黒色頁岩	4.4	3.7	1.4	28.04
	2溝19	磨器	黒色頁岩	5.7	7.0	1.0	41.04
	2溝20	凹石	鵜飼安山岩	11.8	9.0	4.1	573.00

遺構外出土石器

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
58-1	BGM21溝上	石鏝	黒色頁岩	3.7	2.4	0.4	2.71
2	BGM21	チャート	2.1	2.0	0.4	1.67	
3	BGM22	石鏝	黒色頁岩	3.2	1.5	0.3	0.68

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
4	29号埋土	石鏝	チャート	2.1	1.6	0.4	1.04
5	奥探	石鏝	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.38
6	BGM21溝上	石鏝	黒曜石	1.4	1.4	0.2	0.27

表11 縄文時代の石器観察表

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
7	B区	石鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.44
8	表採	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.43
9	B J27W上	石鏃	武蔵岩質緑閃石	2.4	1.5	0.5	1.06
10	B D21	石鏃	黒色安山岩	2.5	1.7	0.3	1.16
11	B I12	石鏃	黒色頁岩	1.7	1.6	0.4	1.19
12	B K27W下	石鏃	チャート	1.9	1.5	0.4	1.27
13	表採	石鏃	黒色安山岩	2.4	1.9	0.8	4.93
14	B K27W上	石鏃	黒曜石	3.4	1.6	0.4	1.70
15	A S15	石鏃	黒曜石	2.9	1.4	0.3	1.10
16	AV16	石鏃	珪質頁岩	4.8	3.2	0.7	7.23
17	28号埋土	石鏃	黒色頁岩	8.9	4.8	1.7	60.12
18	B U23	石鏃	黒色頁岩	8.4	3.5	1.8	28.26
19	開墾地	石鏃	黒色頁岩	8.9	3.7	1.2	43.94
20	表採	石鏃	黒色頁岩	3.1	3.7	0.4	4.81
21	表採	石鏃	黒色頁岩	5.7	7.0	1.2	40.19
22	A X17W	石鏃	黒色頁岩	5.4	5.3	1.3	37.10
23	表採	石鏃	黒色頁岩	3.7	4.8	0.8	10.31
24	B O23	石鏃	黒色頁岩	4.4	4.8	1.3	27.07
25	B区	磨盤	黒色頁岩	7.5	6.0	2.4	106.95
59-26	1号埋土	磨盤石片	実ハンレイ岩	11.5	7.6	3.6	420.00
27	B I20W	磨盤石片	変質蛇紋岩	8.3	6.4	2.7	220.00
28	B U23W上	打製石斧	ホルンフェルス	9.5	8.0	2.0	156.38
29	B区	打製石斧	黒色頁岩	9.8	5.0	2.3	93.69
30	B区	打製石斧	黒色頁岩	8.7	3.3	1.7	43.45
31	B区	打製石斧	灰色安山岩	10.1	5.5	1.7	109.59
32	B J27W上	打製石斧	黒色頁岩	11.1	4.9	1.3	91.22
33	B A18	打製石斧	黒色頁岩	10.9	4.8	1.5	72.46
34	A S16	打製石斧	黒色頁岩	8.6	5.3	1.9	87.42
35	B区	打製石斧	黒色頁岩	7.2	5.4	2.2	75.03

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
36	B M20	打製石斧	黒色頁岩	6.2	5.1	1.4	50.65
37	B C21	打製石斧	黒色頁岩	3.7	3.2	0.8	10.77
38	B F21W上	製形石鏃	チャート	3.5	2.0	1.7	12.02
39	B I27W上	製形石鏃	珪質頁岩	2.3	2.3	0.7	3.99
40	B E19	製形石鏃	チャート	2.3	2.6	0.9	5.32
60-41	4号埋土	使用痕のある刺片	黒色頁岩	6.8	6.8	1.8	53.90
42	5号埋土	削器	黒色頁岩	7.3	4.9	1.2	42.81
43	5号埋土	削器	黒色頁岩	5.4	8.4	1.2	56.76
44	B K21W上	削器	黒色頁岩	5.4	7.9	1.7	64.95
45	A Q16	削器	黒色頁岩	5.3	4.0	0.7	16.41
46	B I22	使用痕のある刺片	珪質頁岩	2.6	1.3	0.5	2.14
47	C J00	使用痕のある刺片	チャート	2.4	1.4	1.7	2.22
48	B D21	石核	黒色頁岩	7.8	6.2	1.4	73.65
49	B B20W上	石核	黒色頁岩	8.6	6.9	2.0	136.61
50	A P15W下	石核	黒色頁岩	5.5	4.3	2.7	66.91
51	B K20W下	鉾石	粗粒安山岩	12.0	5.5	3.0	328.00
52	3号埋土	スタンプ型石鏃	黒色頁岩	10.9	4.8	2.4	218.00
53	B D22W上	鉾石	閃緑岩	6.9	2.1	2.6	200.30
54	B N22W上	鉾石	黒曜石緑岩	4.6	2.4	1.8	19.74
55	A V17W上	鉾石	黒曜石緑岩	3.7	2.6	1.4	13.27
56	B H22W上	鉾石	ひんレイ(?)	0.8	1.1	0.8	136.00
61-57	B I20W上	凹石	石質閃緑岩	9.4	6.4	3.7	230.00
58	B D22W上	凹石	粗粒安山岩	11.3	10.0	5.2	710.00
59	B C23	磨石	粗粒安山岩	8.1	6.6	4.2	330.00
60	C K00W上	凹石	粗粒安山岩	11.8	7.6	3.7	520.00
61	C M02W上	凹石	粗粒安山岩	12.1	8.5	4.3	610.00
62	表採	燧石	ひんレイ	17.8	5.9	5.8	960.00
63	B G22W上	石鏃	粗粒安山岩	8.7	12.5	6.8	480.00

8号住居跡出土石器組合資料

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
72-1	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	2.7	3.4	0.9	8.31
2	B区L22	剥片	黒色頁岩	7.4	3.4	2.1	43.75
73-3	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	3.1	2.3	0.5	4.98
4	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	6.4	5.4	1.2	37.04
5	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	4.9	2.5	1.1	11.06
6	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	2.6	2.2	0.5	2.58
7	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	3.6	4.8	1.0	19.69
8	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	2.6	2.3	0.4	1.57
9	埋土中位	剥片	黒色頁岩	4.0	7.3	1.8	23.37
10	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	6.9	8.0	1.4	74.43
11	埋土	剥片	黒色頁岩	2.8	5.6	1.6	29.56
12	埋土南西部	石核	黒色頁岩	6.4	11.1	2.6	126.14
13	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	2.5	2.9	0.6	4.43
14	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	4.4	2.3	1.0	7.40

図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量
15	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	2.0	2.7	0.6	2.87
16	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	3.9	3.8	1.3	22.93
17	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	5.0	3.4	0.5	8.54
18	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	1.8	3.5	0.3	1.52
19	埋土	剥片	黒色頁岩	2.5	3.3	0.5	3.32
20	埋土中位	剥片	黒色頁岩	5.9	8.8	1.2	75.20
21	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	1.7	4.8	0.6	3.75
22	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	1.7	2.4	0.5	1.23
23	埋土	剥片	黒色頁岩	2.3	4.9	0.5	3.58
24	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	4.1	5.0	1.4	26.49
25	埋土南西部	剥片	黒色頁岩	5.5	6.7	1.6	56.56
26	B区L27W上	剥片	黒色頁岩	2.5	3.2	1.6	10.35
27	埋土中位	石核	黒色頁岩	7.3	7.7	9.0	535.80

補遺

割り付けの関係により、本文中で省略した部分を補充しておきたい。

5号住居跡埋土出土石器の内訳

黒色頁岩製の打製石斧2点、黒色頁岩製の磨盤(石鏃)1点、チャート製2点、黒曜石製1点の製形石鏃、黒色頁岩製の削器7点、粗粒安山岩製の凹石4点、粗粒安山岩製5点、黒色頁岩製1点の磨石、黒色頁岩製5点、チャート製1点、チャート製1点の石核、黒色頁岩製の二次加工のある刺片3点、黒色頁岩製14点、珪質頁岩・粗粒安山岩・チャート製・黒曜石製各1点の使用痕のある刺片、黒色頁岩製114点、頁岩・チャート製各4点、黒曜石・ホルンフェルス製各3点、砂岩製2点、黒色安山岩・実質玄武岩製各1点の剥片・砕片133点

8号住居跡埋土出土石器の石材

石鏃は黒色頁岩製2点、黒曜石製2点、チャート製1点、石鏃はチャート製2点、石鏃は黒色頁岩製9点、珪質頁岩・チャート製各1点、製形石鏃はチャート製3点、黒色頁岩製1点、削器は黒色頁岩製21点、チャート製3点、凹石は粗粒安山岩製4点、実質安山岩製1点、磨石は粗粒安山岩製4点、蛇紋岩・ひんレイ製各1点、石核は黒色頁岩石核11点、黒曜石製2点、灰色安山岩・輝緑岩・チャート製各1点、二次加工の剥片は黒色頁岩製34点、チャート製2点、使用痕のある刺片は黒色頁岩製29点、チャート製23点、点紋頁岩・実質安山岩・粗粒安山岩・黒曜石製各1点、剥片・砕片は黒色頁岩製282点、チャート製30点、黒色安山岩・粗粒安山岩各7点、灰色安山岩・粗粒安山岩・黒曜石各4点、砂岩3点、頁岩・実質安山岩・実質玄武岩各2点、珪質頁岩1点

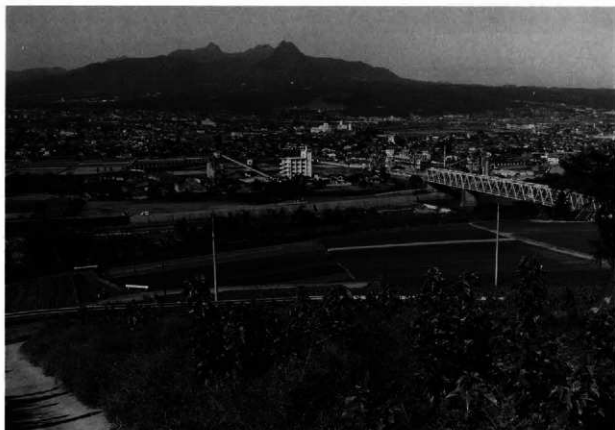
图 版



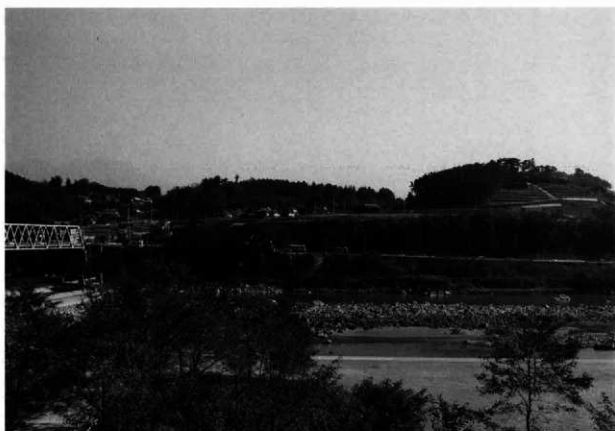
1 地籍図(壬申地券地引繪圖・第三大区小七区勢多郡下箱田村 群馬県立文書館蔵)



2 調査区上航空写真(1964年5月17日建設省国土地理院撮影)



1 調査区遠景(東方・城山より)



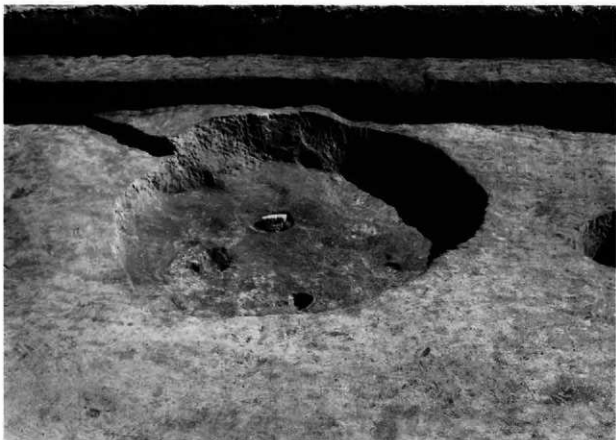
2 調査区遠景(西方・利根川対岸より)



1 調査区全景(縄文時代・上空より)



2 調査区全景(中世以降・上空より)



1 5号住居跡全景(西より)



2 5号住居跡埋土断面(西より)



3 5号住居跡埋土断面(南より)



4 5号住居跡遺物出土状況(西より)



5 5号住居跡掘り方全景(西より)



1 8号住居跡全景(西より)



2 8号住居跡埋土断面(南より)



3 8号住居跡遺物出土状態(西より)



4 号住居跡炉(南より)



5 8号住居跡掘り方全景(西より)



1 1号住居跡全景(東より)



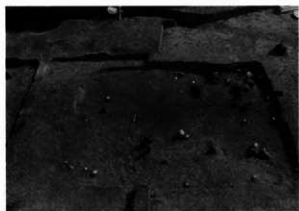
2 1号住居跡遺物出土状態(東より)



3 1号住居跡掘り方全景(東より)



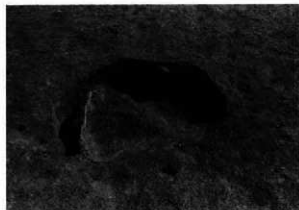
1 3号住居跡全景(東より)



2 3号住居跡遺物出土状況(西より)



3 3号住居跡遺物出土状況(部分・北より)



4 3号住居跡炉(西より)



5 3号住居跡掘り方(西より)



1 2号住居跡全景(東より)



2 2号住居跡埋土断面(東より)



3 2号住居跡遺物出土状況(東より)



4 2号住居跡炉(東より)



5 2号住居跡掘り方全景(西より)



1 6号住居跡全景(北より)



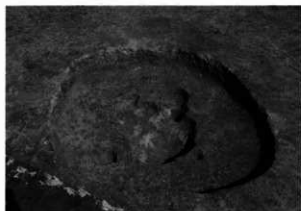
2 6号住居跡埋土断面(南より)



3 6号住居跡埋土断面(東より)



4 6号住居跡遺物出土状況(東より)



5 6号住居跡廻り方全景(南より)



1 4号住居跡全景(西より)



2 4号住居跡遺物出土状況(西より)



3 4号住居廻り方全景(西より)



1 7号住居跡全景(東より)



2 7号住居跡遺物出土状況(西より)



3 7号住居跡遺物出土状況(北より)



4 7号住居跡罎(東より)



5 7号住居跡掘り方全景(北西より)



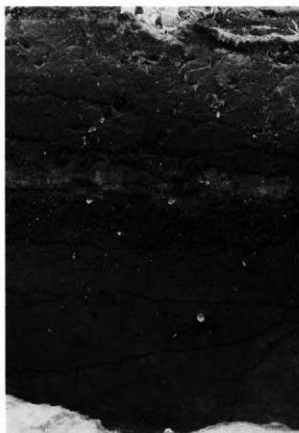
1 2号溝全景(南より)



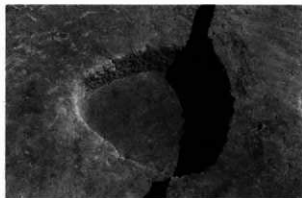
2 2号溝全景(北より)



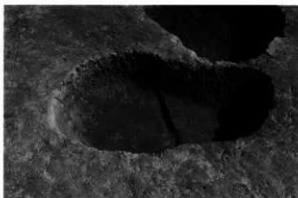
3 2号溝遺物出土状況(北より)



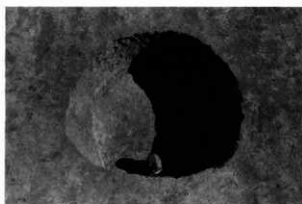
4 2号溝埋土・覆土(南端部・北より)



1 33号土坑全景



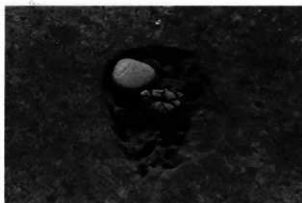
2 34号土坑全景



3 35号土坑遺物出土状况



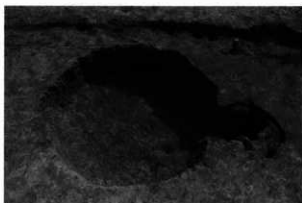
4 35号土坑全景



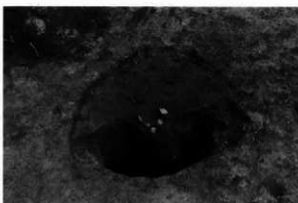
5 36号土坑遺物出土状况



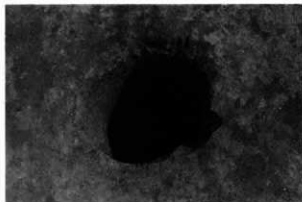
6 36号土坑全景



7 37号土坑全景



8 38号土坑遺物出土状况



1 38号土坑全景



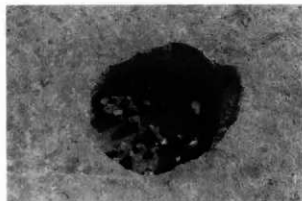
2 39号土坑遗物出土状况



3 39号土坑全景



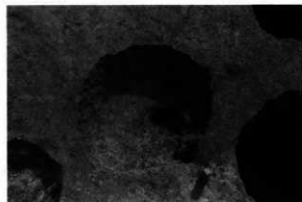
4 40号土坑全景



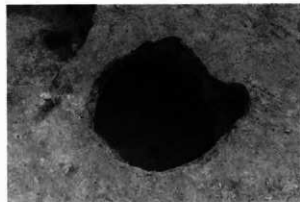
5 41号土坑遗物出土状况



6 41号土坑全景



7 42号土坑全景



8 43号土坑全景



1 44号土坑遺物出土状况(上部)



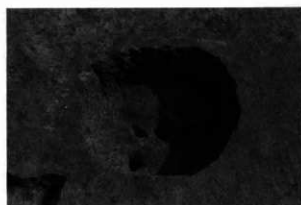
2 44号土坑遺物出土状况(下部)



3 44号土坑全景



4 45号土坑遺物出土状况



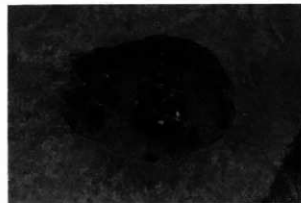
5 45号土坑全景



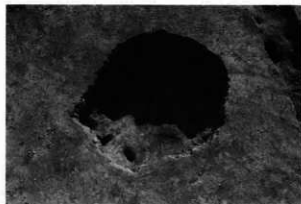
6 46号土坑全景



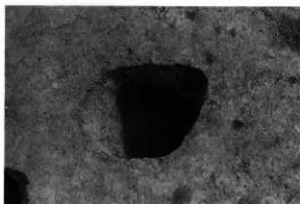
7 47号土坑全景



8 48号土坑遺物出土状况



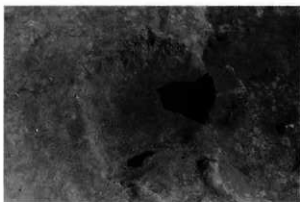
1 48号土坑全景



2 49号土坑全景



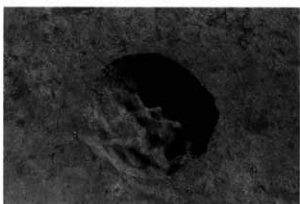
3 50号土坑全景



4 51号土坑全景



5 52号土坑全景



6 53号土坑全景



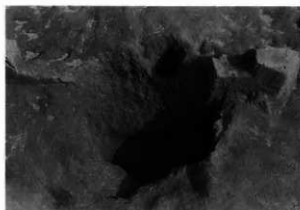
7 54号土坑遗物出土状况



8 54号土坑全景



1 55号土坑遺物出土状況



2 55号土坑全景



3 56号土坑遺物出土状況



4 56号土坑全景



5 1号溝全景(上空より)



1 1号溝全景(溝底に工具痕・南より)



2 1号溝全景(北より)



3 1号溝埋土断面(南より)



4 1号溝遺物出土状況(北より)



1 3号溝全景(北より)



2 4号溝・6号溝全景(南西より)



3 5号溝全景(南西より)



4 7号溝・8号溝全景(北より)



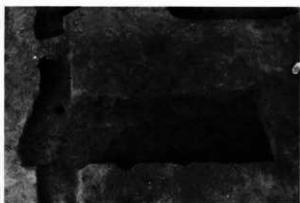
1 1号土坑全景



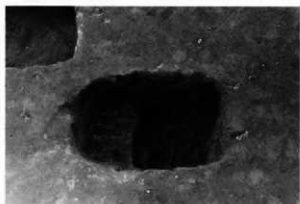
2 2号土坑全景



3 3号土坑全景



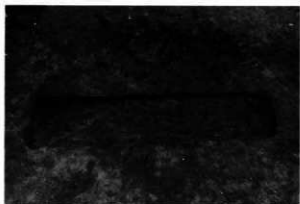
4 4号土坑全景



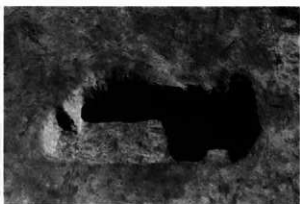
5 5号土坑全景



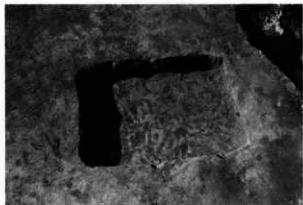
6 6号土坑全景



7 7号土坑全景



8 8号土坑·20号土坑全景



1 9号土坑全景



2 10号土坑全景



3 11号土坑全景



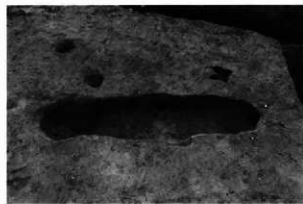
4 12号土坑全景



5 13号土坑全景



6 14号土坑全景



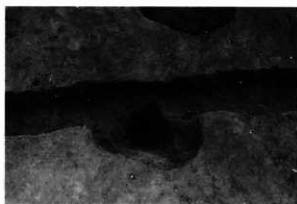
7 15号土坑全景



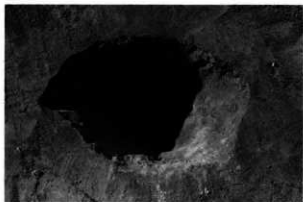
8 16号土坑全景



1 17号土坑(右)·18号土坑(左)全景



2 19号土坑全景



3 21号土坑全景



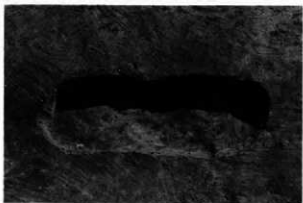
4 22号土坑全景



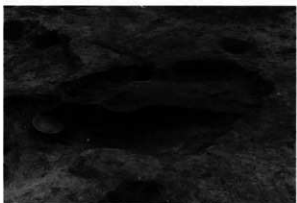
5 23号土坑·24号土坑·25号土坑全景



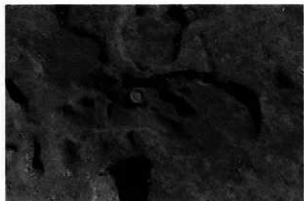
6 26号土坑全景



7 27号土坑全景



8 28号土坑埋土断面



1 28号土坑遺物出土狀況



2 28号土坑全景



3 29号土坑人骨出土狀況



4 29号土坑1号人骨出土狀況



5 29号土坑2号人骨出土狀況



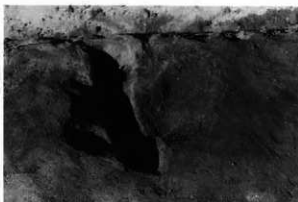
6 29号土坑1号人骨頭部



7 29号土坑調查風景



1 30号土坑全景



2 31号土坑全景



3 32号土坑全景



4 1号櫛列(右)と2号櫛列(左)



5 2号櫛列



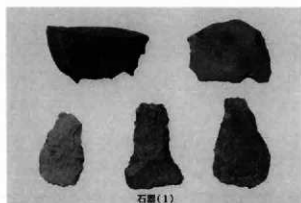
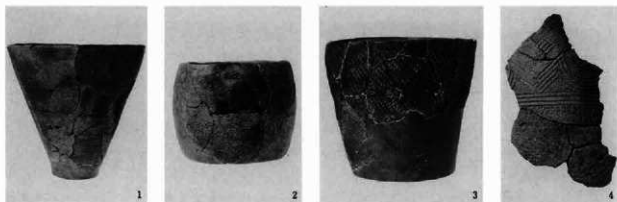
6 ひすい(?)製玉出土状況



7 旧石器試験坑断面



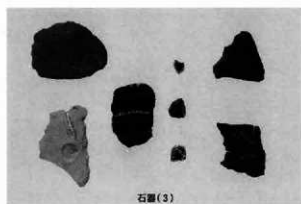
8 調査風景(西に安全柵・北に防塵ネット)



石罍(1)



石罍(2)

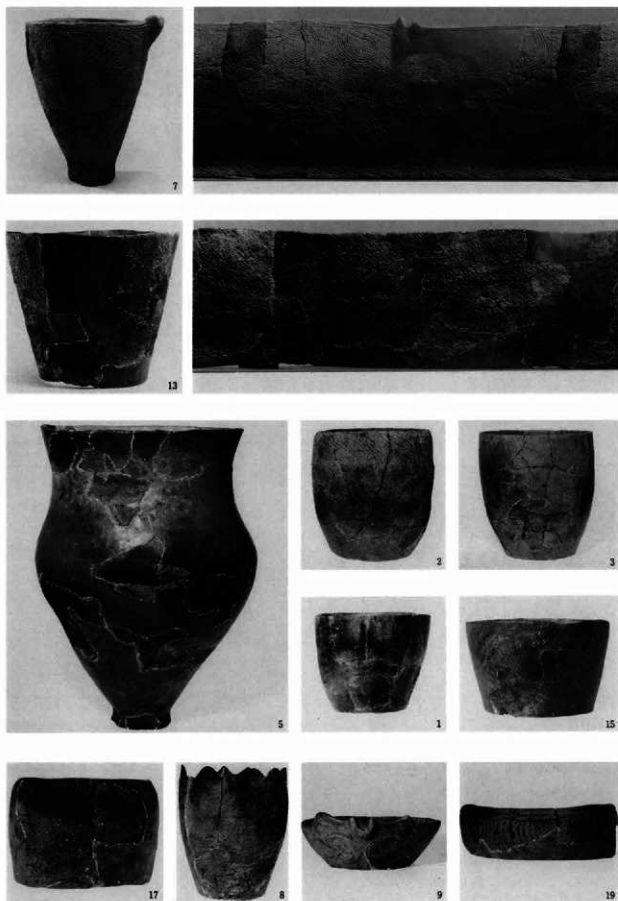


石罍(3)

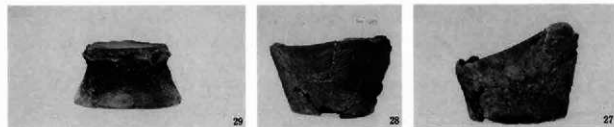
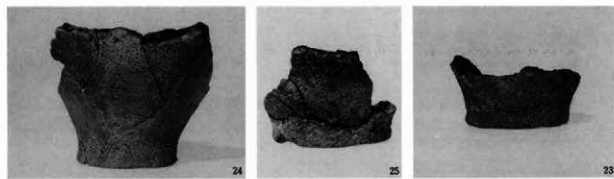
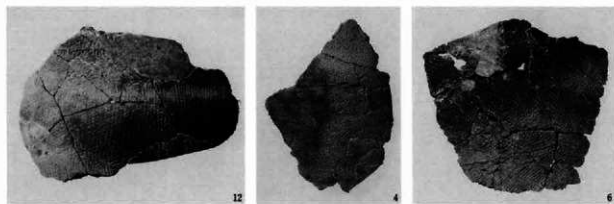
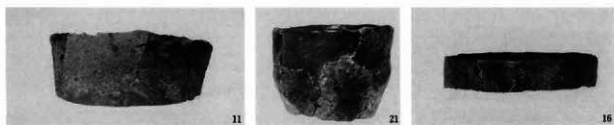
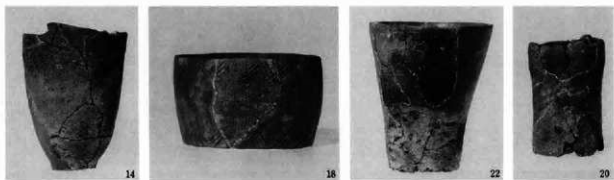


石罍(4)

5号住居跡出土遺物



8号住居跡出土土器(1)



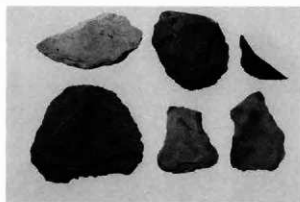
8号住居跡出土土器(2)



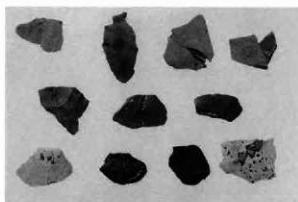
1 8号住居跡出土石器(1)



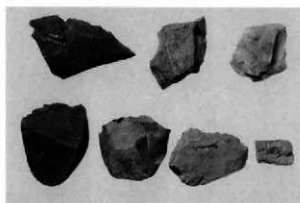
2 8号住居跡出土石器(2)



3 8号住居跡出土石器(3)



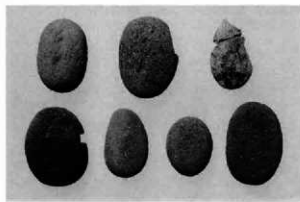
4 8号住居跡出土石器(4)



5 8号住居跡出土石器(5)



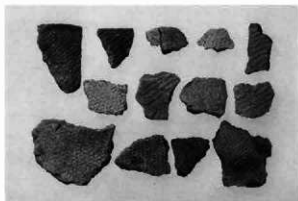
6 8号住居跡出土石器(6)



7 8号住居跡出土石器(7)



8 8号住居跡出土炭化物



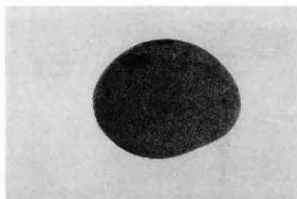
1 1号住居跡出土石器



2 1号住居跡出土石器



3 1号住居跡出土石器



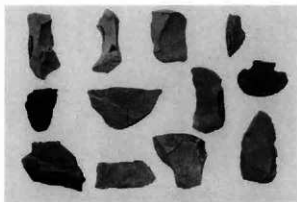
4 1号住居跡出土石器



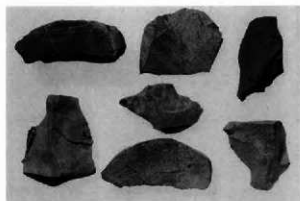
5 3号住居跡出土石器



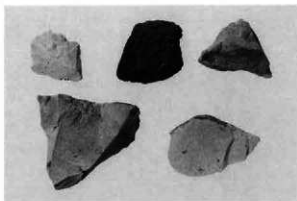
1 3号住居跡出土石器(1)



2 3号住居跡出土石器(2)



3 3号住居跡出土石器(3)



4 3号住居跡出土石器(4)



5 2号住居跡出土土器(1)

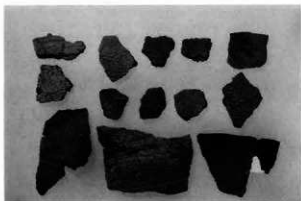


6 2号住居跡出土土器(2)

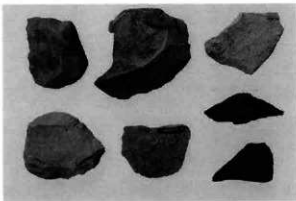


5

6



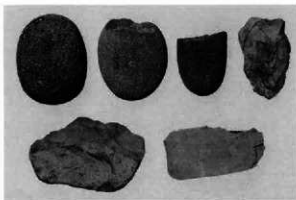
1 2号住居跡出土石器



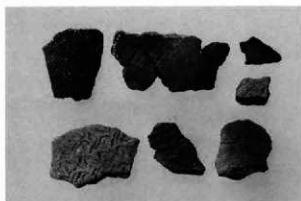
2 2号住居跡出土石器(1)



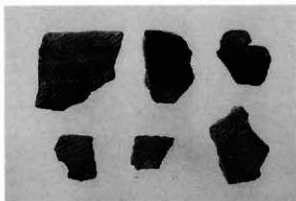
3 2号住居跡出土石器(2)



4 2号住居跡出土石器(3)



5 6号住居跡出土石器(1)



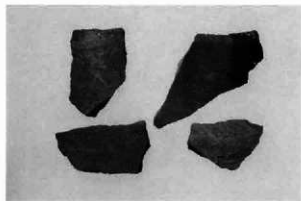
6 6号住居跡出土石器(2)



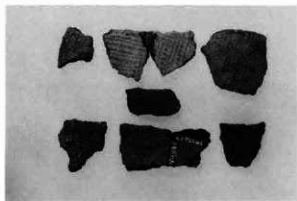
7 6号住居跡出土石器(1)



8 6号住居跡出土石器(2)



1 4号住居跡出土石器(1)



2 4号住居跡出土石器(2)



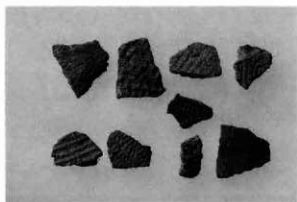
3 4号住居跡出土石器(1)



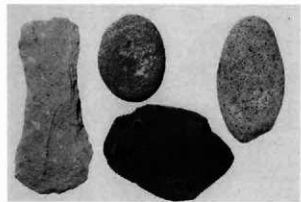
4 4号住居跡出土石器(2)



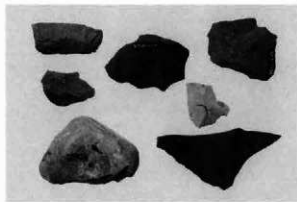
5 7号住居跡出土石器(1)



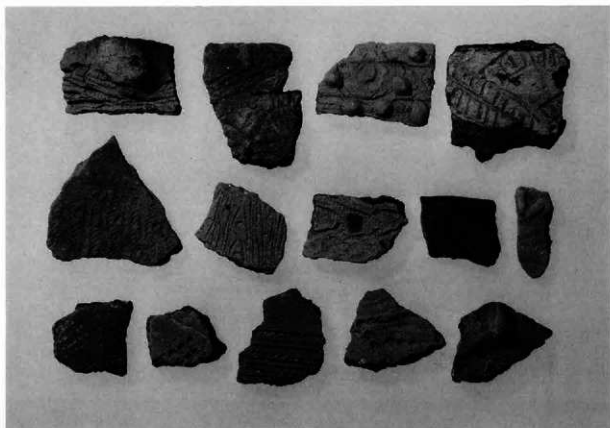
6 7号住居跡出土石器(2)



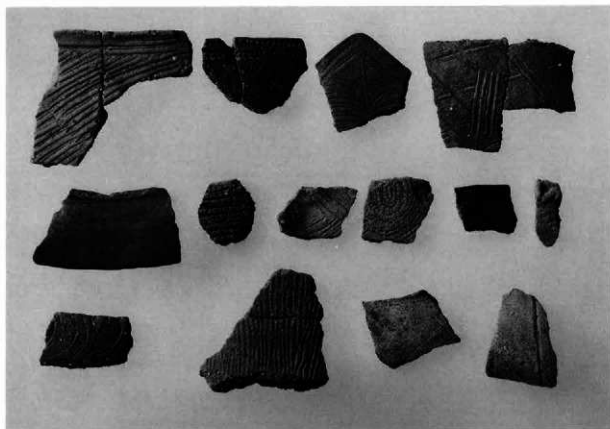
7 7号住居跡出土石器(1)



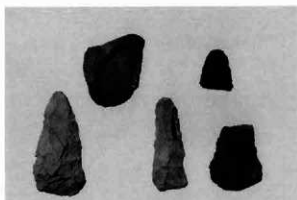
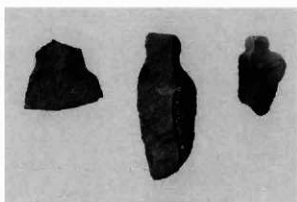
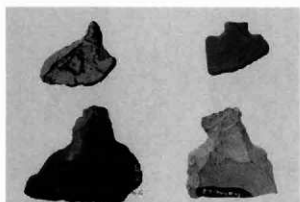
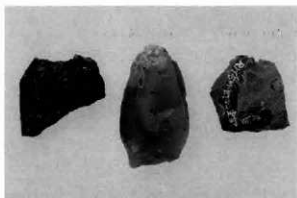
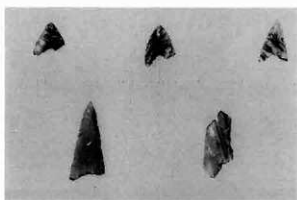
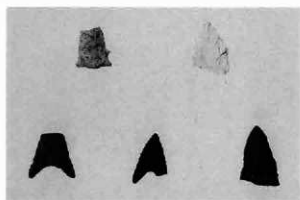
8 7号住居跡出土石器(2)

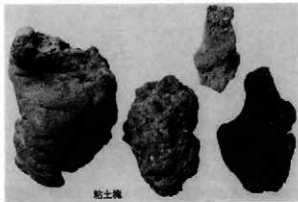
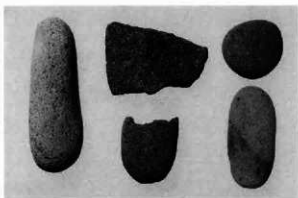
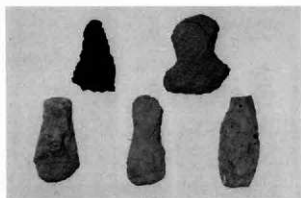


1 遺構外出土の土器(1)



2 遺構外出土の土器(2)



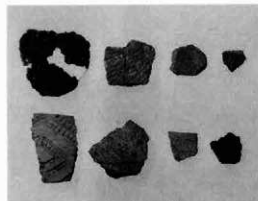


粘土塊

遺構外出土遺物



28号土坑出土土器



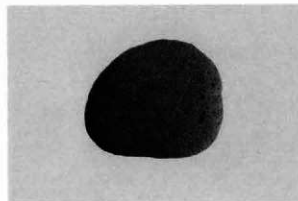
35号(上)・36号(下)土坑出土土器



36号土坑出土土器



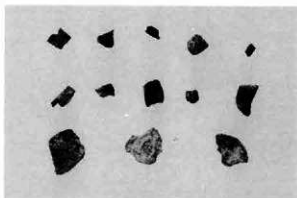
36号土坑出土石器・礫



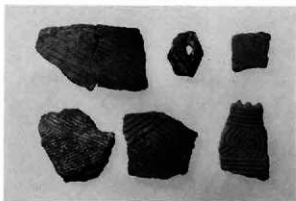
36号土坑出土石器



1 37号土坑出土石器·砾



2 37号土坑出土炭化物



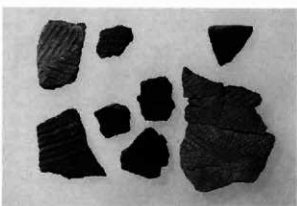
3 38号土坑出土石器



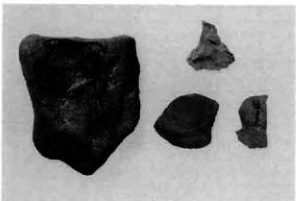
4 38号土坑出土石器



5 38号土坑出土炭化物



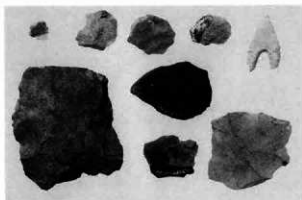
6 39号土坑出土石器



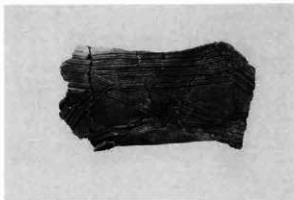
7 39号土坑出土石器·砾



8 40号土坑出土石器



1 41号土坑出土石器



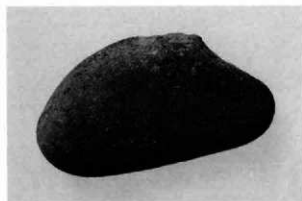
2 41号土坑出土土器



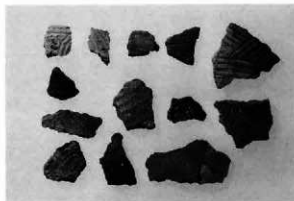
3 41号土坑出土石器



4 41号土坑出土炭化物



5 41号土坑出土砾



6 43号土坑出土石器



7 43号土坑出土石器



8 43号土坑出土炭化物



2



1



3



10



土器



石器



11



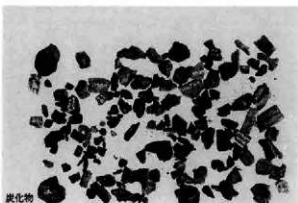
石器



炭化したクルミ



卵石



炭化物



45号土坑—2



45号土坑—7



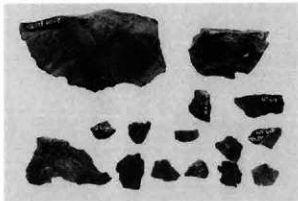
45号土坑—1



45号土坑出土石器



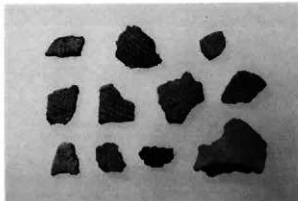
45号土坑出土石器



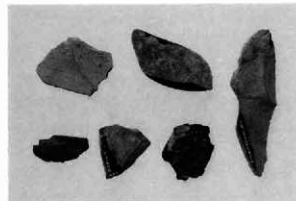
45号土坑出土石器



45号土坑出土炭化物



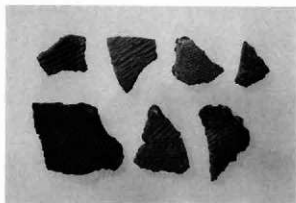
48号土坑出土石器



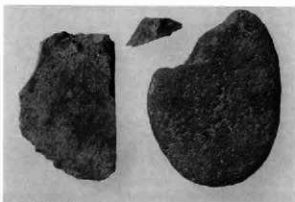
48号土坑出土石器



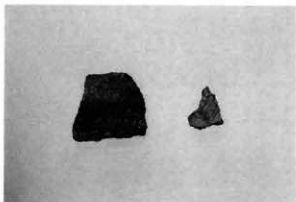
48号土坑出土炭化物



51号土坑出土石器



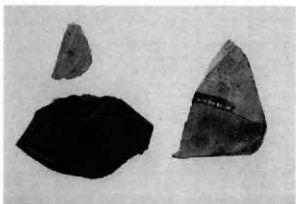
51号土坑出土石器



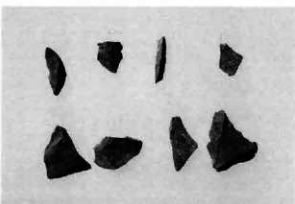
54号土坑出土石器



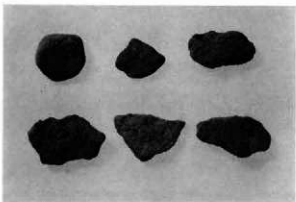
54号土坑出土石器(1)



54号土坑出土石器(2)



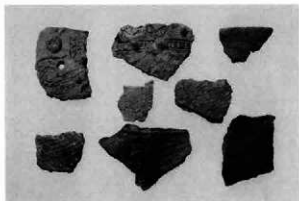
54号土坑出土石器(3)



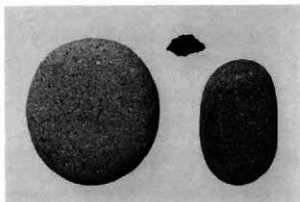
54号土坑出土石



54号土坑出土炭化物



55号土坑出土石器



55号土坑出土石器



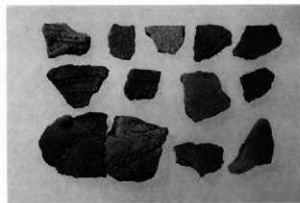
56号土坑出土石器



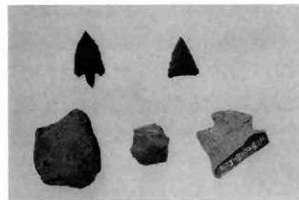
56号土坑出土石器



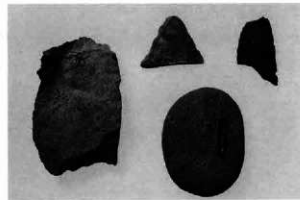
2号溝出土石器(1)



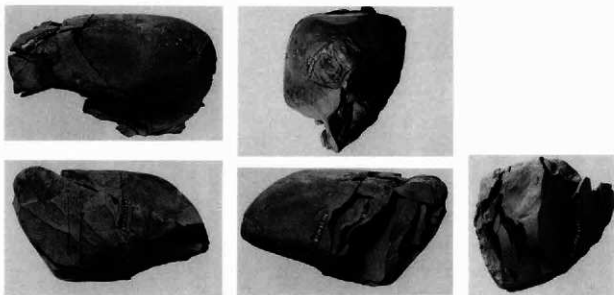
2号溝出土石器(2)



2号溝出土石器(1)



2号溝出土石器(2)



接合状態



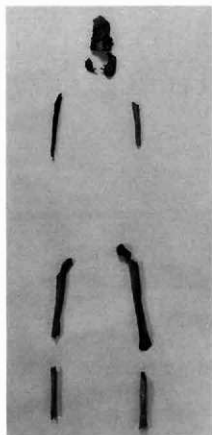
8号住居跡出土の接合資料

個体I



個体II

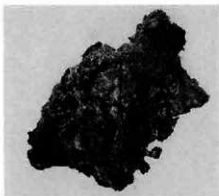




1 骨格



2 頭蓋骨側面



3 上顎

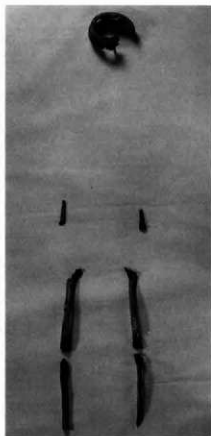


4 下顎



5 齒

29号土坑 1号人骨



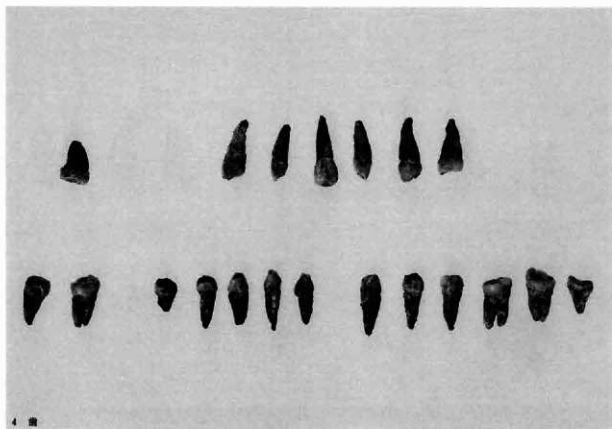
1 骨格



2 上顎



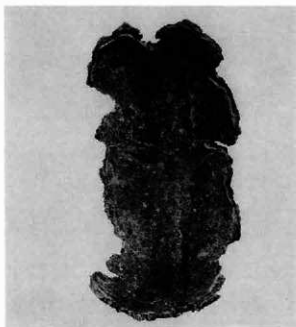
3 下顎



4 齒



1 頭頂骨(上面)



2 頭頂骨(内面)



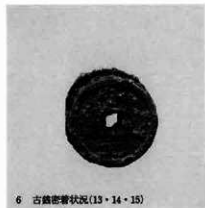
3 頭蓋骨(後下面)



4 頭蓋骨(内面)



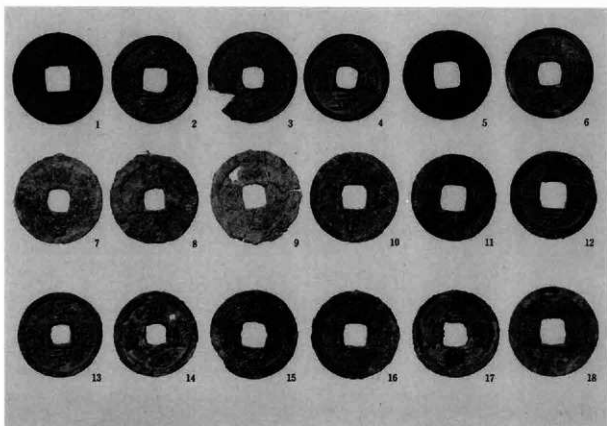
5 古銭密着状況(7・8)



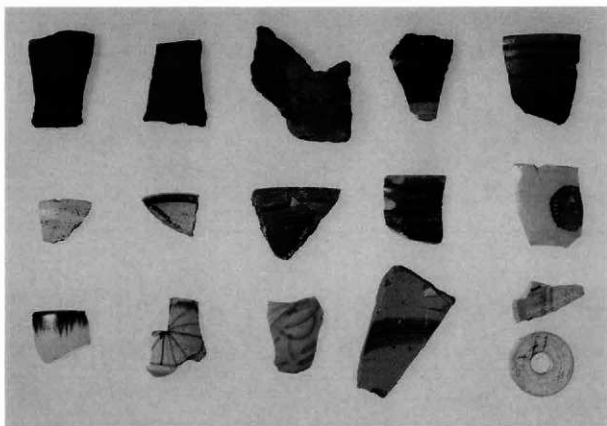
6 古銭密着状況(13・14・15)



29号土坑 2号人骨と古銭密着状況



1 29号土坑出土古钱



2 陶磁器

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第89集

下箱田向山遺跡

一般国道17号(真壁交差点改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成2年3月15日 印刷

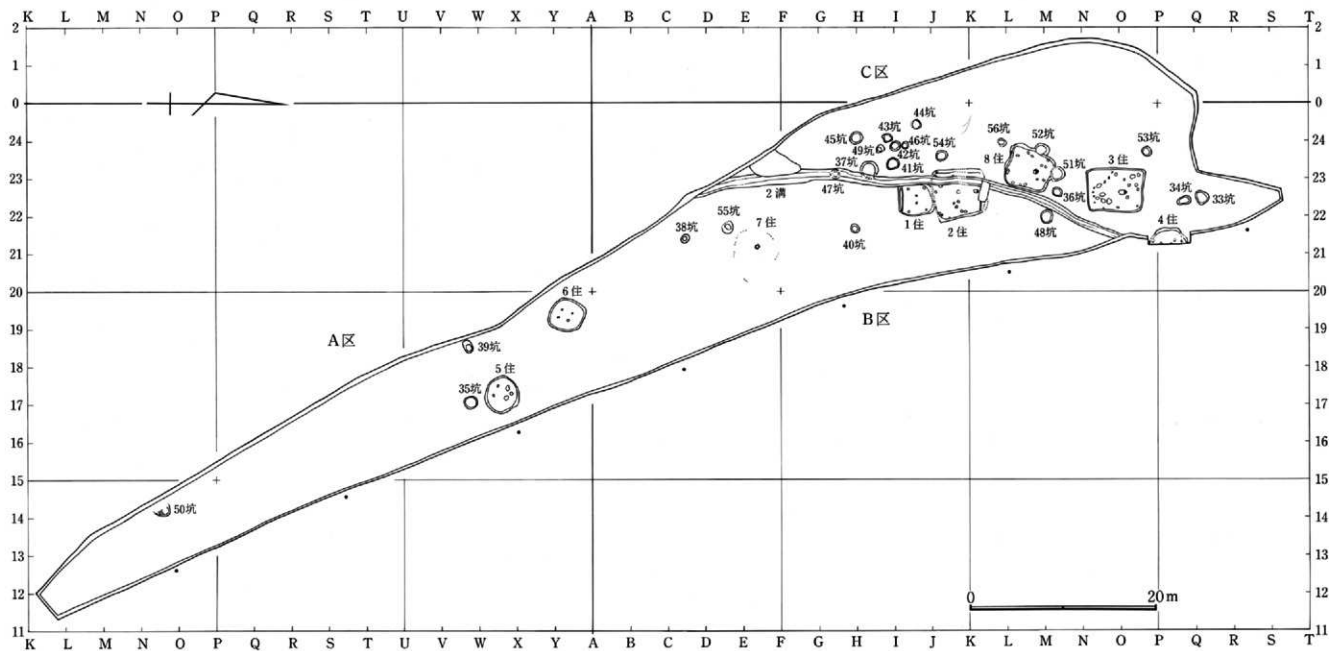
平成2年3月20日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

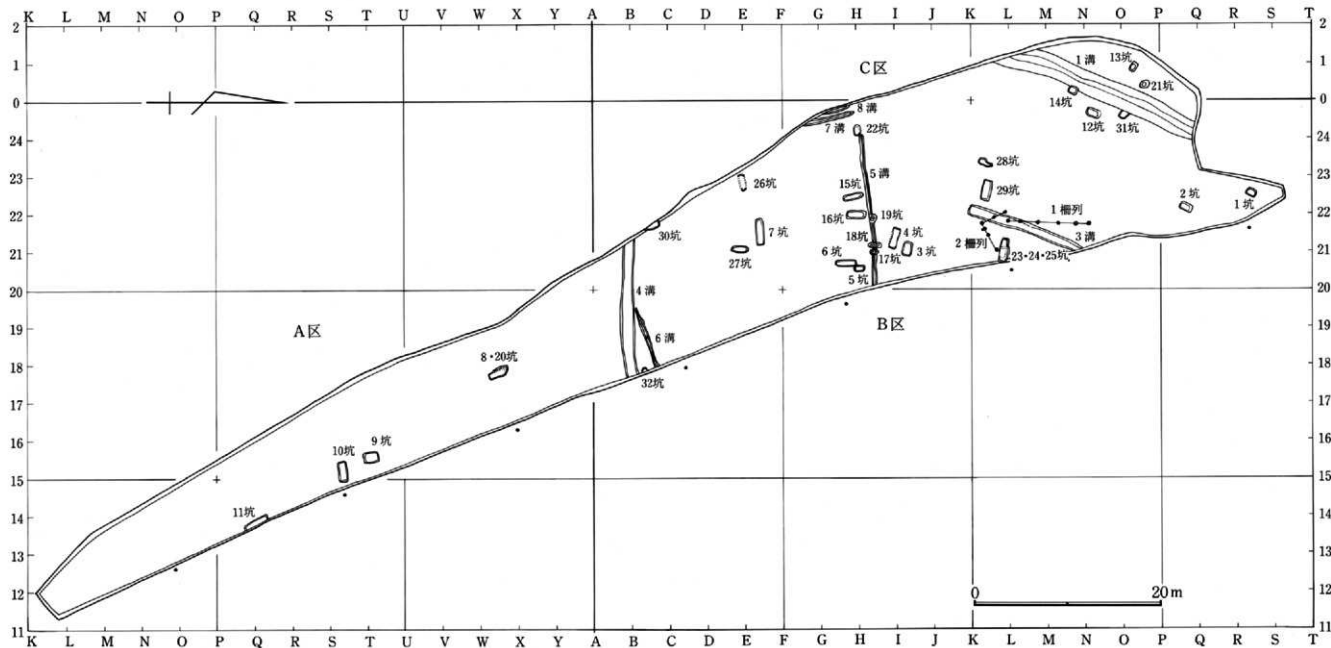
勢多郡北横村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社



付図1 縄文時代の遺構配置図 (1/400)



付図2 中世以降の遺構配置図